

次世代への継承

広島県立賀茂高等学校同窓会

手記集「被爆」及び「姫さゆり」のデジタルアーカイブにあたって

学徒勤労動員そして被爆者救護応援活動を体験した広島県立賀茂高等女学校昭和21年卒業生の手記集「被爆」は、戦後45周年の1990（平成2）年、東広島市立小谷小学校の校長であった江戸芳江さんを中心として、同期生へ寄稿の呼びかけがおこなわれました。そして、還暦年である翌年1991（平成3）年に原爆思い出記録誌としてまとめられました。さらに、戦後50年の節目にあたる1995（平成7）年、新たに寄せられた手記を加えて、編集・発行されました。

同じく昭和22年卒業生の手記集「姫さゆり」は、1997（平成9）年の同期会において、約50年前の蚤体験を面白おかしく語り合ったことをきっかけとして、賀茂高女支部長の高橋繁子さんを中心に、同期生に執筆が呼びかけられ、1998（平成10）年に編集・発行されました。

14歳から16歳にかけて体験した戦時体制の不条理や原爆の被害は、それぞれの脳裏に深く刻まれるも、戦後40年余りにわたってその事実を語り、記録する機会は決して多くありませんでした。それはあまりにも悲痛で絶望的な体験でもあったからだと想像できます。しかし、敗戦から半世紀近くが経過し、戦争・原爆体験の継承が課題となる中、心の奥底で自らを苛み続ける被爆の実相、そして「語り継ぐこと」を避けてはならないという責務の念が、この貴重な証言（手記）集の編集・発行へと導いたのでした。

両手記集の発行から四半世紀余りが経過した今日、戦争・原爆体験の持続可能な継承の在り方がさらに問われています。この度、賀茂高等学校同窓会では、両手記集をデジタル化し、ウェブサイトを通じて広く公開することとしました。デジタルアーカイブにあたっては、通読のしやすさを考慮し、読点の挿入及び漢数字の一部を算用数字に置き換える等の処理をさせていただきました。

この貴重な証言（手記）集がより多くの人に読み継がれ、明日の平和を考えるきっかけとなることを願って止みません。



令和5（2023）年3月
賀茂高校同窓会事務局

戦時下の賀茂高等女学校そして戦後

(1) 学徒勤労働員

日中戦争の長期化により、1938（昭和13）年に「国家総動員法」、1939（昭和14）年には「国民徴用令」が発令され、国民の勤労働員体制が強化されました。さらに、太平洋戦争開戦後の軍需部門を中心とする労働力不足に対応するため、1944（昭和19）年には「女子勤労挺身令」が発令され、学徒動員の通年化によって12歳から40歳までの女性も軍需工場などに動員されました。また、翌年4月からは1年間の授業停止が決まり、担任教師も生徒の動員先へと配属されました。

① 第十一海軍航空廠での勤労働員

現在の呉市広にあった第十一海軍航空廠（広海軍工廠航空部から独立）へは4年生が派遣されました。最初の動員は1944（昭和19）年6月、現在の呉市立横路中学校付近の女子宿舎へ寄宿し、約2km離れた発動機部第二工場（補機工場）で航空機部品の研磨作業等に従事。同年9月には三交代制の勤務となり、宿舎は現在の広古新開に位置した弥生宿舎へ移動となりました。空襲が度重なる中、爆撃を逃れるために山の斜面に掘られた大広隧道内の工場でも作業が行われました。宿舎から工場へは、隊列を組み学徒動員の歌や軍歌を合唱しながら通ったそうです。翌年、昭和20年3月28日の卒業式は、弥生宿舎内で挙行され、卒業後も「女子挺身隊」として引き続き勤労働員作業は続けました。

② 広島陸軍被服支廠学校工場での勤労働員

1944（昭和19）年11月から、賀茂高等女学校は広島陸軍被服支廠の学校工場となりました。3年生の生徒は西・東・中のクラスごとに、本館2階の教室へ持ち込まれた多数のミシンを使用して軍人用の下着（シャツやズボン下）、雨外套の穴かがりとボタン付けなどの縫製作業に従事。被服支廠女子工員の指導のもと、作業時間は朝8時から、夕方6時まで続き、疲れが出てくる午後3時から「特攻時間」と称し、無言での作業で集中力を高めたそうです。

(2) 被爆者救援活動

8月6日の原爆投下（3年生の上田茂子さんは叔母危篤の連絡を受け、広島市に向いて被爆。賀茂高女唯一の直接被爆による犠牲者となる）、そして、8月15日の「終戦の詔勅」を受け、学徒勤労働員は解除。学校工場は閉鎖されて3年生は自宅待機に、4年生は失意のなか、広の東谷寄宿舎から自宅に帰って安堵したのも束の間、8月15

日に広島県から被爆者救援活動の要請が入り、急遽、「賀茂高等女学校救護応援隊」の編成及び派遣となりました。

団長の松山博教諭をはじめ 11 名の引率教諭とともに召集要請に応じた 4 年生及び 3 年生の生徒が最初に被爆地広島に入市したのは 8 月 17 日。その後、市内四カ所の臨時救護所（広島逓信局・逓信病院、本川国民学校、第一国民学校、大河国民学校）へ分かれて移動し、各救護所での献身的な救援活動が行われました。活動は数度の交代を経て、約 1 か月近く続けました。

（3）戦後を生きる

被爆者の救援活動が終了した 9 月下旬から 10 月初旬にかけて授業は再開しました。ただし教科書は従来のもを使用するものの、敗戦及び占領政策によって記述内容の多くは墨で抹消され、修身・日本史・地理等の授業は停止となりました。こうした混乱のなか、昭和 21 年 3 月、過酷な勤労働員や被爆者救援活動に参加した 4 年生は卒業を迎え、3 年生は 4 年生へと進級しました。昭和 18 年から昭和 21 年度の高等女学校入学生は、5 年制の復活そして高等女学校の廃止、新制中学校及び高校のスタート、さらに再編制（地域総合高校）へと目まぐるしい制度変更とともに学生生活を送ることとなりました。

戦後の混乱が続く中、卒業生たちは、筆舌に尽くし難い過酷な体験や脳裏に刻まれた真実を「生きる力」にかえ、懸命に戦後を生き抜いて行きます。一方、教師という立場で女学生に寄り添い、苦しみや悲しみを共有した多くの先生方の存在もありました。そのお一人で、賀茂高等女学校の同窓生であり、昭和 20 年から昭和 49 年まで勤務された 高崎（岡原）スマ子 先生の手記（「思い出」から一部抜粋）を紹介します。

戦後、17、18 年経った頃、町の回覧板で原爆被爆者健康手帳の交付があることを知った。それによって定期的に健康診断をして頂けるということだ。ぼつぼつ市町村の厚生係の窓口をたたく人もあるようになり、私もその時の救援隊に出動したメンバーの要請によって、沢山の彼女らの証人となり、今も証明を続けている。

賀茂高女は引き続いて賀茂高校になって、私は昭和 49 年に退職するまで、いろいろな方法で当時の 3・4 年生に呼びかけて証明をし続けた。あの時の少女の中には、もう白血病で逝った人、ガンで逝った人もあり、引率教師の中にもある。55、56 歳にもなれば、いろいろと思いがけない病気も出てくる。

めいめいが少女の日、垣間見た地獄絵図、あの原爆被爆者の実態に触れた哀しさを、人間がその惨事を戦争という名目で行ったということに、言い知れぬ憤りを抱いたことを、8 月 6 日を迎える度に思い出すのである。そして私たちは、戦争反対、平和を祈るのである。

(3) 作家 大庭みな子と原爆

1968 (昭和 43) 年のデビュー作「三匹の蟹」で群像新人文学賞、第 59 回芥川賞を受賞する大庭みな子 (旧姓 椎名美奈子) は、昭和 19 年 4 月から昭和 21 年 3 月まで賀茂高等女学校に在学。多感な青年期を過ごし、勤労働員及び原爆投下後の救援活動に参加しました。当時の学校工場の様子について、次のような随筆 (「亡霊の囁き」角川書店「野生時代」1975 年 4 月号掲載) を残しています。

二年生の後半と三年生の前半を学業は放棄させられ、学徒動員でミシン作業をやらされた。学校が広島陸軍被服廠の分工場となり、一日十一時間の労働、休日は月に一回しかなかった。

食糧もなく、衣料もなく、考える道具は片っ端からもぎとられた。岩波文庫の赤帯を持っているということだけで自由主義者だと言ってなぐられ、ミシンの針を折ると、国家の貴重な資源をおろそかに扱ったと言ってなぐられた。兵隊さんのシャツを縫う代わりにあやまって自分の指を縫ってしまったときでさえそうである。

病院で割れた指の間から折れた針をひきぬかれたとき、私は声をあげて泣きじゃくった。痛かったからではない。戦争とはこういうものだと言われ、子供心に胸がはりさけたからである。

また、原爆投下後、本川国民学校の救護所で目の当たりにした被爆の実相について、随筆 (精選女性随筆六 文藝春秋「地獄の配膳」一部抜粋) において次のように記しています。

わたしたちが唇の中に水を注いでやった老婆は糞尿にまみれたごぎの下から財布をひきずり出して私に寄越そうとした。私が首を振って立ち去ろうとすると、「あ、あんた、どうか、蠅を、蠅を追っておくれんさい」と赤むけの顔をひきつらせて喘いだ。

瞼のふちにも鼻の穴にも唇にも蠅を這わせた老婆がわずかに身をもがくと、蠅はのろのろと彼女の皮膚から飛びあがり、再びゆっくりとそのぬめった皮膚の上に舞いおりた。

「どうか、どうか、このごぎをひきずって、あの雨の降る中に出しておくれんさい。雨にあたれば少しは、少しは……金はみんなあげる。財布ごと」

まわりの患者たちは無表情に老婆を眺め、蠅の中で寝返りを打った。一時間後、この老婆は死んでいった。わたしにできることはただ雑炊を炊くことと、配ることだけであった。わたしたちが米をとぐのは水道の管が切れて流れっぱなしになっている瓦礫の間だったが、まわりには一面白骨が散らばっていた。指の骨、足の骨、肋骨などがあつた。骨の間に水が流れ、こぼれた米粒や馬鈴薯の皮が流れた。

十四歳の夏、わたしはものを言わなくなった。そしてこの夏の記憶はわたしの生涯を大きく変えた。歩き始めると、甦るこの記憶はわたしを立ち止まらせ、人間というものを考え直させる人骨の杭となった。

被 爆

— 50 周年を迎えて —

広島県立賀茂高等女学校

昭和 21 年 3 月卒業生

再版に当たって

今年被爆50周年を迎えました。全国や広島県内でも戦後50周年を節目とした、いろいろな行事が考えられています。

私達も、今年50周年と言うことから、45年を迎えたときの記録文と、50周年に当たって書き改めて頂いた方の文や、新しくこの記念誌に思いをお寄せ頂いた方の文を加えて編集を致しました。

私達は既に老齢基礎年金を受ける身となりました。諸記事に掲載される時は「老人」という言葉で表現され、自分では「まだ若いのに」と思っているにも自然には勝てないようです。

この被爆記念誌を改めて読み返し、二度と再びあの恐ろしい戦争を起こさない国造りをし、一層の世界平和が築かれることを願ってやみません。

平成7年（1995年）7月

江戸 芳江

はじめに

被爆45周年を迎えました。15才で広島の救護活動に行った私達も、いつしか還暦を祝う年齢となりました。あの原爆の惨状を、口にし、思い出すのさえ避けてきた私達でしたが、年を重ねてきて少しずつ忘れかけている原爆の恐ろしさを、若い人達に伝えなければと考えるようになりました。

幸いにして、この趣旨に早速賛同下さり、寄稿頂きありがとうございました。皆さん全員が、脳裏に焼き付いている原爆の様々を苦しくて悲しい、そして怖い思い出を語って下さっています。一人ひとりのそれぞれ違った感覚で体験を綴って頂いているので学徒動員から原爆投下、救護活動のことなどをお陰で再認識することができます。賀茂高等女学校にその当時の楠瀬広島県知事より、感謝状が届いていましたので、コピーをして巻末に綴じました。こんなことがあったのですね。

原爆体験記のことを高崎先生（岡原）と、加藤先生にお話ししますと、大変お喜びになり、直ちに玉稿をお寄せ下さいました。皆さんと共に感謝申し上げたいと存じます。

最後に、私達の体験を語り継ぎ、どうぞ平和な世界になるように祈って止みません。

平成3年（1991年）7月

江戸 芳江

もくじ

はじめに・再版に当たって

- | | | | | |
|----|----------------|-----|-----|----|
| 1 | ともに生きむ老いつつも | 高崎 | スマ子 | 先生 |
| 2 | 夏 | 加藤 | 宣子 | 先生 |
| 3 | 被爆の思い出 | 脇坂 | 雅子 | |
| 4 | 原爆の思い出 | 菅田 | 敦子 | |
| 5 | 被爆45年を迎えて | 太尾田 | トミエ | |
| 6 | 平和への祈り | 西村 | 美輪子 | |
| 7 | 原爆の思い出 | 貫目 | サチエ | |
| 8 | 原爆の思い出 | 武田 | 幹枝 | |
| 9 | 原爆そして広島8月6日 | 石山 | 信子 | |
| 10 | 被爆50周年に寄せて | 藤友 | 倫子 | |
| 11 | 昭和20年の夏 | 那須 | 実枝子 | |
| 12 | 平和への祈り 翔せませ折り鶴 | 西川 | 美恵子 | |
| 13 | 学徒動員・原爆の思い出 | 大和 | 淑子 | |
| 14 | 被爆者救護体験記 | 岡崎 | 喜久子 | |
| 15 | 絆 | 升川 | 和子 | |
| 16 | 原爆に思う | 森川 | 愛子 | |
| 17 | 15才の夏 | 立田 | 登美子 | |
| 18 | ピカドンに思う | 岡田 | 孝子 | |
| 19 | 原爆の思い出 | 愛原 | 喜久子 | |
| 20 | 原爆の思い出 | 田坂 | 万千枝 | |
| 21 | 原爆体験記 | 榊原 | 富喜江 | |
| 22 | 被爆体験記 | 向井 | 友子 | |
| 23 | 原爆の思い出 | 福田 | 利恵子 | |
| 24 | 原爆の思い出 | 綿芝 | 昭子 | |
| 25 | 原爆の思い出 | 山本 | 寿美子 | |
| 26 | 被爆45年を迎えて | 森本 | ヒデ子 | |
| 27 | 過ぎし日を想う | 小川 | 和子 | |
| 28 | 原爆で思うこと | 鎌田 | 礼子 | |
| 29 | 45年前に思いを馳せて | 辻川 | 澄子 | |
| 30 | 原爆に思う | 江戸 | 芳江 | |
| 31 | 戦後50周年を迎えて | 木村 | 政子 | |
| | おわりに | | | |

ともに生きむ老いつつも

高崎 スマ子 先生

私達の生ある限り忘れぬあの日、うら若かった15才の女学生の少女らも、30才だった私も、広島駅下車と同時に繰り広げられた焼け野原と、収容所の被爆者たちの裸身は半ば腐って、目の回りにも口の回りにも傷口にも、盛り上がるうじの行列に驚いた。夥しい蠅と異臭の中に、目を見開いたまま横たわっていた生死も知れぬ赤鬼のように赤チンを塗られた無残な人の群れ、現代の少女たちなら目を覆い泣き叫びながら逃げるであろう。

凝然として立ちすくんだ私は、ああ、これが、万物の霊長の間人と言えるか、人間の尊厳は失われた。あんまりだと、憤りと悲しみに体が震え、涙が噴き出して止まらなかった。私はむごい地獄絵図を見たのだ。現在でも一瞬思い出し胸を突き上げるときがある。

そのときから私達の脳裏に深く彫り刻まれて、悲しみの糸のようにつながって46年の歳月は流れた。

戦争を生き抜き、共に原爆救護活動に挺身した友も、次から次へと白血病、ガン性の病気で帰らぬ人となった。辛い事である。暗然と思いに沈む事がある。また巡りくる8月6日の原爆記念日、賀茂高女としては唯一人の犠牲者として、今に行方不明のままの3年生の上田茂子さん、広島市のどこの瓦礫の下で眠っているのかと哀しい。

今の広島市のすっかり整った大都会らしい様相を見るとき、地下の夥しい土と共に眠る人々の叫びが、あの日を知る人の胸には響いてくる思いがする。昭和27年の原爆記念日に、除幕された平和公園の碑文は横書きに「安らかに眠って下さい。過ちは繰返しませぬから」と書かれている。これは、故 雑賀忠義 広英文学教授の執筆されたものである。

8月6日は歳々に巡ってくる。決して昔話で終わったのではない。私達一人一人が、平和のためには地球上から、核兵器廃絶を強く訴え続けていかなければならないと決意するものである。

その当時の賀茂高女卒業生たちは、戦争中は、広海軍工廠で15才の動員学徒工員として、私達は共に空襲下にめげず一筋にお国のために働き、終戦後は休む間もなく広島市原爆救護隊として出動し、焼け跡の各収容所で被災者の看護や炊き出しに必死に働いた。

思うに、彼女達は本来賀茂高女四年生の学徒でありながら、常時共に戦い抜いてきた戦友だったのである。この筋金入りの学友達は、それぞれの分野で地方のリーダー

として活躍している。家庭の婦人としてもどこか違うものを持っている。滅私奉公と言え古いが、エゴでなく利他に力を尽くそうとするものを持っている。そんなところが当時の4年生国語科を少しの間でも教えた私は嬉しい。このごろの世相を見て、つくづくと人間の尊厳性について考え込む時がある。

今回、江戸さんは、「学友の原爆記念誌を、集まった原稿を自分でワープロを打ち製本冊子として配布したい」と電話で聞き私は感激した。多くの時間と経費がかかる仕事である。願ってもない私達の青春記念誌を作って頂いて有り難い。大切に保存して取り出しては思い出としたい。皆さん、貴重なたくさんものを心からお礼申し上げます。ありがとう。

セーラー服の乙女も六十歳 戦時勤務
動員学徒 広島市原爆救護学徒たりき

夏

加藤 宣子 先生

- ・被爆者救護に汗あえ励みいし少女四十余年後の声受話器に聞こゆ
- ・キリスト教に深く入信せし君が被爆証明記すひたすらなる面
(高崎先生のこと)
- ・入市後の広島の惨語りしが いつかおし黙し思い分かつも
- ・被爆証明に残生当てんと告らす君と並びて 作成す教え子の証明書
- ・あわれ彼の日原爆死せし女生徒のみ墓に詣ず君と来りて
- ・命の際に少女の脳裏に走りしもの思いみんとして我のおののく
- ・被爆前の産業奨励館写真ありておりおりの記憶あつく顕ちくる
- ・被爆者らに飯すすめいし乙女子よ救護の日々を廃墟に炊ぎて
- ・グラウンドに死者葬りつぐ夜々の炎黙し見ていき看りの乙女ら
- ・被爆者の救護に励みいし生徒ひたすらなりしを今も忘れず
- ・乙女らがひたに取り組みし旋盤の底ごもる音聞こゆる日あり
- ・彼の日々の救護女生徒教職を選び励みで今日退任す

「平和」がひたすら念じられる夏の日々でございます。
お声をかけて頂いたので、思い出の中から拙い短歌を話して見ました。
皆様のご健康とご多幸を心よりお祈り致しております。

被爆の感想

脇坂 雅子

広島 あの原爆は、一生忘れることのない悲しい想いが込み上げてまいります。賀茂高等女学校時代、皆様と共に、原爆の恐ろしさを救護隊と言う体験によって感じたことです。大河小学校だったと思いますが、今でもいろいろ頭に浮かんで来ることは、夜もろくろく休まず看護に当たって、死を目前にして何か言いたいけれど、声が出ないままでこの世を去って行かれた人々、誠に言葉では言い表せない苦しい姿が、目に焼き付いております。

今思われますことは、自分の身に引き替えて考えますと、どんなに辛い日々だったでしょう。想像に絶するものがあります。このことによって、人の運命、命の尊さ、はかなさを痛感いたしました。

最後に、私達の犠牲になられた人々の為に、心よりご冥福をお祈りいたします。

原爆の思い出

菅田 敦子

「ピカーと光ったから、明日の新聞にはピカドンと出るぞ」と言われた言葉は、戦後 40 年あまり過ぎた今も、はっきり覚えています。私は、その時学徒で広の工場にいました。

賀茂高等女学校に帰り、広島 of 段原小学校へ先生に連れられて救護に行き、兵隊さんと一緒に原爆で倒れた人達の世話をしました。「痛い痛い」と言って死んで行かれた人達を覚えています。死んだ人は、学校の運動場の広い所に穴を掘って、黒いコールトンをかけ火をつけて焼かれたように思います。私の頭に浮かんで覚えているのは大きな体格のいいお母さんが、丸裸ではぶせになって背中の腰のあたりに大きな穴が空いていて、その穴の中にウジがわいていたことです。焼けただれて泣きながら、赤チンを塗ってもらうのに並んで順番を待つのを、私達が手をひいて連れて行ってあげたのを覚えています。本当に戦争は厭です。40 年以上過ぎた今私が振り返って見ますのに、生かされているのが本当に不思議に思い有り難く思う次第です。人生 80 年とは言うものの健康で過ごしたいものです。

被爆45年を迎えて

太尾田 トミエ

広島に原爆が投下されて46年、昨秋被爆者救護に当たった当時の思い出を綴るようと、お便りを頂いたときも久しく文章を書くなどと言うことから遠ざかり、億劫で一度はペンを持ちましたもののそのままにしておりました。再度お便りを頂いたとき、娘がちょっとでも良いから書いてみたらと促されて、大事な記念誌の1ページを汚させて頂くことにしました。

戦後長い年月の様々な思い出の記憶も薄れていく中で、被爆者の救護に当たったあの当時のことは、今も私の脳裏に鮮明な思い出として蘇って参ります。

終戦を迎え、学徒動員が解け帰宅し、すぐさまクラスの皆さんと一緒に広島の被爆者の救護に当たりました。広島駅に降り立ったとき、見渡す限り焼け野が原で、所々にポツンポツンと鉄筋の建物の一部残すのみの、悲惨な状況に驚きました。私達が救護に当たったのは大河小学校（国民学校）で、そこには多くの罹災者の方たちが収容されていました。

8月の炎天下蒸し暑さの中で、被爆者の方たちの苦しみは、想像に絶するものがあると思いました。整備された今頃とは違い、蚊や蠅の多い時代でございました。被爆者の傷口にブンブン蠅が止まり、傷口にはウジむしが大きく育ってうようよしているのです。一番私の印象に強く残っていることは、臨月ぐらいであろうと思われるお母さんが爆風で衣類が飛び散り、体には何も纏わず右手で恥部を押さえ、手は火傷でくっついたまま目を閉じ虫の息でした。そばで三才か四才位の男の子が、「お母さん」と呼び掛ける声にも答えはなく、二日後位に息を引き取られました。

小学校の片すみに大きな四角の穴が掘ってあって、畳の上に乗せたまま私達はその穴まで運び、係の人が油をかけて火葬されるのです。何人も何人も私達は穴まで運びました。夕方、元気そうに廊下を歩いておられた学生さんが、翌日は血を吐いて亡くなられました。毒ガスを吸われて傷がないのがかえって仇になったようです。私はこの時の悲惨な状況を終生忘れることは出来ません。

あの時、お母さんの側にいた坊やは、今はどうしておられるでしょうか。必ず立派を社会人として、強く成長して下さっているものと確信しております。

今の恵まれ過ぎた平和の中で、優しい夫、息子や嫁、娘夫婦、元気を7人の孫たちに囲まれて、この上ない幸せを噛みしめる時、二度とこのような悲惨な体験は、味わわせたくないと思っております。

こうした願いの中にも、一昨日はまた悲しいイラクとイスラエル湾岸戦争が始まりました。一日も早く終結し、平和な世界が戻ることを念じ筆を置きます。

主人が「原爆のことを書くのなら、わしの事もちょっと書いてくれんかのう」と申しますので「被爆者の救護の体験記じゃけん、お父さんの事は書かれんよねえ」と申しますと黙って笑っておりました。

実は主人も爆心地より 1.5 キロメートルの幟町小学校で被爆し被爆手帳一号なのです。頭の毛は全部抜け、歯茎はがたがた高熱に何日もうなされ、生死をさまよったそうです。当時は原爆で髪の毛が抜けると後何日かで死ぬると言われたようです。今でも夏になり半袖になると、ちょうどやくざに刺されたような大きなケロイドが出るので、知らない人は怪訝な顔をされるので、いつも私が「これは原爆の傷ですげえ」と言い訳をする始末です。でも主人は「これは原爆の勲章じゃけん」と笑っておられます。結婚当初、母方の祖母や両親が、ピカにあつとるけん長生きできんのじゃないかと心配してくれました。結婚 43 年、今も元気で頑張ってくれています。

修学旅行も新婚旅行もできない時代だったので、後 7 年で金婚式を迎えた時「是非外国旅行に連れて行ってもらったら」と子供達も言ってくれますし、今から楽しみにしております。

平和への祈り

西村 美輪子

私は、原爆投下後の大河小学校での救護活動を、思い出すまま書き綴ってみます。

いつも最初に思い出すのは、長い大きな時計のかかっていた部屋での光景です。幼児との別れに死に化粧を施す母の姿、泣きながら紅をさす指先の様は、居合わせた者はその心情を思い、皆貫い泣きをしたものでした。また多く運び込まれた負傷者の中に、呼吸困難に陥り、体一面青い斑点のできた老婦人、苦しい様子を見て、すぐに優しい言葉をかけながら体をさすってあげた友人、私は青い斑点が怖くて躊躇してしまいました。この時の友人のことは、今も尊敬の念で思い出します。その老婦人は、数時間後私達の見守る中、一人一人に感謝のまなざしと、頷くようにお辞儀をされ息を引き取られました。医師の手当も受けられず、名前も告げられないまま逝かれた人達、さぞ残念だったことと思います。

夜は、二階の広間で仮眠する皆の所に、異様な臭気がします。誰かが「そっと夜の来るのを待って、亡くなった方々を、砂場に集め焼いているのだ」と教えてくれました。ある時は、外来者用の仮設診察室の方で、「ギャーッ」と言う悲鳴を聞いて、友人二、三人で駆け付けるとちょうど医師が、女の子の指が一塊になっているのを、剥がしている所でした。断末魔にも似た悲鳴、私達はその場から逃げたが、悲鳴が追って来るのです。私達には地獄を見た思いでした。火傷の手当をする時にも、油紙を剥がすとうじ虫がわいていたのを思い出します。

あの日から戦争のない 50 年の時が過ぎました。この平和が、多くの犠牲者の方々の上に成り立っていることを忘れてはならないと思います。改めてご冥福をお祈りし、今のこの平和がいつまでも続くことを心より神に祈りたい。

原爆の思い出

貫目 サチエ

原爆，いやピカドンと言った方が私達女学生には通用語になっていた。昭和 20 年 8 月 6 日午前 8 時 15 分，広島方面の空がもくもくと黒煙をはいていた。広島ガスが爆発したらしい。みんな寝不足のどす黒く油のしみた顔で空を見上げた。私達 3 年生は，広の補機工場へ学徒動員で働いていた。飛行機の部品を旋盤を使ってねじ切りの仕事をしていた。3 月か 5 月かどちらか分からないけれど，大空襲で補機工場が一部焼けた気がする。その大空襲の時はまともに戦争を見た。焼夷弾が落ちたり，アメリカの B29 の爆撃機が飛んで来た。下から攻撃してもなかなか命中しなかった。爆弾が落ちて来るたびに物凄い爆風だった。

私達はマッチ箱と言っていたが，地上に箱のようを物が建っていたその中へ目と耳をよそって伏せていた。とうとうトンネルの中に機械が持ち込まれ，そこで仕事をするようになっていた。三直交代で私達は 8 月 6 日は夜中の 12 時から朝まで勤務をした。ついに敗戦になり広の駅で，〇〇海軍中尉と一緒に敗戦になったと言うことで大泣きをした。これが工場で働いた最後の別れだったと思う。「花も蕾の若桜五尺の生命ひっさげて…」と朝晩軍歌を歌いながら工場へ行ったものだ。終戦になり賀茂高女に帰校した。また広島へ原爆被災者の食事の支度に動員された。私は，本川小学校へ行った。日にちははっきり覚えていない。広島駅から暑い中の焼け野が原を歩いて行った。途中電車が立ち往生になっていた。また馬がそのままの姿で死んでいた。本川小学校の二階が私達の部屋であった。雨がその晩降ってポツリポツリと雨垂れが落ちてきた。すぐ前の校庭では，毎日毎日患者さんの死体が焼かれていた。何とも言えない異臭が絶えずした。私達の居る場所から 10 メートルくらいの場所であった。食事はお粥とジャガ芋の煮付けを，毎日毎日調理したような気がする。お粥は缶詰の空き缶を三角に切って作った杓子を使ってよそおったように思う。

患者さんは，コンクリートの所にむしろを敷いた上に横たわっておられた。手足の火傷に赤チンを塗っておられた。その火傷には，白いうじがうようよ動いていた。一人の老母さんが「財布を開けて下さい」と私に懇願されたけれど，迷って開けて上げなかった。財布は手製の物であった。患者さんから「水を下さい」と言われたが，これも迷って上げなかった。心残りはいろいろと走馬灯のように浮かんで来る。

焼け野が原にポツンと仮トイレが建っていた。一か所だけなのでそこへ行こうと思うと白骨だらけ，場所を変えても白骨だらけで大変困った。また，そこにはいろいろとメモが書かれてあった。多分尋ねて来られた人が話されたのであろう。背囊と水筒を持ち疲れ切った復員兵さんが，患者の間を探しておられた。

帰途は福屋，中国新聞社の前を通った気がする。子供の泣き声などいろいろと騒音がしていた。なんとも言えない気がした。重い足取りで駅に着いたように覚えている。私の思いのまま書いた。

原爆の後遺症と我思う 兄の病いは長びけるらし(63才死亡)
我と母 原爆検診受けに来つ ベットに並び 採血されぬ

原爆の思い出

武田 幹枝

昭和 20 年 8 月 6 日午前 8 時過ぎ、三直明けで工場より寮に帰り、救急袋、防空帽を取った瞬間、ドカーンと言う鈍い音と同時にぐらぐらと寮が揺れる、向かいの部屋より「へちゃげたあ」と大きい声がする。西側の窓を開けてみると、広島の方に白い雲のような物がむくむく上がって来る。見る見るうちにピンク色を帯びて来た。今に言う「きのこ雲」である。

誰言うとなしに、広島に大型爆弾が落とされ、全滅らしいとの噂が広がる。9日、また長崎にも同じことが起こった。8月15日緊急放送があるとの事で皆広場に集まった。敗戦を知らせる陛下のお言葉であった。

戦争は終わったらしい。「学徒は急いで引き揚げよ」とのこと、翌日16日身の回りの整理をし、夕方までにどう列車に乗ったか今ははっきり覚えていないが、海田より窓から車内に入り、八本松駅ではまた窓から出たことは覚えている。夕方家に着く。学校より下級生により連絡がはいる。明日17日朝8時までに駅に集まり、被爆者の炊き出しに一週間くらいの予定で行くとのことであった。

広島駅に着いて大変驚いた。駅は勿論のこと市内は全く焼け野原と言うより瓦礫の広場と言うほうが当てはまるような感じで一言も出なかった。まだあちこちで煙も出ているし、金庫か冷蔵庫らしいものが赤く焼きただれて変形して横たわっていた。どこをどう歩いたか目印はただ一つとしてない市内を、大八車に米俵を積んで段原小学校方面に向かった。天気もあまり良くない日が続く。焼け残った傾きかけた講堂の中に、大勢の被爆者が男女の見分けがつかない位全身真っ黒に焼きただれ、ぼろ布が下がっているような感じで皮膚がよじれて垂れている。8月の炎天下素足でアスファルトの上を歩いて、毎日治療のための行列が出来、ただ火傷の上に赤チンのようなものを塗って頂き帰って行かれる姿は、全く生き地獄の感じがする。人、人、人間とも思われない状態である。ただ呆然として私共の頭、口、ペンでは、この現状はどう伝えてよいか、実際に見た人でなければ説明出来ない。朝、おむすび、たくわん二切れずつ頭の所に置いて上げる。前日の夕食を残した方は、「今日は欲しくない」と言われる。昼食を運ぶと既に事切れて、必ずと言う位俯せになり、体の下には小さいウジがわいている。

雨の降る日は雨垂れが体の上に落ちる。懸命に位置を移動しようとされる痛ましい姿、手伝ってあげようと体に当たると、皮膚が剥がれるのでどうしようもない。仕方がないから新聞紙か何か紙切れを探して来て体に覆って上げる。夜は近所の民家に泊まる。トイレは講堂の裏にあるため2～3人で行く。電気もない暗闇の中で眠れぬ夜

を過ごしているたくさんの患者さん達は、私達の足音を聞き「ねえちゃん、水、水」と声をかけられるが、禁じられているので足音を忍ばせて帰ってくるが、どうせ駄目な方ならお水をあげればと思いつきながら皆と話す。ほんとに今考えてもやりきれない気持ちである。

食事を運ぶのももう厭になる。毎日朝に夕に4～5人位ずつ亡くなる。同じように始末される。それも運動場の隅に穴を掘り、丸太を渡してその上に亡骸を並べ油を注ぎ一度に火葬される。どんな気持ちで息を引き取られたことかと思う時、とってもせつない涙が出て来る。あれから45年、皆平和で幸福に暮らしている。二度と戦争してはならない。

(前回のこの手記が最後となりました。ご冥福をお祈り致します。)

原爆そして広島8月6日

石山 信子

私はその時15才のあどけない少女でした。あの地獄そのものの8月6日の広島的光景は、還暦を迎えた今も頭の片すみにはっきりと残っています。私達は、当時広十一空廠で学問はせず何を作っているのかも知らず、旋盤工みたいなことをしていました。せっかく胸を膨らませて狭き門の県立賀茂高等女学校へ入学出来たのに、当時は県立の女学校へ進むことが花嫁となる一番良い条件の一つでした。

原子爆弾が広島へ落とされました。私の弟は当時中学1年生でしたが、広島市内へ家屋疎開のため、学徒動員として出ていました。それが行方不明で、何でも広島へ1トン爆弾が落とされたとかいろいろデマが飛び交いました。私はすぐに広から歩いて自宅に帰りました。母と妹は学校からお寺といろいろ運ばれて来る負傷者が、もしや弟ではと探しに行きました。私と父は広島へ出ました。広島は町の海と化し、広いと思っていた広島の何と狭いこと、己斐も横川もすべて手の届きそうな所に感じました。それが火の海であとは死体と負傷者の山で、何とも言えない生き地獄でした。あちこち探し7日の明け方、比治山の大きな楠の木の根元で、弟は死体で見付かりました。兵隊さんに1杯の水を貰って「家に帰りたいのう」と言って生き絶えたそうです。父はそれを荒縄で背負って約20キロ離れた家まで歩いて連れて帰りました。途中で人が「痛かろうに縄がくいこんで」と言ったそうです。父は「何ももう分かりませんよ」と言って我が子の重さも忘れて連れて帰りました。家に着いた時、既にうじ虫がいっぱい体をはっていました。顔は3～4倍に水膨れと火傷で二目と見られない姿でした。白い上衣と帽子ゲートルの所だけきれいな皮膚で後はボロ布を引き裂いたように肉も皮もぶら下がり、熱いのと家に帰りたいので転がり回ったせい小石が焼けた所の皮膚の中へくいこんでいました。死体が見付かった者は不幸中の幸いで、身元不明の死体が比治山の上から下谷までぎっしりありました。

しばらくして、私達は学校からの連絡で救護のため広島に行きました。もう怖いものも何もないカラッポのような心でただ兵隊さんの命令のまま動きました。こんなひどい出来事を2～3枚の原稿用紙にまとめられるものではありません。また表現できるものでもありません。この時から私の人生観も変わったみたいです。私も終戦の日当たりから高熱、血便と続いて赤痢と間違えられて隔離されたり、貧血になったり今考えると原爆のためと知り、今さらのように怖さを後世に伝えなければとしみじみ思うこのごろです。私の人生も原爆のせいでも変わったことも事実です。言いたいこと書きたいことは山ほどありますのでこれくらいの文章では満足出来ません。毎年発行をしたいものです。そして私達乙女時代の声を後世に残したいものです。

被爆 50 周年に寄せて

藤友 倫子

1月17日未明の阪神大震災は、死者五千人を超す関東大震災以来の大惨事で、戦後50年の節目の幕あけを、こういう形で迎えるとは誰も想像しえなかったことであり、近代都市が一瞬に崩壊した現状をテレビで見て、被爆直後の広島市内の光景が一瞬、二重写しとなった。

勿論、被爆と震災とは当然違うが、都市災害と言う一部の共通点はあるように思う。特に西日本の拠点である阪神地区の被災は日本全体にとっても大きな打撃を及ぼすことは間違いないところだが、70年草木も生えないと言われながら、奇跡的復興を成し遂げた広島をよき先例として一日も早い復興を祈りたいと思う。

さて、広島は今年被爆50周年を迎えた。現在日本は、先進国と呼ばれる国の仲間入りをし、長い間外国との戦いのない年月を過ごし、内政の複雑さはともあれ一応経済大国の国民としての平穏と裕福さに恵まれている。

昨年はアジア大会も開催されたし、曲がりなりにも被爆者援護法も成立することが出来た。

また、原爆ドームを「世界遺産」にと県民ぐるみの広島の願いが進展している。東西の冷戦崩壊後もなお楽観を許さない核兵器をめぐる状況に対し、必死に平和を訴え続けるドームは、被爆都市ひろしまを象徴する記念聖堂であり、世界に類のない文化財でこれを残すことは私達の務めでもあると思っている。

被爆50年を機に、この世の生き地獄を見て来た者として、戦争の愚かさ悲惨さを、意識の中で風化させることのないよう、次の世代に語り継ぎ、平和都市ひろしまの一員として、心豊かに力強く、これからの人生を生きて行きたいと希っている。

手記遅々ところろ乱るる黄水仙

八月六日コップに充たす祈りの水

昭和 20 年の夏

那須 実枝子

私の女学校 4 年生の夏は、既に 45 年も経とうと言う今もそこだけ光が当たっているように、鮮明に思い出されてくる。

原子爆弾は、呉市広町の宿舎の庭に走り出て、あの異様な雲の爆ぜのぼるさまをしばらく見ていた。そこが広島市であったことも放射により、何万の人が焼き殺されていることは勿論、父や中学 2 年の弟が建物の下敷きになっていたことなど全く知る筈はなかった。

終戦後、無事に家にたどり着いていた父と、無傷であった弟との話もそこそこに、私は救護の為、広島へ入って行った。

ところが、8月の終わり頃から弟は高い熱が出始め、広島療養所へ入院することになった。弟は、父に背負われて荷車に乗り、家を出て行った。隣のご主人も付いて行って下さり、長い廊下では背負って下さったことを後で知った。

8月の終わりから9月の始め雨のよく降る年であった。私は、父方の伯父に連れられ、雨の中を療養所へ行った。

病院の窓は開け放たれ、被爆者で、どの部屋も満杯のようであった。弟は息を吸うのが苦しいらしく、「うう…」と声を挙げて呼吸していた。私は走り寄って、背中をさすったが、妹は大声で泣き出した。母は気が狂ったように、氷枕を入れ替えては駆け寄って来る。そして休みなく足をさする。弟の様子は、刻々と苦しさを増していった。あまりに呼吸困難な弟の様子に、私まで息苦しく廊下に出ては深呼吸をしてみた。廊下には、七輪など夥しい生活用具が所狭しと並び、大勢の看護の人達の、氷を割る音がカチカチと鳴り続けていた。私の所も母方の叔父が、三原まで氷を買いに行ってくれたらしい。

次の夜、母は「今晚家に帰るから」と言い、私と一緒に帰ることになった。暗い雨の中、母は走るような足早であった。母は、弟の新しい浴衣の寝間着を縫う積もりだったのだ。弟の浴衣の出来上がるまで私も深夜過ぎまで必死に手伝った。気が付いてみると、母は泣き通しに泣いていたようだ。私はこの時、弟は死ぬのだなと思った。母の手裁きの早さは、病院で待っている弟のことをただ思っただけのことであつたらう。その後、弟の体に紫の斑点が、水玉のように散らばって現れてきた。息苦しきは、まるで吠えるような呼吸音となっていた。そこにいるだけで息詰まる思いである。同室の患者さん達も、それぞれの苦しみのようで付き添いの父母達は、お互いに情報交換しながら励まし合っていたらしい。

「うちは髪の毛が抜けないから」と父が母を慰めていたけれど、やがて髪も抜け始

め、9月4日弟の呼吸は止まった。

私は、再び救護隊として広島市大河小学校に出掛けて行った。私は我が家のこの大事を付き添いの先生に一息に話してしまった。

これを書いていると、弟の中学入学当時、軍人勅諭を覚えていた姿とか、細い指でゲートルを巻いていた様子など浮かび上がってきて仕方がない。13才の弟の魂が、今夜は私の側へやって来て遊んででもいるのだろうか。

母は、あの悲しみを乗り越えて、今平穏な83才を生き続けている。今度は私達が、親のような気持ちで母を見守っていく番だと思っている。

平和への祈り 翔せませ折り鶴

西川 美恵子

暗い青春1 ページを聞き、後世の平和の為に、戦争の恐ろしさを伝える義務がある
と思い、筆を執りました。

広島駅に降り荒涼たる市街を見た時、あまりの変貌に声もでないまま先生の配置に
従い、友達と大河小学校の救護所の外来患者のお手伝いとなりました。患部を濡らし
膿や血の付いたガーゼを取る辛さに喚ぐ子、我慢する少年と様々。その中でも和服の
若奥様は、救護所に着くと必ず倒れられるので、30 分か 1 時間休まれて治療を受け
て、路地裏へと帰って行かれました。又頭が前後真二つに割れ、赤い脳味噌がいちじ
くを大きくしたように見えている少年は、ときどき自分の力で帰ることができず、戸
板に乗せ祖母と二人暮らしの崩れ掛けた家に運びました。夕方になると、私達大きな
者は、死体安置所である裁縫教室から、腐敗のひどいものや確認の済んだ亡骸を運び
ました。戸板の上にも 1 枚掛けただけの葬式の後、運動場の端にたくさん掘られた
穴に次々と運び、茶毘に付しました。窓からは、一晩中とろとろと青い火が見え、室
内では患者さんの苦しそうな呻き声、親子の死別の嗚咽と、真っ暗な夜の出来事が手
に取るように聞こえ、地獄の釜の上にいる思いでした。そのうち東の空が白み、ご来
迎とはこのことかと思って元気を出して奉仕に励みました。

私の身内にも、原爆の犠牲になった者がおります。傷一つないのに 1 週間足らずで
死んだ者、お岩のような「ケロイド」ができて尚生き残った者、父などは直接被爆し
ていませんが、従兄を探し歩いたためか金たらい一杯の鼻血を度々出し、原爆投下後
20 余年の寿命も癌で終えました。

有形無形の核の恐ろしさを見たり、「戦争は二度とごめんだ」と言う思いを強くし
ております。あのころを思うと、今は夢のようです。音に脅えることなく、食足りて
礼節を忘れてしまったような気がします。今や宇宙旅行の時代、地球上で争っている
時代ではないと思います。誰もが仲良くして、自由に世界を飛び回れる世の中にする
ために一人一人が努力し、向上していくことを願って止みません。

最後に、戦争（原爆）で若い命を散らした諸兄弟の、ご冥福をお祈り致しまして筆
を置きます。 合掌

秋夫や 千の折り鶴 翔せませ

学徒動員・原爆の思い出

大和 淑子

太平洋戦争も日ごとに熾烈となり、忘れもしません昭和20年1月19日、ついに私達女学生（当時3年生）にも学徒動員命が下がり、呉市の海軍空廠へと赴くことになり、小雪の舞い落ちる西条駅頭で、先生方在校生の皆さんから、万歳の声に送られて凛々しく出発して行きました。厳しい訓練を受けてそれぞれの部署につかされ、夜となく昼となく頑張り続けたものです。

寒い冬も過ぎ、花開く春が訪れ、そのころから空襲は一層烈しく、毎日のように防空壕に逃げ回り、そして夏がやってきました。ソ連参戦果てはあちらこちらの玉砕の報道で耳が痛いニュースばかり飛んできていました。ちょうどそのころ私達の工場も、いつ爆破されるかも知れず、山の中の水道に機械など運びこんで仕事に従事し、日夜か弱い腕を奮って油まみれになって働いていました。

8月5日の夜の事です。いつものように軍歌を歌って宿舎を出て行きました。夜勤です。8月6日朝8時の休憩の合図とともに遂道より出ました。腰を下ろして一息付いたころ、パッと閃光が目に入りました。と同時に広島方面と思われる上空より、無気味と言うか異様な雲がむくむく上がっていきます。足が立ちすくんでしまいました。戦局もこんなことだし、「何か起こったにちがいない」そんな予感が脳裏を掠めました。翌日原子爆弾と聞かされ、烈しいためらいが体を揺さぶり続けました。

やがて8月15日敗戦、私達の動員も解除となり、重いリュックを背負って自宅へと帰って行きました。自宅で休息するまもなく、賀茂高女の方より連絡があり、広島へ救護に出向くようにとのことでした。広島駅にようやく満員列車でたどり着いて見ると、辺りは焼け野が原でまだあちこちより煙が出ていました。駅の構内また路面には被災者が溢れていました。地獄絵そのものでした。目を覆いたくなる情景で、話には聞いていたがここまではと放心状態となりました。私達は炎天下徒歩で西署まで行き、そこで配属されたのが本川小学校でした。ここは爆心地に近いだけあって、重症な被災者ばかりで焼けただれた体、顔面は人の様相すら失って、男女の区別も見極めがたい程です。この情景は言語に絶するものがございました。そのうえ飢えに苦しみ傷の苦痛に耐えられぬ人ばかりの収容所でした。私達が出来ることといたら食事係りです。主食のおむすび副食等を運んでいました。副食と言っても乾燥した漬け物だったのです。現在では想像もつかないようなことです。でも喜んで食べるように食べておられました。しかし翌日は様相が変わり、苦しみを訴えながら帰らぬ人となられたのです。肉親とは別れ別れ一人寂しくの死は、心中はどんなだったでしょう。夏の事です。直ちに荷車に乗せて、運動場の隅に掘られた2～3か所の穴の中へ、地方か

ら出動された消防団の人達によって葬られて逝かれました。このようにことが何回も繰り返されました。今日に至っても目に焼き付いて離れません。こんなことがあって良いのでしょうか。あの忌まわしい戦争は二度とあってはなりません。

それにつけても今度の湾岸戦争は、一刻も早く終話し、世界の人が平和に暮らせる目が来て欲しいものだと願わずにはられません。

被爆者救護体験記

岡崎 喜久子

広島、長崎の原爆投下そして終戦 … あれから 50 年を迎えようとしています。私達もいつのまにか老人と呼ばれる年齢となっています。体の不調を感じながらも、今日の日まで生かされていることをまず感謝しています。

年と共に記憶もうすれ、当時の事を詳細には覚えていませんが、頭の中に強烈に焼き付いている事を少し述べてみたいと思います。

焼け野原となった広島を一望しながら、私達は段原小学校の救護所へと足を運びました。途中出会う人々の顔や手などのやけどの部分に赤チンを塗布され、傷の痛みにも皆手を前に垂らして歩かれる異様な光景に驚いたものです。

救護所に着いての私達の仕事は、食事の支度と分配の役割だったと思います。小学校の講堂が収容所になっていたと思います。崩れかけた校舎の一角で炊事をしたように思います。何しろ死臭と悪臭の中での仕事ですので、三日間の奉仕のうち二日目の晩まで食事が喉を通らなかったのを覚えています。お米を平釜で炊いて「むすび」を作るのに、蠅がごまを振った程取り付くのです。その「むすび」と透き通るようなお粥を竹の筒の食器に注ぎ、収容所の講堂に運び分配しました。

その時私がつくづく人とは「衣食たって礼節を知る」と言う格言を痛切に感じました。病む人も介抱する人も、一つの「むすび」を得る為に喧嘩腰なのです。生きる為に … 広い講堂には何人収容されていたのか見当もつきませんが私達が間をくぐって廻る足元にも何人かの死体がありムシロをかけてあり被爆者特有の斑点の足だけがのぞいていたのが頭に残っています。それでも私達は淋しいともコウイとも思わなかったのは不思議です。夕方には校庭の隅で何人かを茶毘にふされるのです。重油をかけて焼かれる光景は葬られると言う表現にはあたらない様に思いました。

人間とはこのような極限に達すれば無感動になるものだろうか、と自問自答したものです。又別室には死期の迫った人ばかり数人横たわっておられ、介護する人もなくやけどはひどく背中には床ずれが出来て穴があき、傷口にはウジがはい回る有り様です。50 才位の女の方が苦しい中から私達にか細い声で「水を頂戴、お姉ちゃん水を…」そんな声を聞きながらも、誰言うとなく「水をあげたら死んでんじゃと」と言って、そこの廊下をす通りして講堂の方に食事を運んだものです。苦しみに苦しむその人達に何の医術としての施し様もない時でも、やはり延命のために水をあげてはいけなかったのだろうか、私はいつまでもたっても水をあげなかった事が、とても罪悪感のように思えて忘れることが出来ません。広島から帰って髪を抜けた人、何となく身体の不調を訴えた人いろいろ障害がでた様に聞きました。しかしその当時は原爆のせい

などとは夢にも思いませんでした。原爆症だ、放射能だと取り沙汰される様になったのは、それから何年かたってからの様に思います。ソ連のチェルノブイリ原発事故の残留放射能で苦しんでいる住人の様子をテレビで見ると、当時の広島とよく似ているなと思いました。私達のクラス会のある度毎に、名簿から次々と消えていく級友の方の事を偲ぶ時、なぜか原爆との因果関係があるように思えてなりません。未だに数多くの人達が後遺症に苦しんでおられます。救護活動の体験を通して、このように悲惨な戦争は二度と再び地球上にあってはならをいと痛切に感じるものです。又広島の声として世界に核廃絶を強く訴えなければならぬと思います。

絆

升川 和子

被爆 45 周年を迎え、被爆者のご冥福をお祈り致します。あの日のことは忘れることはありません。私達は広の軍需工場に学徒動員として働いておりました。あの 8 月 6 日の朝は私達は三直でした。真夜中の作業を終えて外に出た時です。もくもくと盛り上がるきのこ雲を見たのは、勿論原子爆弾とは知らず、度重なる B29 だと思いました。その時です。「あ、お父さんだ」と私の側の彼女が叫んでその場にうずくまりました。そして「確かにお父さんを見た。別れにきたんだ。きっと今死んだんだ」と言うのです。「そんな筈はない。お家にいらっしゃるんだから、大丈夫だ元気だ」と慰めましたが、二人とも不安は募るばかり体がぶるぶると震えました。やはり彼女のお父さんは、その日の朝広島の家屋取り壊し作業に、勤労奉仕として出動され犠牲者となられたのでした。

彼女のお父さんのように、それぞれに心を残し叫びながら苦しみつつ死んでいかれたことを思うと、戦争を憎まずにはおられません。目をつむると、今も呻き声が聞こえてきます。それから彼女は元気に働き続けました。

広で終戦となり、私も彼女と貨物列車で真っ黒になり、どこから歩いたのか夜の道をひたすら家に向いました。しかし造賀まではとても生きて帰れないと、泣きながら足を引きずりました。どのようにして今井さんの家までたどり着いたのか分かりません。彼女と二人でその夜泊めて頂きました。ほんとに今井家の皆さんによくして頂き、次の日また二人で歩いて帰りました。あの時嬉しかったこと、そして彼女と二人だったからこそ勇気も湧き、歩いて帰れたと思います。何よりも「絆」を大切に生きていきたいと思います。平和な世界をねがって。

うめき声 今も聞こえる 原爆忌

原爆に思う

森川 愛子

今、私は幸いの中に生きています。生き方について考えればきりが無い事だけど、私なりに現在までを幸いに生きてきて、還暦も過ぎ親兄弟も少なくなっていて、今改めて友達を懐かしく親しく、とても身近な人に感じています。それは一番多感な女学生時代を、家族と離れて生活した苦しく辛い共通の思い出があるからです。その思い出は今大切な私の宝ものです。

学徒動員は、今の世代の親や子供達に考えられるでしょうか。私達は当然のこととして受け止め、学校工場から広の工場へ3交替の夜勤を雑炊だけの食事で働き、楽しみは歌を歌うことだけで、今で言うストレス解消は大声で軍歌を歌う事だけでした。新聞やラジオ、雑誌、勿論テレビもない生活、これが15才から17才にかけての私達の学生生活であり、青春でもありました。8月15日の終戦は広の補機工場で迎えました。この年の4月に4年生になっていました。私達は速やかに帰宅して、すぐ8月17日学徒救護隊として広島に向かいました。そのころの広島は私達にとっては、年に一度か二度父や母に連れられて行く憧れの町でした。この時見た広島の町の光景は一生忘れることは出来ません。何もない焼け野が原は、今でも目を閉じるとはっきり見えます。これが原子爆弾と知ったのはずうっと後のことでした。

私達は本川小学校と大河小学校に分かれて救護に当たりました。15才や16才の小さな俄か看護婦は一生懸命働きました。薬は赤チンキ位しかないし、お医者さんも時には来られないし、岡山医専の学生さんと共に働きました。この時のことはお話しても、この場において共に働き共に泣き、その人達の苦しみを見た人でないと分からないかも知れません。でもこのまま黙ってはいけなくて、二度と繰り返してはいけなくて戦争、原爆を受けた広島だけでなく、東京も3月10日大空襲がありました。日本国中あちこちで随分な被害がありました。でも私達は、今現実に広島の町に生きていて、だんだんと新しい町へと発展をしてします。この発展の陰には原爆で亡くなられた多くの方があることを忘れてはならないと思います。世の中が移り世代が変わり少しずつ薄れていく戦争の痛みを、おりに触れて私達は伝えていかなければなりません。

8月6日この日を絶対に忘れることは出来ません。それは私にとって一番大切なものを失ったからです。この世でたった一人の肉親の弟を…。その時彼は一中の3年生でした。

みんなで語り継ごうではありませんか原爆のこの怖さを…。そして平和な世界を一人一人が築いて参りましょう。

15才の夏

立田 登美子

花も蕾も若桜，五尺の命ひっさげて，
国の大事に殉ずるは，我ら学徒の面目ぞ，
ああ 紅の血は燃ゆる。

白い鉢巻きをきりりと締めて，学徒動員の歌を元気に歌いながら，補機工場に通っていた私達です。夜とはなく昼とはなく警戒警報に悩まされながら…。

昭和 20 年 8 月 6 日，西の空にもくもくと広がる雲を見ました。「アレよ，アレよ」と見る見るうちに青空に広がって行きました。それが原子爆弾だったのです。終戦の詔勅を聞いたのは，それから 9 日ぶりの事です。

「私達の働きが足りなかったから日本が負けたんだ。生きてオメオメ帰れない」15歳の少女達は健気にもオンオンと肩を震わせてみんな泣きました。ここにも戦前の教育の恐ろしさがまざまざと出ているように思えます。

それでも，心の片隅にもう空襲はないんだ，動員生活の苦しみから逃れられる。両親の待っている西条へ帰って，再び学校へ通って勉強が出来る。種々の不安の中でホッとしている部分もあったような気がします。

広から西条へ帰る時の列車は満員で，貨物列車しかも石炭を積む箱に乗せられて，呉線を三原へ，そして山陽本線で西条へと帰って行ったように記憶しています。トンネルを抜けると自分の顔は見えないがお互いの顔が石炭の煤で真っ黒になっているのを見て笑い合ったものです。

懐かしい学舎にたどりついた私達に休む暇もなく，広島への救護活動が命ぜられました。ピカドンが落ちて人々は芋でも転がしたように死んでいて，その焼け野原に，これから 70 年も 80 年も草木は生えないだろうと噂されている広島へ赴くのですから，それはそれは家族の心配も大変なものでした。

広島駅に降り立った私達の目に飛び込んで来た風景は，一望千里と言う表現はこのためにあるのだと思いました。焦土と化した街を歩きながら「国敗れて山河あり」しみじみとつぶやかれた引率して頂いた岡原先生の漢詩の一節が今も耳の底に刻み込まれています。

白いシャツを着た人達が，行き交う背中まるで緋模様のように蠅がたかっています。崩れかかった福屋の建物はたしか伝染病の患者が収容されていると聞きました。中から子供の泣き叫ぶ声が聞こえ，異様な雰囲気でした。走っていたままの焼けたただれた電車も痛々しい姿で放置されていました。

私達は焼け跡で長い間待たされた後、本川小学校に配属されました。爆心地に一番近い収容所です。窓は落ち床も焼け焦げ残ったコンクリートの床の上に、むしろを敷いて被災者が裸同様の体を横たえて苦しんでおられました。

焼けただけ顔は男女の区別もつかない程です。やけどが痛い為夜も昼も横になれない状態の人、さながら肖像画を見るような思いがしました。そんな悲惨な地獄絵の中で、私達は朝昼晩とおにぎりを作っては配って歩きました。とてもおにぎりなど食べられる状態ではない人、硫黄のようなものを吐いて苦しんでいる人、なぜこんな目に合わなければならないのだろうか、同じ人間なのに、人間が人間を苦しめるなんて絶対許せないと小さな胸を痛めたものです。

あの人もこの人も親にも兄弟にも見取られず、毎日次々と死んでいかれます。夕べ苦しんでいた人はもう今朝はむしろがかけられていました。そして担架に乗せられては運ばれて来て、運動場は死体の山になりました。夜になったら重油をかけて火葬されるのです。

私達は窓ガラスのない二階の教室で休んでいました。運動場で火葬される様子を見ながら…。雨の降る夜などは窓から雨が降り込んで来るので、むしろを掛けて寝たりしました。「まるで醤油麴か味噌麴でもねかしているようなね」と話しながら…。あの人達の尊い犠牲があったればこそ、今の安らかな平和があるのだと思う時、私達はいくら感謝しても感謝しきれないものがあると思います。二度と繰り返してもらいたくない戦争です。

暑い、暑い、苦しい15才の体験は本当に悲惨な苛酷なものでした。

犠牲者の冥福を心からお祈り致します。

ピカドンに思う

岡田 孝子

原爆の体験を語るについてと言うと、あのようを恐ろしいことは忘れたい忘れようとしてこれまで生きてきたが、それでも忘れられない記憶があり、それをたどってみたいと思います。

当時は新聞を読むでもなしラジオを聞くでもなく、言われるままに一生懸命信じてきたのです。

当時私達にも学徒動員があり、広の空廠に出勤させられました。「欲しがりません勝つまでは」のスローガンにペンを持つより銃を持つことに徹しました。空廠の行き帰りを見るエンドウの花や蝶を見て、あの花の蜜が吸えたらあの実が食べられたらと思う空腹の毎日でした。

工場では三直に分かれ夜勤の番もありました。そんな晩の小休止には外に出て、モンペ・非常袋・防空頭巾といった姿で、土べたに寝転んで星を仰ぎながら、友達と語り合うのがせめてもの楽しみだったのです。工場の行き帰りには意識高揚のため隊列を組み、声を限りに軍歌を唱和しながら歩いたものです。夜は常時モンペ姿のまま寝ました。

夜勤で前後不覚に眠り込んでいた時、「ドーン」という聞いたこともない大爆音に、私は気付いたら宿舎の広庭に立っていました。そこにはみんな不思議と不安な気持ちで集まっていました。「あっ あれは」と指さす彼方に見たこともない大きなキノコの形をしたものが、西の空中に浮いて見えたのです。最近テレビ画面で見られる映像と全く同じでした。

その晩食堂で伝わり聞いた話は、「あれはピカドンで広島は全滅じゃと。ピカーッと光ったと思ったら、物凄い熱が出て広島は火の海になったと。人は焼けただれて倒れたり、今、太田川は人でいっぱいじゃと」とそんな話で持ちきりでした。私はすぐに広島为学校へ通学している弟のことが心配になりました。きっと駄目だろうと悲しくなり、みんなとの話どころではありませんでした。

しばらくしてラジオが流され、昭和天皇の悲しみを胸にさされたような終戦宣言のお声が聞こえました。動員が解除になり、心の中が空洞の出来たような気持ちで家に帰りました。弟が生きていたことが分かり喜びました。

今度は学校から広島へ救護に行く事になりました。広島は見渡す限り、土色と黒い色とに覆われていたのが印象に残っています。やっと焼け残った収容所の小学校につきました。早速降りて大きな平釜でお粥やおかずを倒壊した木で炊き、患者さんに配って回りました。「お焦げが残っていたら下さい」とやっと言える位の声で訴えられ

ましたが、その人だけあげることは出来ませんでした。まだ生きておられるのに何の手当もなく、廊下に横たわっておられました。そんな方の傷口には、ウジ虫がゴソゴソ動いていました。また目や鼻や口の回りに金蠅が群がっていても、追い払う力も尽きているような人も見られました。運動場の隅で亡くなられた人を、トラックで連れて来て、油を掛けて焼かれると言う火が、いつまでもゆらゆらと燃え続けるのを、手を合わせて拝みました。

私達は夢と希望の女学生時代を、戦争の抑圧された生活の中で大きくなりました。戦争が終わって初めて知りました。平和とは何と素晴らしい事でしょう。命の限り生きる事が出来るのです。ひどく惨めな戦争から、生き抜いて再建した平和が、こんなにも明るく夢や希望があるものかと思いました。肌身で直に戦争を体験してきた私達だからこそ、心の底から全世界へ地球の隅々まで叫び続けましょう。

「平和の尊さを守り続けましょう」

「平和を守ろう いつまでも」

原爆の思い出

愛原 喜久子

心の底にしまっていた痛みを思い起こしております。

戦争中は「お国のために」と言う大義名分のもと学徒報国隊として一切の授業を中止して、広空廠に動員され働きました。その当時は国民総力の時代でしたので、15才の少女でしたが、「何が何でも勝つまでは」と自分なりに重大な役割と認識して参加したものです。結果は惨憺たる敗北で終戦を迎えました。広島は原子爆弾により一瞬にして街は焦土となりました。

私達は広より帰宅し疲れを癒す間もなく、原爆罹災者の方々に何とかしなくてはとかりたてられる思いで、広島に救護隊として参加しました。全壊全焼の中で辛うじて残った大河小学校が、そのまま収容所となりました。

そこで救護活動が開始されたのですか、その時の痛ましい様子は、筆舌に尽くし難い惨状でした。何分にも物資はなく人手不足で正式な医師もいなく、岡山医大の学生が手当に当たりました。赤チンだけの治療で傷は化膿してウジがわき、異臭を放つ体は、教室の板の上に新聞を敷いて横たわっていました。髪は殆ど抜け落ち、その驚きと悲しみに慰める言葉もありませんでした。

火傷の重さに耐えられず苦しみついに力尽きて死んで行く人達、軽症のように見えた人が次々と亡くなられ、運動場で火葬されるのですが、お坊さんの先導もなく、お線香の一本すらなく、死を悲しんでくれる身内の一人としてお供えしてくれる事もなく、息の詰まる地獄の有り様でした。また炎天下の中、食糧を毎日大河から本庁まで、大八車を引いて配給を受け取る為に、焼け果てた中を悲痛な思いで歩きました。

この戦争の悲惨な状況を思い出す度に胸が痛みます。45年を経ても尚私の心の中に残る戦争だけは、この地球からなくなって欲しい。二度と犠牲者を出してはいけないと平和への誓いにつながります。戦争体験者の多くが高齢化する中で原爆の残酷さ悲惨さがどんどん忘れられていく今日、亡くなられた家族の人達の代弁者として自らの体験と実感を強く語る事が、今私の出来るささやかを死者への慰霊であると思いペンを執りました。

原爆の思い出

田坂 万千枝

1990年も後僅かとなりました。今から45年前、1945年(昭和20年)のことです。私達は賀茂高女3年生の3学期に入ったばかりの1月の末、小雪の舞う寒い目でした。西条駅から広の海軍工廠に学徒動員で出動致しました。

仕事場は広駅裏の補機工場でした。15才の少女で三直交代での仕事も致しました。寒い暗い道を軍歌を歌いながら、東谷の寮から工場まで列をなして通いました。また夜中働いて朝疲れ果てて寮に帰り、雑炊をすすって眠るみじめさもありました。戦争もだんだん追い詰められて、空襲空襲で夜中防空壕の中に逃げ込み、母恋しさに涙したことも幾度か…。その頃になると工場は敵機の的となるので、工場の裏の名田山に、大きな広い迷子になりそうな横穴が掘られ、重たい大きな機械が殆ど運び込まれて、夜も昼も煌々と電気の灯ったその中での仕事となりました

誰がいつの間にそれだけの大きさをトンネルを掘ったのか、今のように進んだ機械も無い時代に、また若い男の人は殆ど召集でいなかったでしょうに、今でも不思議に思える一つです。

8月6日朝、私はそのトンネルの入口で、あのにぶい音とキノコ雲を見たのです。その時はあの恐ろしい原子爆弾とは知る由もありません。友達の辻川さんが「お父さんが原爆で亡くなった」と泣きじゃくりながら、先生に原爆の恐ろしさを訴えておられたのが、私の耳に入った原爆の初めのニュースでした。お年の女のH先生が「父上を亡くされたのに決められた日時に帰寮するあなたのようなけなげな生徒がいる限り日本は負けませんよ」と慰められた言葉が、今なお私の耳の底に残っています。それから日ならずして8月15日敗戦の日はやって来ました。

私達は身の回りの物をリュックに背負い、列車で西条駅まで帰り、そこから郷田の我が家に暑い暑い日中を2時間近く歩いて帰りました。帰り着くと父が「万千枝帰ったか」と言ってくれた途端、張り詰めた気がいっぺんに緩み、父に取り縋って思い切り泣いたことを記憶しています。後にも先にも父親の前で、あれだけ泣いたのはあの時だけです。両親も今は亡き人です。

工場での疲れを癒す間もなく、学校からの命令で被爆地広島に救護のため赴いたのです。行き先は本川小学校でした。そこでの私達の救護活動の内容は、食事を作りその配膳係りでした。指揮は岡原先生でした。土間にゴザだけ敷いた上で息も絶え絶えに横たわっておられ、傷口はウジがうじうじし、それに顔も判明しない程に真っ黒にたかった蠅、それを追う力など無論ありません。また歩くことが出来なくて土間をはい回っている人、虚ろな目で私達の配る食事をじっと立って待っている人、韓国の人、

今にして思えば 10 日余りしか経っていないのですから、身寄りのない人が多かったと思います。言いたい事、伝えてもらいたい事もいろいろあったでしょうに。私達がいた3日の間にも、次々と死んで逝かれました。あの小学校に何人収容されていたかは知りませんが、肉親と再会出来また生命永らえた人が何人おられたことでしょう。

激動の昭和も終わり元号も変わりました。広島街も素晴らしく復興致しました。私達は年老いて記憶もだんだん薄らいでいきます。しかし戦争と言うものの惨さ、非情さ、原爆の恐ろしさを子や孫に、いろいろな角度から伝えなければならない役目があると思います。 合掌

原爆体験記

榊原 富喜江

学徒動員で広工廠で働いていたのは、女学校4年生の時でした。8月6日出勤して間もなく、隧道の外で朝礼を待っていました。その時ビーと青い稲光があちこちに気味悪く見え、その閃光と共にドンと言う音にびっくりして隧道に駆け込んだ途端に、隧道の中まで、なまぬるい爆風がサッと流れ込んできました。しばらくしてみんな外に出ました。西の空がもくもくと黒煙を上げキノコのように広がりました。それは恐ろしい原爆投下でした。

それから間もなく終戦となり、私達は学校に復帰し、息つく暇もなく学校からの召集で、被爆者の救護に当たる事になりました。「広島は50年草木も生えず、頭髮は抜けるし駄目だ」と言って家の者は心配して止めたが、みんなと一緒に広島へ行きました。

駅前には焼けただれた電車の残骸や、コンクリート造りの建物だけが微かに見え、見渡す限り焼け野が原と化していました。一瞬にして尊い生命が数多く奪われ、建物は瓦礫と化したのです。

私達の班は大河小学校に配属され、救護活動に当たる事になりました各教室が収容所に当てられ、ゴザを敷いた上に痛々しい体を横たえた被爆者の方々が、「痛い、痛い」と言っておられました。当時は医薬品と言っても赤チンを塗る程度でした。夏も真っ盛りで、大火傷を負った人は至る所の傷にウジ虫が発生し、見るのも痛ましかったです。また夜の巡回の時には、どの顔も赤チンキで赤鬼みたいで、その様相は生地獄そのものでした。看護中に、「後を頼む、頼む」と言いながら息を引き取られた方もあり、みんなで泣いたこともありました。水道の水が生臭くて口にするのも厭でした。こうして実際に体験した者でないと、原爆の怖さは分からないのではないかと思います。

今被爆45年の歳月を経て、私達同級生の中にも、この原因で多くの方が若くして亡くなられたのではないのでしょうか。私はお陰で今日まで元気に過ごしてきましたが、もう60才を越え、今後の健康に不安が広がります。幸いに高崎先生のお骨折りにより、原爆手帳の交付を受ける事ができて有り難く感謝している者です。

私達は救護活動を通して得た幾多の体験を基に、今一度忘れかけた原爆の恐ろしさを思い起こし、今後みんなが幸せであるよう祈って止みません。最後に亡くなられました多数の方々のご冥福を心より祈念致します。

被爆者体験記

向井 友子

40 数年前になります。15 才の少女の時です。家では父母に頼り自分の事をすれば良いと思っていた年頃でした。

学徒動員で終戦を迎え、家に帰り明日からは勉強と思ったのも束の間で、人類史上初めての原爆被害の広島へ、賀茂高等女学校救護隊の一員として出動致しました。

8月17日大河小学校収容所に行き、救護及び炊き出しをすることになり、到着すると休む間もなく、その日まで救護に当たっていた軍隊の人達と交代する事になり、仕事の内容について説明を聞きました。一瞬私達にこの仕事が出来るか頭の中は不安で一杯でした。成せばなる、やらなければ大変でした。先生のご指導により大きなお風呂位もある釜でご飯を炊き、お粥を作り、お汁も作ります。おにぎりもかなりの数作るののでてんてこ舞いの連続でした。

大八車を引き焼け野原を一時間以上も歩いてお米や野菜などの運搬に数人で行くこともありました。被爆の日より10日以上も経過しているのに、至る所煙が出ていたり、異様な臭いで言葉に表すことが出来ません。

一日が終わり二日、三日と少しは馴れてくる事もありましたが、いろんな変わった壁に当たります。看護の甲斐もなく他界される人もあり、縁故者のない人などお気の毒でした。火葬にすることなども引き継ぎを受けておりましたが、生まれて初めて死人を見、初めて自分達で火葬にすることは生きた心地ではありませんでした。夜は被害を受け窓硝子もない校舎に寝ていました。幽霊が出て来るようで眠れない夜もありました。

忙しくしているうちに一週間が過ぎ、第2陣のお友達と交代し、家に帰りほっとしました。我が家では安心して眠ることが出来ましたが、一週間後第3陣として、再度一週間を前回と同じ場所に行き、自分の持ち場を遂行致しました。

経験のない仕事の出来た時の喜びは、言葉には表せない自信になり、年を重ねた今も心の支えになっていると思っております。

原爆の思い出

福田 利恵子

「おねえちゃんお菓子ちょうだい、ねえーお菓子ちょうだいよう」と寝たまの姿で、甘えながらおねだりする4、5才位の色白のお人形のようにかわいらしい坊や。顔には、火傷らしい跡や傷も見当たらないその子の後部の腰のあたりに、ポツカリと大きな穴があいていました

手当てと言えは消毒して赤チンを塗り、ガーゼ交換するだけです。その子には付き添いらしい親兄弟は誰もおりませんでした。親が生きていれば探して来るでしょうが、原爆投下後10数日経っているのですから、家族も死んでしまったのでしょう。

終戦後、学徒動員先の広工場からようやく女学校へ帰った途端、広島原爆救護に召集され、本川や大河小学校で給食用おむすび作りや、医師達の手伝いをしていた私達は、そのかわいい坊やを、一生懸命励ましたり手当てをしたのですが、その甲斐もなく数日後息を引き取ってしまいました。その傍らには、小学校高学年か中学1年生位の少年が収容されていましたが、これも家族はいなくて、衛生兵の方々が親身になって励ましたり看病していましたが、ある日次第に意識を失って、うとうとと眠りそうな少年の頬を、二人の衛生兵がたたきながら「眠ってはためだ、目を覚ませ」と大きな声で叫んでいましたが、少年はとうとう息を引き取ってしまいました。衛生兵の方々の泣いている姿が印象に残っています。

各教室や広い講堂は、被災者やその家族でいっぱい、黒こげになった魚のようにひどい火傷を負った人も大勢いて、ウジ虫さえわいている程でした。傍らでは家族が放心したように座っていて、中には一升瓶に米を入れ、棒でつついて精米をしている姿など臙げに思い出される程度で、次第に忘却の彼方になりつつある現在ですが、不思議に坊やと少年の二人の事だけは鮮明に思い出されてきます。

亡くなった人達は、校庭に遺体を並べ材木で焼くのですが、校舎の中には瀕死の重症者とその家族がいるその前で、遺体を焼却するのはまるで地獄絵さながらでした。広工場に動員中、度々の空襲で女学生達は優先して避難させられましたが、女子挺身隊や徴用工員が大勢爆撃の犠牲となり、トラックで運ばれ焼却されたと聞きました。夜勤の時工場に通う道すがら、遠くで火の玉がゆらいでいる有り様を見聞きしてきた後だけに、さほど恐怖心や気持ち悪いと言う意識はなかったと思います。今なら恐怖心で気も狂わんばかりになると思いますが、空襲続きの呉時代は心もすさんでいたのでしょうか。今でもその時の気持ちがよく分かりません。

似島の遺骨発掘のニュースを見ながら、あの校庭の遺骨はどうなったのかと思い出されます。ソビエトの大火傷を負ったコンスタンチン坊やと、あの時の色白の坊やの

顔がだぶってきて、平和な世の中であればこそ、コンスタンチン君を助ける事が出来ました。あの快挙に人々も拍手をもって喜ぶことができたのでしょう。45年以前の戦争中に生まれ、悲惨な死に方をした多くの人々の為にも、今や歴史的イベントになりつつある原爆や、戦争の悲惨さを語り伝えなければならないのではないかとその時代に生き、生き残った者としての責任を考えさせられる今日このごろです。

原爆の思い出

綿芝 昭子

昭和20年8月6日午前8時過ぎ、三直勤務（1日24時間を3班に分け、1班は午前8時から午後4時まで、2班は午後4時から深夜12時まで、2班は深夜12時から朝8時までの三交代勤務）後の寮での夢の中、突然ドカーンと言う物凄い音と共に、爆風で蚊帳が飛び散らんばかり、まるで自分が蚊帳の外に押し出された状態だった。みんなは慌てふためいて救急袋と頭巾を被って、仁方トンネルへと急いだ。その当時私は、何故かどこへ避難しても「死ぬ時は死ぬ」と思ってそのまま眠り続けていた。お陰である「キノコ雲」は見えない。

8月17日、広島市へ救急看護班として3・4年生全員が駆り出され通学班別にそれぞれの地へ赴く。私達は大河小学校だった。広島駅に降り立った一同は唖然とした。あの広島はどこにもない。壊れたビルの瓦礫、真っ赤に焼けた市電、それも小さく縮んでしまっている。立木など一本も見当たらない。はるか彼方に宇品の海が見える。阿鼻の世界に立ちすくんだようで、背筋が寒くなる。応急病院となった小学校へ行って又びっくり、各教室は被爆者達が所せましと臥せている。その人達をよく見ると、火傷の患部にウジ虫がわいている。この人達を看なければいけないのだ。しかし、15・16才の少女に何が出来ると言うのだろう。4才位の男の子が火傷の手当で椅子にかけていた。医者は子供の両ほおのガーゼを静かに剥がし始めた途端、その子は両手を頭の横に掲げ、手を震わせながら泣き叫んでいた。阿鼻叫喚とはこのことだろう。今でも、あの時のあの男の子の泣き声が耳に残っている。一見、元気そうな大学生が外来として来た翌日、亡くなったそうだ。私には首を傾げる事ばかりだ。

夜になると、身元不明の死亡者を、運動場の片すみで火葬する風景を見た。「こんな場面は一生の間、二度と見られるものではない。見に行こう」と友人を誘ったが皆尻込みし、二人だけついて来た。おじさん達が薪の上に屍を並べ、又上に枯れ木を乗せ、ガソリンをかけて火を付ける。バリバリと勢いよく炎が上がる。スルメを焼くように人間の手足が動く。何分間位見詰めていただろうか。ふと我に返って、黙って部屋へ走り帰った。何とも言えない思いが胸を締め付けた。この何分間かの出来事が、私の生涯忘れられない被爆体験である。

原爆の思い出

山本 寿美子

今年は被爆 45 年、8 月の原爆記念日には、私も式典に参加させて頂きました。会場はあふれんばかりの人の波で、慰霊碑の前はお祈りをする人の行列が続きました。

原爆が投下された暑い夏、先生に引率されて救護に行った事を思い出しました。当時の広島は、一面焼け跡だったのに、今は高い建物がぎっしりと建ち、食べ物も豊富に揃い、病院も整っています。今の広島に育った人には想像もつかない事だと思います。被爆患者は焼け残った学校に収容され、布団も無い床の上に横たわっていました。

火傷で、顔や体が傷だらけの人。傷口に、ウジ虫がわいている人。命が絶えそうに、苦しんでいる人。意識が無く、寝たままの人。

苦しさや痛さは、言葉では言い尽くせなかったと思います。私達のご飯を炊いておむすび一個を配って回りました。食べ物も薬も不自由な戦後に、早く全快することは望めなかったと思います。十代の私には、どのように救護してよいのか分からず、少しでも楽にしてあげる事は出来なかったのです。

夜になると、広場の隅の暗闇の中で、赤い火がぼうぼうと燃えていました。「あれは亡くなった人を焼いているのだ」と聞いて、体が震えるのが止まらず、狭い所で眠れなかったのを鮮明に記憶しています。こんな哀れな姿の人生の最後でよいのでしょうか。大切な命、若い命を、原爆で数えきれないほどの人を苦しめ命を奪う事は許されません。

原爆で亡くなられた方の、ご冥福を心からお祈り致します。

被爆 45 年を迎えて

森本 ヒデ子

昭和 20 年 8 月 6 日、私は旧制女学校の 4 年生で、広工廠の方へ学徒動員の一人として兵器を造る為、私達女学生も三直交代制で夜昼なく働いていました。原爆投下のあの日は、二直番の夜勤でまだ寝ていました。

物凄い爆音で目が覚め、いつものごとく敵機来襲艦砲射撃とばかり思い、どこへ退避しようかと西の窓を開けますと、もくもくと上がるキノコ雲、それはそれは物凄い勢いで雲が大きく広がっていきました。これがピカドンと言われている原子爆弾で広島が全滅と後から分かりました。

さて 8 月 15 日。私達女学生は終戦と同時に動員が解除され、学校復帰の為家に帰りましたが、その足ですぐに原爆投下の広島へ救護班として再び動員されました。

そこで見る広島は、かつての駅前に並ぶ旅館や賑やかだった街並みが跡形もなく消えて、一面が見渡す限りの瓦礫の山と化して、何の遮るものもなく、福屋の建物と比治山がすぐ目の前に見えました。

そこで県の指令を受け、私達は原爆患者が収容されている大河小学校へ行きました。市内の病院は皆焼けて、僅かに残っている小学校が仮設病院として、多くの患者さんが入院や通院をしながら、火傷の手当を受けていました。手当と言っても何の薬もなく、ただ唯一の赤チンを患部に塗るだけで手の施しようもありませんでした。手足に火傷をした幼子達は、通院のたびに私達に向かって「おねえちゃん痛いよう、痛いよう。ゆっくり包帯を取ってね」と泣き叫ぶので、思わず私達は貰い泣きばかりしていました。入院している患者さんは、髪の毛は赤くぼうぼうと焼けただけ、体は赤チンで真っ赤、男の人か女の人か区別もつけがたく、布団とて一つもなく板の間に赤鬼が頭を並べて寝ているようでした。その患者さん達も背中から足にかけて、体中ウジがわいている人が多く、それをピンセットで一匹ずつ取ってあげましたが、これがまたとても痛く共に泣く毎日の看病でした。中でも一番痛々しいのはお産を間近に控えていた人で、十か月の月満たずに早産で、親子共々亡くなられた人達です。

物資の少ないこの時節、ご他聞に漏れず医薬品も殆どなくどうすることも出来ず、昨日までは元気に、地方からの炊き出しのおむすびを食べていた人も、朝は冷たくなっておられた人もたくさんいました。こうして亡くなられた人達は、肉親縁者のお別れの言葉もなく、5・6人一緒に校庭の片すみで、石油を頭からかけられ茶毘にふせられました雨の降る夜は青く燐が燃えて、停電の為灯もないので大変寂しい思いをして友達と一緒に肩を抱きあって寝た記憶があります。

今、新聞紙上で核実験、反核運動といろいろ賑わっていますが二度とこのような惨

めな戦争はしてはなりません。悲しい思いをして死んでいった人達に「ノーモア ヒロシマ」二度と過ちを繰り返さないと心から誓い「どうか安らかに眠ってください」とお祈りしています。

過ぎし日を想う

小川 和子

チェルノブイリ原発の悲惨な光景や話を聞くにつけ、若き日に出合ったあの頃の事を思い起こさずにはおれません。そして、私の目の前に一番に浮かぶのは必ずあの「キノコ雲」なのです。戦時下、学徒動員された私達は、広町の宿舎で三交代でした。あの日私は、夜勤明けの体で眠りについたのでした。凄惨な音で跳び起き、急いでいつもの避難場所に走ろうと外に出たのです。空襲に明け暮れていた私達には、昼も夜もなかったのですから。外に出ていつもと様子が異なるのに気づき、「おかしいな」と広島の方を見ると、あの「キノコ雲」がはっきり見えたのです。

終戦直後で帰校した私達は間もなく救護班を編成、救護所で救護活動に入りました。まず広島に降りてあの一面の廃墟、ポトリと涙がほおを伝わったのが忘れられません。こう書いていると、あの瓦礫の山が見えて参ります。救護所に着いて見た光景は悲惨この上もありませんでした。薬と言えば赤チンのみ、ある日一教室を覗いて見ると霊安室でした。あの年は雨もよく降りました。雨の中校庭の隅で、毎夜見るうす青い炎には震い上がりました。

長い年月、木も草も育たないと言われていた広島の最近の繁栄は、目覚ましく嬉しい限りですが、常に世界のどこかで戦争があり、核の実験が行われている以上、各自何をなすべきかを考え、実行することが犠牲になられた方々に対する鎮魂ではないでしょうか。

原爆で思うこと

鎌田 礼子

東京の連日の空襲に疎開し、しばらくは打って変わったように静かな田園の中に建つ学舎で、気分も和らいでいたが、ここで人類初の原爆の洗礼を受けようとは夢にも思わないことでした。

原爆、難しい原理は分かる筈もないが、当時アメリカには、日本に落とす原爆を研究開発する為に、マンハッタン計画と呼ばれる国家プロジェクトがあり、そこにつぎ込まれる資金、人材、技術は当時得られるであろう最高のものばかり、信じられない程の規模であり、この計画に対する力の入れようは、又想像を絶するものであったそうです。その中で出来上がった物が小さい塊二つ、それも数十万の命を奪う事だけを目的とした物で、その二つは広島・長崎と役割を十分に果たし、45年経った今に至っても、まだ被爆した人々を苦しめ続けています。いかに最高の科学技術の成果であれ、やはり人類で作った最も醜い芸術品と呼ぶべきでしょう。誰でも嫌な事は早く忘れたいと思うものです。歴史の中の惨事は、やがて忘れられ形式的な史実のみが後世に伝わるのですが、昭和20年8月6日白雲一つないコバルト色に晴れ上がった空に目を貫くばかりの閃光を、もくもくと膨れ上がって行くばら色のキノコ雲を、45年経った今でも鮮明に心に焼き付いています。

先日、大学で原子力に関する研究をしている息子と話したところ、息子も原子炉の中でよく原子の光を見erと言います。それは静かに青く光り、ちょっと神秘的ですらあるようです。食糧も住宅もそれに関する工場、エアコン、冷蔵庫、電車、自動車総てエネルギーなくては動かないと聞きますし、石油、電気と共に人々の暮らしの夢は個々ささやかであっても、集積されて大きなエネルギーとなります。力の限りを注ぎ出来上がった原子力は、平和の中でエネルギーに利用されてこそ素晴らしいと思います。

今後、私達子孫が見る光が、広島で見たそれと決して同じであってはならないと強く思います。

最後に原爆で亡くなられた方々のご冥福をお祈り致します。

45年前に思いを馳せて

辻川 澄子

昭和 20 年 8 月 6 日、呉の海軍工廠へ学徒動員していた私は、三直交代の二直勤務で前夜 12 時頃寄宿舍に帰り、食事や風呂を済ませて夜中の 2 時頃に寝ました。朝 8 時過ぎドドンと鈍い音と共に建物が揺れて目が覚めました。何だったんだろうと思っていると、「あれを見んさい」「ありやどうしたん」「ありゃ何じゃろう」と言う友達の声に跳び起きて、廊下に出て西側の窓を見た途端びっくりしました。それは真っ青なキャンバスに描かれた一枚の絵のようでした。

青い空いっぱい巨大なキノコ雲が、ムクムクと中からピンク色の煙をわき起こしながら浮かんでいた光景は、今でもはっきりと脳裏に焼き付いております。一瞬私の頭の中を「この世の終わり」という言葉がかすめました。巨大な白い雲は、じっと動かず下方の中からピンク色に染まった雲が、いつまでもわき出ていたのを覚えております。間もなくあれは火薬庫が爆発したんだとか、新型爆弾だとか、いろいろと噂が耳に入ってきましたが、まさか広島がこんな悲惨な状態にをっていようとは夢にも思いませんでした。

昭和 18 年に神戸から疎開し、賀茂高女に転校した私は、広島へは一度も行ったことはありませんでした。数日して学校から救護で行って初めて見る広島は、灰色にくすぶって瓦礫に埋もれた死に絶えたような街でした。所々に残った骨組みだけの建物や窓枠だけの市電等が、墨絵の中のような風景に見えました。でも壊れた建物の中にたくさんの方が、怪我と火傷に苦しんでいるのを見て、息が詰まりそうでした。軍医さんに叱られながら震える手で包帯を巻きました。黒っぽいモンペをはいていた人は、殆ど腰から足の火傷が多いようでした。若い娘さんが、「痛いわあ 殺して下さい」と泣き叫んでいた声が今も耳に残っています。

「75 年間は草一本生えない」と言われた広島は、今緑豊かな平和を街に蘇りましたが、その陰に多くの人達が後遺症に苦しんでおられる現在を思うと、このことを子や孫へ語り継いでいかなければならないと思います。

原爆に思う

江戸 芳江

私達の女学生時代は、誠に悲しく暗い時代であったと思います。それは太平洋戦争そして敗戦と言った悲惨な現実があったからです。

思い起こしてみますと、3年生の時被服廠の学校工場となった校舎で軍服の雨合羽を縫いました。そして、やがてその仕事を下級生に譲り、広の航空廠へ動員となり、大きな旋盤を使つての仕事に、責任と恐怖の入り交じった複雑な気持ちの毎日でした。しかも敵機襲来のはざまの中の勤務には限度があり、気力だけの生活でした。

私は、学校工場で働く為に、級友と別れて早く学校へ帰りました。それはミシン修理技術習得の為に、1か月被服廠で学んだ技術を生かす為だったのです。

忘れられない日、昭和20年8月6日午前8時15分、学校工場に出勤しようとして八本松駅で汽車を待っていました。その時ドーンと鈍い音、何だろうと西の空を見ると、あのキノコ雲、今まで見たこともない雲でした。青空の中にポツカリと浮かんだ奇妙な雲、これがあの恐ろしい原子爆弾とは夢にも思いませんでした。

「広島のカス庫が爆発した」と言う声が聞こえました。大変な事になったと思いました。

学校工場が終わり西条駅に出て見ると、汽車から降りる人達みんなが真っ黒な顔で服がぼろぼろに垂れ下がっていて、歩いて帰られるのがやっとの状態でした。「広島で火傷をした」「広島が火事で火の海じゃ」と言う話になんとか分かりませんでした。

しかし8月17日、女学校から救護隊として広島へ行って見て、初めてあのキノコ雲が広島を全壊全焼し、たくさんの尊い生命を奪ったのだと分かりました。駅舎は吹っ飛び鉄柱だけのプラットホーム、崩れかけたコンクリートの建物が二つ三つの焼け野が原になり、私達は瓦礫の中の道を辿り、やっと収容所になっている段原小学校へ行きました。

倒壊した校舎を掻き分けて水道を見付け、そこでお米を洗い炊き出しをしました。竹筒にお粥を入れて配ると、やけどでただれた手を差し延べて受け取られるけれど、手を曲げる事が出来ず口には入りません。痛さのあまりの叫び声や呻き声、そして身動きの少ない瀕死状態の人達、まるで修羅場を見る思いがしました。「おねえちゃん痛いよ」「元気出して頑張つてね」と会話した4才位のかわいい坊やが、朝の食事を持って行って見ると、静かに横たわっていました。何の罪もないいたいけな子供の死に、原爆への憤りを感じました。お医者さんの治境も受けず、赤チンを塗っただけの手当で多くの人達の尊い生命が消えました。

僅か 15 歳だった私の頭の中に、ほとぼしり出る焼き付いた被爆の惨状を限られた紙面では書き表す事はなかなか出来ません。

今年また来年と、原爆の日がやって来ます。原爆の恐ろしさを伝えると共に、平和の大切さを語り継ぐ使命を感じております。そして『世界は一つ』の認識を新たにしていって、恒久世界平和に向かって、みんなが努力して参りましょう。

戦後 50 周年を迎えて

木村 政子

今年の8月6日が来ますと、あれから50年長い年月のようですが、振り返ってみますと数え切れない程の出来事があり、どれもこれも昨年のように思い出されてきて、この期間はむしろ短かったようにも感じています。

空襲警報のサイレンで反射的に木によじ登り空を見ると、西の空を黒い大きなB29機が広島方面へ向かって進んでおりました。銀色のキラキラ光る風船のような又パラシュートと思える物が、パッと離れてふわふわと北に流れて行くと思った瞬間「ピカードン」でした。急に広島一中に行っている弟が心配になりました。間もなく真っ黒なキノコ雲がむくむくと立ちのぼり、みなそれぞれに「あれは広島が焼けている煙だろう」とか「いや毒ガスが上っているのだ。こちらに向かって流れてきている」とか大騒動したものでした。何も手につかず落ち着かない気持ちでいると、馬車や車力に被災者を乗せて帰って来る人が続きました。「水、水」と哀願しておられる微かな声も聞こえました。市内の様子を聞いても、火の海でさっぱり分からないとのことでした。弟も頭にいっぱい赤チンを塗って貰って、とぼとぼと帰って来ました。工場のスレートの屋根が壊れて落ちてきたのだそうです。一方私達は敵兵が上陸することを考えて、竹槍の訓練に精出したものです。

8月15日の天皇陛下の終戦のお言葉がショックで、二・三日何も手につかなかった事を覚えています。

そのうち賀茂高女の生徒は、広島の実災者の看病に出向く事になりました。私達は拒む事なく勇んでリュックを背負って汽車に乗り込んだものです。比治山の山崎第一国民学校が、私達西部汽車通のグループの奉仕現場でした。壊れかかった民家が夜の宿舎に当てられました。毎日雨の降る中、朝夕校舎で呻いておられる患者さんの人数を調べて、百人を出る人のご飯を炊くのですが、ほちのようなご飯でおにぎりを作り、副食や調味料は焼け焦げた市役所までリヤカーで行き、配給された物を運んで、患者さんや付き添いの方々に、配って回るのが主な仕事でした。朝な夕なに亡くなられる方を見るのはたいへん辛い思いでした。又体中焼けただれて寝たきりの方々に、ワジ虫がうじうじとはいまくるので「痒い、痛い」と私達に声をかけられるので、紙でこよりを作り取り除いてあげたものでした。そんな哀れな情景、あの当時15・16才の少女達は、生きながらにして地獄を見たわけです。又5才位のチェックの着物を着た男の子が、毎日私達の飯場に来てはおにぎりを食べたり遊んだりしましたが、あまりに着ている物が汚れているので、誰かがカッターシャツを着せてあげ洗濯したのですが、その子がいつの日か姿を見せなくなりました。親か親戚の方が見付かったもの

か、原爆症で動けなくなったのではと皆心を痛めたものです。とにかくピカドンで広島市は壊滅した上に、長雨でなんとも敗戦の哀れさは言いようありませんでした。そんな時でも私達は心底押し潰されてはいませんでした。どうしたら日本は立ち直れるか必死の思いでした。戦死をなさった方の死を無駄にしてはならない、世界の中の日本であることを誇ることが出来、戦争をおこさなくてもよいように、世界の人から大切に扱って貰える国にしなければと反省したものでした。学生はともかく勉学に励まなくてはと、終戦後の半年はいきいきと満員列車の外側にぶら下がってまで、八本松・西条間を通ったこともありました。

あれから50年、そうですわね。少女だった私達が孫や曾孫がいて、一人が14・15人に増えているのですもの。そして昔は考えられない豊かで平和な毎日です。文化の発展で世界中で起こった事が直ちに報道され、私達が知ることが出来るようになりましたが、反面高機能な機械や道具が出回り、私はついていけない羽交いさも感じております。

農業にしても大きな機械を使い、2・3日でパッと農作業を終えると言う具合で、帽子を被って鍬を肩に畦端で、しばし話すと言ったゆったりした風景はほとんど目にする事は出来なくなりました。人が情緒豊かに暮らせないだけではありません。自然が破壊されたり、空き缶や空き瓶を所構わず落として行く、本当に日本人はどうなったのでしょうか。

私達も一人一人が郷土の自然を汚さないように守り、美しい環境を作らないと健康な生活は出来ないと思います。この年まで元気に働ける事は、自分の精進だけでは到底叶うものではないと思います。神仏の加護に因って生かされているかに思えるようになりました。年老いてたいして役には立ちませんが、毎日小さい事でも役立つ事を心かけ、平和で楽しい日々を送りたいと考えるものでございます。

おわりに

初回の原爆思い出記録誌を発行してはや5年、月日の流れの速さに驚かされています。それはあまりに世界や日本の情勢が変化しているからです。ソ連と言う国が消え、いろいろと新しい国名で登場しましたし、国内では自民、社会、さきがけ連合で社会党党首の村山富市首相が誕生し、私達の若い頃には想像もしえなかった時代が出現しました。

また最近では、「サリン」事件や「ピストル」犯罪が起きています。学校では週5日制が導入され、人間教育の在り方が問われる時代となりました。ややもすればこの急速な時代の渦の中に引き込まれそうになっていく私達です。でも、私達だけにしか出来ない何かがあると思っています。自分を大切に生きて参りましょう。

45年誌の時には、武田幹枝（松川）さんをご健在でしたが、逝去され今回記載の「原爆の思い出」が遺稿となり、誠に残念でなりません。皆さんと共にご冥福をお祈りしたいと存じます。

被爆の思い出文集は、今回の50年誌を最後にしたいと思います。今一度、この若き少女時代に体験した人間の苦しみを語り継ぎ、往時を偲ぶよすがとなれば幸いです。平和のありがたさをかみ締め、お互い健康に気を付けながら、『生きてよかった』と言える人生にして参りましょう。

志和の郷にて

姫さゆり

— 五十年を経て —

はじめに

私たちは昭和5、6年世界恐慌の真只中に生を得て昭和6年には満州事変。くすぶりつづけた火種は私たちが小学校へ入学する昭和12年日中事変へと移り、更に昭和16年には、ついに太平洋戦争が始まりました。女学校へ入学した昭和18年には学徒出陣。昭和19年には学童疎開が始まり、勤労働員、神風特攻隊の出撃。昭和20年本土空襲、8月広島原爆投下。終戦。

こんな時代に生きていた14、15才の乙女です。

ここに寄せられた記録は、私たちの女学生時代をふり返り、堅く口をつむって語らなかつた戦争の痛手を書き綴ったものです。

50年余を経た今、年を重ねすぎて記憶が次第に薄れ、正確さにや不安は残りますが脳裏に焼きついて離れなかつた当時のことなど、忘却の彼方へ押しやるにはしのびない、子や孫に語りついで行きたいものばかりでございます。

1997年（終戦50周年の年）の同期会で榎野さんが50年前のびっくり仰天、虱体験を面白おかしく話されたのがきっかけです。

およせ戴きました文の配列は、執筆者のお名前のアイウエオ順にさせていただきました。

当時を振り返りながらお読み頂ければ幸いです。

目 次

1	戦争は悲しいね	井上 久江
2	五十年前を振り返り思いのままに	梅本 照子
3	あの日あの時	榎野 ツルエ
4	五十年を過ぎても	海老根 孝恵
5	時の流れに	大林 春美
6	芥子の花	沖川 豊子
7	被爆者救助のため段原小学校に行った	折川 千鶴子
8	私の女学生時代	鍵本 富久枝
9	被爆者救護の体験記	川手 ナツ子
10	終戦	木原 秋子
11	思い出	河野 美江子
12	「核の廃絶」を子供から孫へ	椎谷 百合子
13	川柳	原 昌子
14	悲しい叫び	城楽 テツエ
15	戦後五十年に想いをよせて	清老 綾子
16	さぶちゃん	高橋 繁子
17	通学の思い出	中野 アキヨ
18	色んなことがありましたね	中原 頼子
19	激動の世代	中村 綾子
20	峠	桧垣 澄子
21	命	藤井 保子
22	原爆の思い出	水島 愛子
23	忘れないで	峯岡 豊子
24	三人の子どもさん	森川 悦子
25	一九九五年 戦後五十年	森富 郁子
26	弟よ	矢島 民子
27	戦後五十年に当って	山田 益巳

(アイウエオ順)

戦争は悲しいね

井上 久枝

1995年（平成7年）8月今年もまた暑い夏です。

50年前の夏を思い出します。真っ青な空，白い雲，明るい風景なのになぜか8月は悲しいのです。6日・9日・15日，と云う歴史に残る，語り継ぐべき真実をかいま見たからでしょうか。

50年前私は14才の女学生でした。

広島に原爆が落ち救援隊を出すことになって，私は多くの同級生と広島の大河小学校収容所に行きました。120～130人おられた患者さんの看護及び毎日外来患者さんの傷の手当補助，清掃，死体処理，食事の炊き出しなど，焼け崩れた広島の街に一週間居て懸命に活動しました。

今思えば大変なことなのに，どんな気持ちで働いたのかどうしても思い出せないので。まだ少女だったので何も考えないで，言われるままに動いていたのでしょう。細部は記憶の彼方に消えて，一番おぼえていることを一つ書いてみます。

毎日大やけどの方が亡くなられ，ある日2，3人の級友と死体の焼却を手伝うことになり，崩れた家の木片を拾って集めました。近郊から動員された消防団のおじさんたちだったので，そのおじさんたちが鉄の棒をくねくねと曲げて大きな手製の焼き網を作り，5，6人の遺体をそれに並べ黒い油をかけ，私たちの集めた木片に火をつけて，小学校の運動場の端にあった砂場で火葬したのです。

炎天下で火を燃やすので，おじさんの一人が「ヤレ，熱い暑い」と言って死体の顔にかけてあった日本手拭いで流れる汗を拭いたのです。私たち女学生はキャーと声をあげて自分の顔を手で覆ったのでした。死体の顔がのぞいたから驚いたのではなく，かけてあった布で顔をぬぐったことの方なのです。

あの頃は死体を見ても恐くなくなっていましたから。やけどはないのに身体中に斑点が出て，体内の腸や内臓が熱線で溶けたのかどうか，どろっと塊りのある血を吐いて死んで逝く人が毎日の事なのです。死体にウジがわいたのを見たのも初めての体験でした。

1985年，暮れ わが家に娘の友人でアメリカ青年のマークさんが首からカメラを二つもぶらさげて広島を見学するためやって来ました。その日の夕食後コタツに入り，ミカンなど食べながら娘と大笑いして何やらお喋りしています。みれば百人一首で坊主めくりをしています。終戦時私の未来にこのような光景が展開するとは夢のよう。

原爆資料館やドームを廻って帰宅した彼に，感想はと聞いたら，留学4ヶ月足らずの青年は，日本語で「戦争は悲しいです」と言ったのです。それから戦艦大和を作っ

たドックや工場跡もあちこち歩き彼は大阪へ帰って行きました。

半世紀前、日本でアメリカでアジアでどれほど多くの未来ある若者たちの血が流されたことか、思えば本当に不幸な時代でした。

1995年、夏 涼しい部屋でこれを書いています。見渡せばこの部屋にあるものは、クーラー、テレビ、おいしい飲み物などなど便利に囲まれているけれど、50年前は日本人もみんな貧しくて、何も無い生活を強いられていたのです。

窓から眺める風景、例えば高層ビル群、派手なスポーツウエアに身を包んで、ラケット片手にテニスコートに急ぐ主婦たち、手足のすらりと伸びた男女の高校生達は、皆思い思いのリュック型カバンを背に、手をつないでおしゃべりしながら楽しそう。色とりどりのファッションでおしゃれした娘たちが往く。

暗い戦中戦後の時代を通り抜けた私たちは、平和がどんなに大切に貴いものかがよくわかります。

戦争を知らない世代の人が多くなり、悲惨な戦時中のことなど普段あまり話題になりませんが、国と国との喧嘩なんて、どの面からみてもいいことは一つもありません。歴史の真実を明確に認識することからはじめて、それを子孫に語り継いでいってください。

いつの時代もそれなりの違った苦悩はつきないでしょうが、一番可愛そうなのは内地、外地にかかわらず、戦争のために死んで行った人たちだと、暑い夏が来る度に涙しながら思うのです。

あの頃の女学生も、老齢と云われる年になり「君よ、今昔の感如何に」、これは音戸の瀬戸公園に建っている句碑だそうですが、終戦から50年のこの夏、しみじみその感を味わっているこの頃であります。

五十年前を振り返り思いのままに

梅本 照子

戦後 50 年が過ぎました。私には本当にアッと云う間でした。「人生五十功無きを愧ず」と海南行に詠まれています。65 才迄ただ年を取り皺が増えただけでした。

二人の娘を育てながら会社勤めを 25 年続けました。家庭と仕事の両立に悩みながらも家庭を犠牲にして一生懸命走ってきました。その間に 48 才の秋と 54 才の春に同じクモ膜下出血の病に倒れましたが、まだ此の世に使命が残っていたのでしょう。今に生き永らえています。

娘たちが嫁ぎ又夫婦二人の生活になって 20 年になる時、突然孫の世話をするようになりました。転勤で山陰に住む長女の息子です。祖父母の近くに置けば何かと好都合であり、少々惚けて来た私たちに「活」を入れてくれています。食べ盛りの男児を迎えて毎日を油っこい食事や大洗濯物にてんやわんやしております。一世代を超えた孫の恵まれすぎた学生生活を見ていると、50 年前の私たちの学生時代とを比べて思う時、本当に戦争と平和だと感じます。

戦後平和になった喜びで私たちが味わった苦勞を子供たちにはさせまいとついつい甘やかして育てた責任を感じます。

私たちの学生時代は戦前戦後の大激動の時で、一番楽しいはずの時代を戦争の悲惨、苦しみを味わいました。私は卒業後すぐの結婚でしたので、今振り返るとそこに青春があったと、なつかしい思い出となっております。

戦況のきびしくなった昭和 19 年の二年生頃から勉強は第二で、農繁期にはあちこちの近郊の農家へ田植や稲刈りの手伝いでした。田植がすんで学校へ行く時、足がふやけて運動靴が入らなくなって困った事がありました。又三年生の時はミシン踏みです。なれないミシンで、ある人は指を縫ってしまいました。人差指の爪の真中をミシン針が貫通して突きささったまま医者へ走られた友達もいました。又一日中腰掛けて足踏みするので、足が腫れ脚気になる人も大勢いました。それでも当時は国のためと「欲しがりません 勝つまでは」のスローガンで毎日頑張ってきたものです。

私には若くして戦死した二人の兄がありその兄たちを偲ぶ時、あの終戦間際の通学途中の忘れられない出来事を思い出し胸が痛くなります。

当時は「男女七才にして席を同じうせず」の古言に随い汽車通学も列車の前方車両に男子学生で、後方車両に女子と分れて乗っていました。戦況きびしいながらも若くまだ子供だった私たちは車両の中でワイワイキャーキャーとおしゃべりに夢中でした。

そんな時、前の車両から突然一人の、今の高校生位の兵士が走って来て、いきなり

女子学生の友人に抱きついて来ました。皆はキャーと悲鳴を上げて後の車両に逃げました。その兵士はなおも追いかけて来ながら「自分は今から戦場に行くところだ、二度と生きて帰れないだろう、今生の別れにせめて女性と手位握ってみたい、握らせてくれ」と迫って来ました。男女間の躰のきびしい時代に私たちはただキャーキャーと逃げ惑うばかりでした。車両には他の一般の乗客も大勢乗っておりこの様子を見ていましたが、誰も止める人もなく声もなくジーと見ているだけでした。この時丁度汽車は駅に着き、皆あわて飛び降りました。まだ後の方で兵士は何か叫んでいましたが、汽車はそのまま発車して行きました。あの兵士はその後どうなっただろうか。

二ヶ月後には終戦になりました。兄たちの戦死の報を聞いた母親は、せめて結婚させてやりたかったと、泣きくずれていた姿を今も忘れられません。

私たちは実際に直接敵の弾を受けた事はなかったのですが、あの忘れようにも忘れられない広島原爆の日の事は、今でもはっきり脳裏に焼きついています。登校途中の駅前で、ゆっくり落ちる落下傘からはげしい光と共に起こった轟音や、あのきのこ雲が、ありありと目に浮かびます。昼すぎに西条駅に止まる上り列車から降りて来る人を見た時は、目を覆いたくなかったものです。被爆者の惨状の姿は、今でも怒りと共に永久に忘れてはならない事であります。本当に戦争ほど残酷なものはない、戦争ほど悲惨なものはないと思います。

この事は孫たちにしっかり伝えて、世間や社会に甘えることのないように教えて行きたいと思います。私たちはあの苦勞を身で知っているので平和を感謝し大切に出来ますが。

本当に平和ほど尊いものはない。平和ほど幸せなものはないのです。

これから残された余命を「蔵の財より身の財大切なり、身の財より心の財第一なり」の古言のように、蔵の財からはもう才覚も力もなくすでに手おくれですので、身のたからを大切に無理なく細く永く生きて、一日一日を大切に心のたからを磨きながら、生涯青春で自分らしい人生の仕上げをしてまいりたいと思います。

あの日あの時

榎野 ツルエ

戦に^{おとめ}少女の情熱燃やしたる^{とう}沓き日のこと詠い残さむ

勤 労 奉 仕

教科書の代りに持ちし鎌と鋤朝に田植し夕べ草刈る
暗渠への排水作業に泥の手で炊り豆分けし友とはしゃぎて
吸ひつかれ離れむほどに好かれたり胸毛のよ立つダンゴビールに

通 学

自転車にパンク修理の道具つけ二里半なんぞや八本駅に
「則重」の^{たにま}溪谷の水を汲み上げてパンク修理を終へて家路に

授 業

軍刀の光りのもとので教練の分列行進に意気の高まる増谷先生の授業
欠くことは恥とされたる救急の袋の中の点検厳し

学 徒 動 員

ミシンの胴ぐつと握りて踏みあぐる学校工場音の凄まじ
日の丸の鉢巻締めてミシン踏む前立てつけは山積みとなり
ミシン針弾みて指縫ふ事故の友脚気に病む友日増しにふえぬ
休憩も許されぬまま^{かが}穴勝る流れ作業は熱気に満ちて

救 援 隊

比治山の小学校は被爆者の水… 水… 水… と絶へ絶へに乞ふ
「むすびです」腕の千切れし被爆者の^よ攀じいる膝に載せてあげしも
焼け残る木を組み上げて屍体積む筈の下より出でし足あり
幾山河こころに宿る想ひ出よ宝となりて^{とわ}永遠に輝け
友、友よ 今大輪の姫さゆりスクラム組んで大地に立とう

五十年を過ぎても

海老根 孝恵

先日 1995 年（平成 7 年 5 月末）亡父の法事を営むため、91 才の母共々、久しぶりに西条に降り立ちました。

私も藤井保子さんが書かれたように、戦後の定員オーバーの中に、引揚者の一人として転入しました。終戦翌年の春まだ浅い時季だったと記憶しています。

全てが慣れない環境の中で、オズオズと転入の朝、指定された席に座りました。ほんとうに芯から肌白い顔の方が隣席でしたが、にっこりと笑って迎え入れてくれました。教室の一番最後の隅の席で、「原爆投下後、救急看護の一員として、おむすびをつくり配って歩いたこと、蛆が這う火傷のあとを間に合わせの包帯で…」などなど話しながら、「自分が何故こんなに毛が抜けるのか、高熱が出たり、その度に学校も休むため席がいつも後なの…」などなど。当時は何の理由も分からず、唯々驚きをもって聞いていたことを思い出します。

戦争、敗戦と世の中不安定の中、身も心も過敏な年頃の私たちだったと思うのですが、当時の校則として『髪を後で二つに分けてゴムで結ぶ事』を忠実に、輪ゴムでやっと 5、6 本の毛を結んだいたわしい頭髪の方…。確か三宅さんとおっしゃった八本松方面の… と、なつかしい名簿を頂く時、必ず該当するお名前を探します。

50 年を過ぎた今でも心の中で、何時も何時も気懸かりなことなのです。

時の流れに

大林 春美

今年の夏は戦後 50 年目の夏だ。梅雨があがると同時にものすごく猛暑で、夏の日を過すことも一苦勞であった。時間をタイムスリップして 14 才の夏にもどしてみると、つまり 50 年前の夏のことです。太平洋戦争の最中で、国を挙げての戦いであった。当時は、子供と年老いた人のみ銃後の守りをしていた。無力なことである。それでも国策に従い戦って勝つことのみ信じてやまなかった。軍事教育の徹底である。陸軍の被服廠に配属され、学徒動員を誇りに思った。冬の寒い日ミシンをふみ、火の気のない仕事部屋も寒いとも思わなかった。この歳で国の手助けをしたのだから…今もって忘れられない。

きびしいことに耐え、空腹に耐え、精神的にもあらゆることに耐えた。そのことがずーっとずーっと今まで続いている。少々の貧しさも平気である。戦争・終戦…そして 50 年を経た。

戦争・原爆の痛みを心の奥まで味わって、これ以上の人生の経験はない、また、出来ない。現代を見てどうでしょう。手の届くところ何でも物の豊富なこと…手作りしなくてよい。でも決して幸せとは言えない。世相をみても犯罪の多いこと。心の充実のない現れか。貧しいことだ。

私どもは人生のよい経験をしました。これを基に生きていますので、今を楽しく生きられます。感謝の気持ちでこれからも元気で生きていきたいと思っております。

同期の皆さんとも交流を重ね、意義ある人生を送りたいと思っております。

芥子の花

沖川 豊子

戦争が終わって50年。50年と云う歳月の流れに、15才だった少女も、白髪の老女と変りました。

私たちの一番夢のある楽しい少女時代は、戦争も末期で厳しい物資の統制、「贅沢は敵だ」「欲しがりません勝つまでは」と、みんな勝つことを信じて、白い鉢巻き姿も勇ましく、救急袋を肩に掛け、被服廠となった学校工場に通いました。当時三年生だった私たちは学徒動員の名のもとに、毎日ミシンを踏みましたね。

私の担当は前立てでした。始めの頃の慣れないうちは、よくお直しがありました。

『お直しっ!』の大声と共に、一生懸命ミシンを踏んでいる生徒たちの頭越しに、お直しのシャツが投げ返されて来るのです。ミシン針一本折れても「始末書」を書かされる。でも、連日の厳しい訓練で「三つ巻」も「穴かり」も上手になり、簡単なミシンの修理だって出来るようになりました。

戦後は国中が栄養失調寸前、肉も魚も姿を消して、農家でありながら米不足。麦飯、大根飯は当たり前、農家だから野菜だけはあったけれど、調味料の塩まで不自由な生活が続きましたが、病気もせず、学校を休むこともなく、不良にもならず!、真面目だけが取り柄の生徒でした。

古き良き時代とは言い兼ねるけれど、人情だけはたっぷりとあったような気がします。その当時、私たちは自転車と汽車での通学でした。自転車で15分、汽車で10分、歩いて15分、それが通学時間でした。そして始め頃の定期代が半年分で10円10銭でした。

あさは7時半の汽車だったので、冬場は6時半頃うす暗い内に家を出ていたように覚えています。それも慣れるにつれだんだん家を出る時間が遅くなり、駅近くなるにつれていつも自転車を飛ばしていましたね。物資不足と云う事もあったのですが、「経費節減」という家庭の事情もあって、私の自転車は男物の中古自転車を、女乗りに改造、部品は塗り替えて、外観は一応新品同様に見えました。

始めは中々調子良く動いてくれましたが、一年・二年とだんだん化けの皮が剥げて、ペダルは重くなる、踏んでいる割には前に進まない。その内パニック!それを宥め賺して四年間、私も自転車もよく頑張りました。

私たちが乗る八本松駅は、地形的にかなり高い位置にあり、特に駅に一番近い「トンネル」附近から、急勾配になっています。それで上りの客車は一両、貨物列車には二両の後押し機関車が連結されて、「何だ坂こんな坂」「シュッシュッポッポ」と後押ししながら上って来るのです。当時の客車は大抵満員で、坂にかかると難儀そうに「シ

ューツシューツ」 とながーく蒸気を吐きながら、喘ぎ喘ぎ速度も落として上って来ます。それに引換え下り線は、いとも軽々と下って行きます。

上り下りの汽車の音で、「あの音は上り貨物」「この音は上りの客車」などと、長年の勘で大抵わかるようになるのです。

家を出るのが遅くなり、急いで駅の近くになった頃、下の方で汽車の音、どうやら私たちの乗る客車のようです。「あの音は客車のようよ、急いで急いで。」と一生懸命ペダルを踏みます。勿論私一人だけではなく、お仲間は何人かいます。

日頃から「早い組」と「遅い組」があって、大抵メンバーはきまっています。私はその両方、遅い時があれば、びっくりする程の早い時もありました。

鉄道の線路は、通学道路と大体平行に走っているのです。時には交差する所もありますが、駅に近づくとつれ、線路と道路の間隔が狭くなり、やがては近くを並んで走るようになるのです…。いくら汽車がスピードを落としていても、自転車よりは早いので、だんだん後ろから迫って来て、遂には追い越して…。

それを横目で見ながら「まだ間に合うかな。」と思いながら一生懸命ペダルを踏み続けます。平行に走っているのですから、機関車の窓から石炭で煤けた機関士の顔が見えるのです。こちらを見ながら「頑張れ！」と言うように手を振っています。「待って！」と云いながら、みんな必死で自転車を飛ばし、自転車置場で荷台からかばんをむしり取る様にして、自転車を預かってくれる小母さんに「後お願い！」もそこそこに一目散にホームに駆け込みます。勿論改札口は遠回りになるのでパス。勝手知ったる坂道を… 息も絶え絶えに。一足先に乗り込んだ友達に「早く早く。」と励まされながら、ゆっくりと動き始めた列車に飛び乗った事もありました。

今になって思えば、発車の時間を延ばせる筈はなく、発車の合図があれば発車しなければなりません。幾分ゆっくりめに発車して、ゆっくりと進んでくれたのではないかと…。

もっとも、その当時汽車が10分や15分遅れるのは日常茶飯事で、別に珍しい事ではなく、家を出るのが遅くなって「今日も汽車が遅れたらいいのになー。」等と思っていると、そんな日に限って、きっちり定刻に来たりして…。

時には一時間も二時間も遅れることもあって、そんな時には授業に差し支えるので、自転車で学校まで直通（真面目だね）。自分が乗り遅れた時も直行です。雨の日、風の日、それなりの苦勞もあったと思うけど、すべて忘却の彼方、今はただ懐かしい思い出だけ…。直行と云えば、（これは戦時中のこと。）勤勞奉仕の稲刈りに、黒瀬や板城方面まで片道二時間半かけて行き、日中は稲刈りをして、家に帰り着くのは暗くなってから、お腹ペコペコの毎日でした。

戦争も末期ともなれば、自転車屋さんも閉店休業、我がポンコツ自転車は度々パン

クして乗り主を随分困らせてくれました。通学の途中でパンクすれば、そこからは歩きです。そして指に逆剥けを作りながら自分でパンクの修理をしたものです。

いろいろあった戦争もやっと終わり、人々の心に少しずつ平和が戻りつつある頃と言っても、無い無いづくしの生活は続いていましたし、まだまだ厳しい食糧不足、家の回りは花より団子で、さつま芋やかぼちゃ畑に変身しました。家々の庭に花など植えて楽しむ余裕など無い時代でした。

そんなある日のこと、通学の汽車の窓から外を眺めていると、走る窓の外の麦畑の中に何か赤いものをみつけました。二度三度その場所を通過する度に、気をつけて見ているうちに、赤いものは芥子の花らしいと見当をつけました。そこは丁度西条と八本松の間、鉄橋の近くでした。

確かめるには便利の悪いところですが、どうしても確かめたくて…。 帰り道か、帰りだけを一時間もかけて歩いたのか定かではないけれど、麦畑の持ち主に見つかりませんようにと祈りながら、その赤い花「芥子の花」を手にしたことを覚えています。

やっぱり芥子の花だったと確かめられて大満足。それ以来芥子の花が好きになりました。今頃は家々の庭といわず畑の中も、塀の外まで花々で溢れています。その頃は一輪の芥子がとても新鮮で嬉しかったのでした。

北海道の広い原野、見渡す限りの赤やピンクの芥子の花…、ヒマラヤの高山に咲く青い芥子。芥子の花には他の花とは違った思いがあるのです。

我が家の狭い庭にも時々花を咲かせますが、何と云っても高山に咲く「イワギキョウ」や、可憐な「駒草」などに心惹かれる今日この頃です。

もう少し若ければリュックを背に、山に登りながら山の花を楽しむのに、残念！少々遅過ぎました。

年に一・二度アルプス方面に出かけて、ロープウェイを頼りに花々を楽しむのですが… それもいつまで！

限りある人生です、心おきなく楽しみましょうね。

被爆者救助のため段原小学校に行った

折川 千鶴子

思えば50年前、女学校二年生の頃の楽しい思い出はない。

それは戦争最中で学校から稲刈り・山の木出しと遠くまで行き働いたものである。上級生は学徒動員され、私達は兵士の被服を縫う仕事で、ミシン掛け・ボタンつけなどをしていた。

時は、1945年（昭和20年）8月6日8時15分頃のこと、学校の窓から黒い煙のようなものが、ぐんぐん上がるのを見た。これが大惨事になるとは誰も思わなかったでしょう。

その後、十日位経って私たちは被爆者が収容されている本川小学校と段原小学校に分かれて、救助のために行った。

屋外で長い行列を作り、傷や火傷の手当てを受けておられる人々、屋根のない場所に寝ておられる子どもや大人たち。

私たちの仕事は、食事を配給してあげること、大きな「ざる」におむすびをつくりタクワンを添えて配ってあげた。その時、一人の少女のお腹の上を「うじ」が行ったり来たりしていたのを見た。その少女の口から「サクラ、サクラ」と小さな声で歌っているのが聞こえた。やっぱり日本の子、ますますかわいそうに思えた。

それともう一つ強く残っていることは、毎日大勢の人たちが亡くなられていったということです。

この人たちは、運動場で灯油をかけて焼かれているようでした。ある日の夕方、老人が、拾った骨をもって「せがれが先に死んだ。」

と呟きながら歩いておられた。

思い出の数々の中でも（この二つのことは）、永久に忘れることはできないであろう。それから早や50年経ちました。物は豊かで便利な社会になりました。その中で、まあまあ元気で過ごさせてもらっていることに感謝しながら生かされています。

私の女学生時代

鍵本 富久枝

戦後 50 年を迎え、記憶のうすれた女学生時代を回想しております。

「欲しがりません勝つまでは。」と、ただ戦争に勝つために、食料難や物資の窮乏にも堪え忍び、毎日毎日が勤労奉仕に明け暮れて勉強は何時したのかと思う位です。田植、稲刈り、暗渠排水と、毎日の事で作業にも慣れ、速さを競ったり結構楽しんでたように思います。

何ととっても昼食の白米のおにぎりは、楽しみの一つでした。

三年生になってからは、教室が被服廠の工場と化し、軍人さんの軍服の下着の縫製にと精を出しました。夜、警戒警報のサイレンが鳴れば家が学校の近くでしたので、急いで身支度をし、学校工場の警備に行きました。防空頭巾と救急袋を肩にかけてモンペをはき、足元は下駄履きという身支度です。

警備といっても緊迫感はなく、おしゃべりをして、お腹が空いたら救急袋の中の、梅肉エキスとか、オブラートを、おやつにしていた記憶があります。

その頃「ぜいたくは敵だ」「進め一億火の玉だ」「撃ちてし止まん」と戦意高揚のため、いろんな標語が作られ、私たちの頭の中はそれらの言葉でパニック状態になる事もなく、けなげに従順でした。今流行語となったマインドコントロールされた状態だったのでしょうか。

勝利を信じて疑わなかっただけに、すべてが堪えられたのだと思われまます。それだけに 8 月 15 日の終戦のニュースは、ショックが大きくて信じ難いものでした。

何ととっても一番強く印象に残っている事といえば、原爆被爆者の救護に行った時の事です。広島駅まで超満員の列車で行き、広島駅から宇品線の貨物列車にゆられて目的地大河小学校へと向かいました。

見る物すべてが自分の目を疑うばかりの情景でした。早速一人で一教室を担当し、排尿の始末の役割です。花瓶や、火鉢にされた尿をトイレに捨てに行くのですが、それを「おねがいします。」と、か細い声で渡される被爆者の方の顔をまともに見る事は出来ませんでした。一人ひとりがそれは無残な姿でした。食事を配ったり、市役所に行き、お米、その他の食糧を大八車で運んだ事もありました。市役所には、お米、缶詰、砂糖などなんでも山積みにしてありました。有る所には有るものだったものでした。

それらの仕事の合間には蛆や膿のついた、包帯を大きな釜で煮て洗い、ロープにかけて干すという作業もありました。釜の下を燃す燃料は廃材の長い板を、片方の端を大きな石にのせ斜にして上を飛んで適当に折るのですが、それが一日の中で一番楽し

い一時でした。廊下を歩けば担架に乗せられた体中に蛆の湧いた死体はあるし、校庭の隅では死体を板と交互に積んで焼いておられるし、この情景は50年を過ぎた今も尚、脳裏に焼きついて離れません。

夜は二階の作法室で寝るのですが、修学旅行の味を知らない私たちは、はしゃいでなかなか眠れませんでした。夜中にボンボンと、不気味な声が聞えてきます。下の音楽室のピアノを幽霊が弾いているのだと言ってキャーキャーと悲鳴をあげたり、或る晩は、電気がついて騒がしいので目を覚ますと、部屋の中に男性が立っていたとの事で、その後熟睡出来ない夜が続きました。

後でわかった事ですが、ピアノの音と思わせた犯人は食用蛙だったとの事でした。食欲もなかったけど一週間頑張って、やっとの思いで家に帰る事が出来ました。

15才の少女時代を思い浮かべる時、よく堪えて精一杯頑張ったものだと自分自身をいとおしく思います。それもいいお友だちに恵まれよい仲間と一緒に出来た体験だと思っています。

戦後50年と云う事で、今年の8月15日前後のテレビ放送では、今まで明かされなかった事実が、次々と放送され、今更ながら戦争の悲惨さを痛感しました。その事は、ここでは書く事を控えさせていただきます。

勝利を信じて南方の空や海や島で若い命をお国のためにと散っていかれた方々の遺書などが公開されたり、又生き残られた方々の体験談を聞かせて頂いて、胸のつまる思いで一杯です。

今私たちが、何不自由なく平和に暮らせるのはこの方々の犠牲のもとに築かれたものである事も忘れてはならないと思います。

被爆者救護の体験記

川手 ナツ子

広島・長崎の原爆投下そして終戦… あれから50年を迎えました。私たちもいつのまに老人と呼ばれる年齢となっています。体の不調を感じながらも、今日の日まで生かされていることをまず感謝しています。年と共に記憶もうすれ、当時の事を詳細には覚えていませんが、頭の中に強烈に焼きついている事ごとを少し書き綴ってみたいと思います。

学校から救護隊として広島駅についた。駅前から眺めた市内は、在りし日の姿は幻のごとく消えうせて、見渡す限り廃材のくすぶりと瓦礫が黒ずんで、たたきつけられたように地面に累積し死の街と化していた。炎暑の熱風は焼死した人体の死臭を漂わせ、その光景に驚いたものである。

私たち救護隊は白島町へ行った。救護所についての私たちの仕事は、食事の分配の役割であった。大きな鉄釜に洗った米を入れご飯をたいた。火が強くと大こげをつくり失敗した。その時全部火を引いて粥状の表面を棒でついて穴をあけ水分の引くのをまち、どうやらふっくらとしたご飯が出来た。そして八勺のむすびをつくるのだが、柔らかい手は熱さで真っ赤になった。それでも夢中になって大変な数を作った。この時はじめてむすびを作る経験もした。上手に出来なかった。出来上がったむすびを、バケツにいれて、一個ずつ手渡して配って行った。蠅のたかった手にのせてあげる。また蠅がたかって胡麻塩むすびになる。「早く食べてくださいね。」と言っても、返事もなく、生死の分からない状態の人が多かった。次に配る時、前にあげたむすびが、蠅で真っ黒のまま手にのっかっている。私たちは悲しい思いに顔を伏せながら、むすびをもってまわった。

広い収容所には、何人収容されていたのか見当もつかないが、私たちが間をくぐって廻る足元にも、何人かの死体にムシロがかけてあった。夕方には広場の隅に遺体がむごたらしい有様で並べられ、重油を注ぎ燃やされる光景をみた。人の最期にもえる炎に人間の終末を遂げる悲しさが込み上げ涙が止らなかったことが脳裏からはなれない。

8月6日を迎えるたびに思い出し火のようにふきあげるものがある。それは原爆の怖ろしさである。救護活動を通して、戦後尊い経験をした私たちが、その体験記を書くことにより、平和の尊さ、命の尊さを再度考究し猛省してみる事が必要ではないかと思う。

「世界人類が、平和でありますように。」

終戦

木原 秋子

今年は戦後 50 年になる。毎年 8 月 8 日は感無量の思いが湧く。あれから、現在までいろいろな事がありましたが、どうしても忘れられなくて憤りを感じるのが、あのきのこ雲です。

当時 14 才で被爆者の救護、死体処理に当たったことが、つい先日のように思えるのは何故だろうかと自分に問いかける。とくに定年後の自由な生活になってからは尚更感じる。

電気もない夜中にトイレですれ違ったマーキュロクロームの真っ赤な顔は、赤鬼に会ったようで恐ろしかった。意識不明で毛布にくるまり、死を待っている女性の体にウジが湧き、初めは割りばしで一匹残らず取った積りが二日目は乳房と下腹部がウジの行列で、三日目は、乳房がウジの巣で、乳首がゆれて間もなく息が消えた。

連日の死体の焼却に一日三回、運動場の片隅に作られた場所で、亡くなった順に焼け跡の材木の上に 5～6 体並べ、更に材木を置き、コールタールを撒いて朝昼晩と焼いた。そんな日が続いたが、夜は臭気で眠れないので中止となった。

ほんとうに 50 年たったとは思えなく、きっと死ぬまで忘れることは出来ないと思う。1952 年（昭和 27 年）に上京して、六畳一間で兄二人と生活した事、職場では昇格などに影響があるので原爆の話は口にせず、体の不調の時は不安な毎日であった。戦争で失ったものは数多く計り知れないけれど心の傷だけは水に流すことは出来ない。

でも敗戦になって良かったと思う。韓国で生れ育った頃を思い出すと、36 年間の日本の植民地政策で、日本人は随分と韓国人に権力を振るい無理解だったと思う。私も使用人につらく当たったことを思い出す。心から韓国の人にお詫びを申したい気持ちです。

50 年経った今でも核実験が行使されている現在、もっと政府は強力に廃絶に取り組んで貰いたい。

これからは健康に留意して自由に一日一日を大切に過ぎて行きたいと思います。

遠く離れて暮らしていても、テレビなどで天気予報、野球等広島に何時も関心を持つというのは、やはり心の故郷に良き友が暮らしている証として自己満足している今日この頃です。

これからも元気で頑張りましょう。

1995 年（平成 7 年）8 月 15 日

思い出

河野 美江子

「川原さん、一寸！」

下見地区での暗渠排水工事の作業で、お昼休みの終わる頃だった。

先生に呼ばれて行くと、「お父さんが大怪我をされたそうだから、すぐ帰りなさい。」一寸口籠りながら言われる先生の後から、「迎えに来たんですでえ、帰りましょうや。」と、近所の人が近寄って来られた。

1944年（昭和19年）4月14日、賀茂高女二年生になったばかりの、13才。家族は、父母、兄三人、姉一人、弟と私の8人家族であったが、長兄は志願して、陸軍通信隊軍曹となり、中支で従軍。次兄は病氣療養のため入院中。姉は賀茂高女卒業後、挺身隊員として尼ヶ崎で化学研究に携わり、三男であるすぐ上の兄は、高校と海軍の双方の試験に合格、母の「学校へ…」との願いも空しく、私の賀茂高女入学後海軍へ入隊して、家には父母、弟と私の四人だけだった。

迎えに来てくださった近所の人々が驚くほどの速さで、急な登り坂も、いつもは自転車を押しながら登って帰る長い坂道も、自転車から一度も降りる事もせず帰った。

家には近所の人や、講中の人達で一ぱいだった。

働き者の父は、朝三時・四時頃から起きて商品の仕入れに行き、それが済むと体の弱い母に店を託して、農業に励んでいた。

その父が思いもかけぬ事故で急に逝ってしまった。そのため療養中の兄が母を助けようと帰ったけど、ホッとする間もなく召集令状が来て、私が病床に臥している日、人々に見送られて出征した。

当然私は、登下校の途中、店の商品や容器の運搬役を務めたり、休日や忙しい時は、夜も配給商品のための、各家毎の名簿、人員確認、割当て数量の計算表等の制作を手伝う事を余儀なくされた。

当時戦況は、下降の一途を辿りつつあったようだが、小学校五、六年生の頃から、出征兵士の家、戦死者の遺族の家の稲刈り・麦刈り等に勤労奉仕と称し、労働に従事した私たち…。

賀茂高女に入学しても、勉強の合間には、田植、暗渠排水、粗朶運び、山地開墾等、奉仕作業にとり出された。それから間もなく陸軍被服廠の学校工場となった教室で、（校章を縫い付けた）白鉢巻きでの服務…。

一方、家でも食糧増産のために、低くて人里に近い山は、切り開いて田地にするように指示されたようだ。持ち山の木を切った開墾が始まったが、男手の無い我が家では伯父（母の兄）の手を借りての作業であった。その間も敵機の空襲が激しく、空襲警報が鳴る度に木陰に身を寄せて、見上げる空に編隊を組んだ爆撃機が呉市の上空に

直行し、急降下したり、砲撃の音と白煙が、山の向うに見えかくれする中、「どうぞ被害がありませんように。」と、伯父と祈りながら又作業を続けた。

農業と商業で人手が無いため、姉が尼ヶ崎から帰って、家業を手伝う事となった。尼ヶ崎では本土決戦に備えて、婦人部は竹槍で藁人形を相手に、戦闘訓練に励んだという。

そして運命の8月6日の朝のことである。学校工場の教室で、目を射るような青白い閃光に、居合せた者が顔を見合せている中、ドーンと揺るような響き、「これ何よ」、「何だろう」と言い交わす時、ふと見た時計は8時16分であった。

その時、誰かの声で窓から西の空を見ると、入道雲のような煙がゆっくりゆっくりと盛り上っていき、その周囲は薄いピンク色の靄がかかっていた。燃料庫の爆発だろうと云う原子爆弾とはつゆしらず、ましてやその下で凄惨な悲劇がくり広げられているとは知る山もなく、ただただ見入っていた。

8月15日、村人が集合した小学校の講堂で、玉音放送を聞いた。喜ぶべきか悲しむべきか、判断がつかないながら、あゝ戦争が終わったのだと安堵の思いが胸の中に広がった。

しかし広島被爆の救援看護に携わって、余りの悲惨さ、残酷さに心がいたみ、侘しさと焦燥感にも似た思いで、見上げた夜空は余りに美しく、深い悲しみを覚えた。

被爆者救護の時に見た、広い講堂に裸同然の体や、顔中に赤チンキを塗ったり、絆創膏等を貼った人たちがギッシリといて、呻く人、悲鳴を上げる人…、校庭に出れば運び込まれた死体が、積みあげた木の上で焼かれ白骨となって行く…。校舎の廊下や土間には、捨てられた物のように、布やゴザに覆われた臨終間際の人、校庭の片隅で遊ぶ孤児の姿などなど。今も脳裏に焼きついて離れず心が痛み、生涯忘れる事の出来ない悲しい思い出です。

あれから50年…

結婚、病気、貧しい家計のやり繰り、長男の嫁としての色々な苦難をのり越え耐えてきた。今日があるのは、父の亡き後弱い体でも挫ける事なく、私たちに何不自由なく過させてくれ、そして私たちの我儘を許してくれ、嫁ぐ時、「人間は、一週間や十日は、水を飲んでも生きてゆく事が出来るから、頑張りなさい。」と見送ってくれた母。戦中下、「欲しがりません勝つまでは」と、色々な体験をしたお陰かと、今では懐かしい思い出として振り返る事が出来る。

今日の平和がいつまでも続くようにと祈りつつ、一日一日を大切に生きていきたいと念願しています。

1995年（平成7年）10月

「核の廃絶」を子供から孫へ

椎谷 百合子

戦後 50 年。今年の 8 月 15 日は例年のない熱気に包まれて過ぎてしまいました。50 年前女学校三年生、純真な乙女だった私たち、この戦いは勝利につながる事を信じ、ひたすらミシンを踏む毎日だった事を記憶しております。

そして、あの原爆投下、被災者の救急看護などは、半世紀経った今も当時の事をしみじみと回想し、遙けくも来つるものかなの感慨しきりです。

私たちの生きてきた過去を振り返り、本当に激動の時代を生き抜いて来たように思います。戦前・戦中・戦後、(自分たちの生き様とこの平和な時代に生きる今の若者たちとは大違い。) 私たちは貧しく苦しかったけれども一つの目的に向かって一生懸命に闘い続けた。この事実は尊い事だったと今も信じております。

あの 8 月 6 日原爆投下の前日、父親が作ってくれた「竹槍」なる物を持って登校しました。その日から竹槍訓練を始める事になっていたのです。「原爆と竹槍」の戦、それでも日本は勝つのだと信じて疑いませんでした。

そして 8 月 15 日の玉音放送、嘘だ。そんな筈はない。全員が涙を流し、教室の中のシャツを投げつけながら泣き叫んだものです。

半世紀を過ぎた今も心に残ること、それは被爆者看護の思い出でしょう。原爆投下 10 日目の 8 月 16 日、私たちが入市した広島は見渡す限り瓦礫と化していたこの惨状を目の当たりにし、日本は本当に負けたのだと実感しました。あの地獄図の光景は今も鮮明に脳裡に浮かんできます。

幼い男の子が、「ヘイタイサン助けて。」と、泣き叫びながら息を引き取りました。化膿した火傷の中を蛆虫がうごめいています。赤チンを塗るだけの治療、お化けのような被爆者が学校の土間、廊下と一杯に呻いています。校庭の一角では連日段重ねにした火葬、立ちのぼる煙を何の感動もなくただ茫然と眺めていたあの時。

一体これらの事は誰が責任をとり、誰が罰せられなくてはならないのでしょうか。

「核の廃絶」これが今一番の課題なのだと強く感じております。

核戦争の恐ろしさを、子供から孫へと語り伝えてゆく事が、今日まで生きて来た私たちの義務ではないでしょうか。

六十路半ばまで健康に恵まれ生きて参りました。夜明けを迎える事の出来る幸せに感謝の日々を過しております。

四十・五十路 いつか六十路の 蝉しぐれ

1995 年 (平成 7 年) 8 月 20 日

川柳

故 重原 昌子

生きてたら金婚式と砂に書き

運命とあきらめきれぬ九段坂

思い出はハワイの色の夏を着る

小綺麗に女ひとりの座を守る

孫がくる頃かとお菓子買って待ち

遺稿集 “母の詩” より

悲しい叫び

城楽 テツエ

私たちの女学校時代と言えば、学徒動員、原爆を切り離してお話しすることは出来ません。また、一年生の時から、農繁期には田植、稲刈り、農閑期には吹雪の中で暗渠排水の手伝いと、殆どを労働についやしていたと言ってもよいでしょう。それでも当時の私たちは、一言も先生に不満をこぼすことなく、毎日毎日が一生懸命だったと思います。つかれた時は、いつも母が口ずさんでいた歌

なかよく暮らしていけるのは

兵隊さんのおかげです

御国のために

御国のために戦死した

兵隊さんのおかげです

この歌声を耳にすると、そうだ、今日も頑張ろうと、自分を鞭打っていました。

三年生になり、学徒動員（被服廠）で毎日鉢巻きをして、ミシンを踏んだものです。ミシン針が曲がっても、すぐには新しい針と交換してもらえず、ランプで炙って金槌で叩き、先がとべばやすりですって使いました。今話せば笑い話にしか聞えませんが、当時は少しでも節約、物を大切に、真剣だったのです。ミシンの修理の担当は広の工場へ行かなかった上級生の方でした。なかなか順番がこないの、私は自分でよくやったものです。おかげで、当時の足踏みミシンの目飛び位、ドライバーを使って手早く直せるようになりました。

原爆といえば、被爆者の救急看護に行ったことです。

「お姉さん、やおうやってや。」「いっぱい後がつかえとるんじゃ、廊下を拭く気でやれ。」の会話をどうしても忘れる事は出来ません。

毎年来る原爆の日、そして戦後50年という言葉を目にする度、（あの少年はどうしているかな、元気になれたかしら、それとも…）と、色々な思いに胸が熱くなります。

私は救急看護に行った時、外来患者さんの担当になり、三原から来ていらっしゃった、お医者さんの手伝いをしたのです。両足に火傷をおい、その上にガーゼがはってあるのです。そのガーゼの交換に毎日来ていた一人の少年です。当時は、薬といえば赤チンキ位でしたが、それでも長い列をつくって沢山の被爆者の方が待っておられました。先生がおっしゃるのも、少年が小さい声で哀願するのも無理はないのですが、ガーゼを剥ぐと“ダラー”と血が流れ、少年の悲しい叫び「お姉さん、やおうやってや」の声を、どうしても忘れられません。

窓ガラスが飛び、むしろを陽よけに下げた教室が診察室です。運動場の片隅にあっ

た防空壕が火葬場，当時のことを話せば，胸が痛くなりきりがありません。

日本が戦争に負けるなんて疑った事もなく，まだ勝利を夢見ていました。神風を信じ，敵が上陸してきたら竹槍で突くんだと，エイエイヤーエイヤーと竹槍の稽古もしましたが。

50年の歳月が流れ，今振り返れば，当時の純真な乙女心が懐かしく，温かく胸にしみてきます。

戦前，戦中，戦後を生き抜いてきた私たちは，物資の不自由な苦しい時もありましたが，色々な体験をしたお陰で，今日の豊かな生活があるのだと，改めて感謝しております。

戦後五十年に想いをよせて

清老 綾子

1943年（昭和18年）4月、東志和国民学校より、9名の同級生と共に、憧れの賀茂高等女学校に入学し、私は西組の一人になりました。

担任は音楽担当の、とても美人の優しそうな先生でした。いつも下向きな姿勢で、小さな声で話をされますが、躰けには非常に厳しい先生でした。

当時一週間に一度、先生と一緒に弁当を戴く日があり、まだ学校生活に馴染めない、ある日の出来事です。みんな静かに弁当を食べていると、早く食べ終えた生徒が、アルミの弁当箱の蓋を「カチャ」と被せる音をさせました。その時ゆっくりと食事をなさっていた先生の顔色が急に変わり、「誰ですか、もう食べる気がしません。」と食べかけの弁当をしまって、職員室に帰って行かれました。

さあ大変、みんなで話し合い学級委員が謝りに行くことになりました。「これからは静かに戴きますから。」と言うことで一件落着。学級委員さんありがとうございました。

戦争もだんだん激しくなり、二年生の時学校工場化。学徒動員で白鉢巻きを真一文字に締め、「月月火水木金金」と毎日被服廠に通学致しました。寒い朝は手がかじかみ、おまけにミシンは凍り付いて思うように動きません。そんな事にくじけず、一枚でも多く縫上げようとみんなで一生懸命に頑張りました。外套や軍服のボタン付け、穴かがりも随分しました。

最初は針足が揃わず苦労しましたが、いつとはなく上手にかがれるようになりました。お蔭様で、今でもミシン踏みと穴かがりは上手に出来、戦争で残してもらった身の財産と喜んでおります。

キラキラと太陽の照りつける8月6日の朝、いつものように鉢巻きを締めガタガタ道を友達と自転車を漕ぎながら、八本松駅に行く途中、真青に澄みきった空に、一本の細い飛行機雲が目につきました。よく見ると、その先端に朝日を受けて「キラッ」と光る飛行機が、小さいながら西に飛んで行くのが見えました。別に気にかけるでもなく駅に到着。当時列車の遅れは毎日の事で、その日も待てどもまてども列車は来ません。とその時です、目を射るような強い光「ピカッ」、続き「ドーン」と大きな音。何が起こったか分からないまま、誰かが大きな火の玉の雲に気づき、さあ大変とばかり駅前山に走りました。あれが今、世界中で騒がれている原子爆弾と、その時誰知るよしもなく…。

終戦後被爆者救護の動員命令、第一回の救護班に参加。母の帯を解き、得意なミシンで大きなリュックを縫い、着替え衣類・毛布・梅干・炒り胡麻塩などリュック一杯

に詰め込み、17日広島入り。

目の前に見る広島は、予想を絶する悲惨な状況でした。被爆者の収容所に当てられた小学校には、各教室・講堂に立錐の余地もない程、血膿の付いた布団や毛布にくるまった被爆者が収容されていました。

鼻をつくような異様な臭い。

背中一面真っ赤に焼けたおじさん。

傷はないけれど、頭の髪がどんどん抜けていく男の子。

傷口の膿の中から、マッチ棒で蛆を取り除いている刺青の男の人。

「お母ちゃんお母ちゃん」と母を呼び続ける二才の坊や。

昼食のむすびを持って行って見ると、死んで冷たくなっている人。

腕の傷口が膿、肉がこぼれ落ちそうになっている小学生の男の子。

伝染病患者の別棟など。

思い出せばきりがありません。いずれも、もう二度と見たくない、出合いたくない現実ばかりでした。

当時永い間戦争に浸っていた私たちは、14才の女学生でした。その後、月日の流れと共に少しずつ授業も受けられるようになりました。懐かしい教室での思い出も、大切に心におさめております。椎名美奈子（大庭みな子）さんと同じ組であった事も、すばらしい思い出の一つです。作文「炬燵」と言えば、同じ組の人なら誰でも懐かしく思い出される事だと思います。

自作自演の「大いなる愛」のジャンバルジャンの主演を演じる椎名さんのすばらしい演技力。

『日が没せんとする一時間ばかり前、みすぼらしい身なりをした旅人が、ディニューウの小さな街に現われてきた。彼の名はジャンバルジャンと言ひ、生れはブリーの貧しき農家。幼いとき親に死に別れた哀れな男。』

主演になりきった椎名さん。ジャンバルジャンの名演技は、50年経った今も忘れる事が出来ません。

卒業後も時折り思い出しては、いずれかの世界で立派に活躍なさっているであろうと、信じておりました。期待どおり今や日本を代表する大作家になりました。おめでとうございます。

卒業後は多忙な連日で、あっと言う間に数十年が経っておりました。何の余裕もなく、唯々野良仕事に明け暮れ、気の付いた時は、50才の峠を遙かに越えておりました。働く事しか能のない私でしたが、榎野（旧姓 野村）さんのお誘いを戴き、懐かしい賀茂高女時代の方々にお逢いできる機会を戴きました事に感謝致しております。その気持ちを大切に、お応えさせて戴きたく、苦手なペンを取りました。どうか立派な

文集が出来ますようにお祈り致します。

私も残された人生を大事に生き、御恩報謝の日暮らしをさせていただき、体の許す限り同期の皆様方とお逢いさせていただきたいと念じております。

最後に皆様方のご多幸とご健勝をお祈り申し上げましてペンを置くことと致します。ありがとうございました。

あの日、いつものように、江熊橋を渡り、女学校へと歩いていた。8時何分過ぎていたのか、B29が青い空に一本の白い線を残しながら西へ飛び去って行った。何分たったのか、ピカッ！と一瞬の光そして遙か彼方に、もくもくと上がるきのこ雲これが原爆投下の瞬間だと、誰一人知る由もなく、学校工場へと急いだ。思えばあの一瞬の光が、兄三郎の運命を変えた。

その朝母は寝すごして、汽車に遅れると言う兄に、次の汽車で行くようにすすめたが、兄は今日は学童疎開があるからと、西条駅へと自転車で急いだ。運命の別れ道とはこのことか、遅れていた汽車が丁度ホームに入ってきた。兄は急いで飛び乗り県庁の職場へと急いだ。運命のピカドンは、電車の中で白神社前だったと聞く。

暑い真夏の夜、ただ一つの団欒は、家族での夕涼み、団扇を使いながら一日の出来事を語り合い、他愛のない時を過ごすことだった。そんな夜、呉での空襲による火の手がよく見えた。火の手を見ながら、「さぶちゃん、空襲に遭ったら、早よう逃げんさいよ。」と私が言うと兄は「わしゃあ逃げるんは、一番じゃけん心配せんでええよ…」と得意そうに答えた。当時上の兄は、中支に出征中で、三年前に父を亡くし、小学校に勤める姉と私と母、女家族の中で兄は牛の世話から、百姓の手伝いなど大切な存在だったので、心配をかけまいと、得意そうに答えたように思えた。

白神社前で車外にほうり出されてから、何を考えながら逃げたのか知る由もないが、黒煙の中をただ風上へ風上へと、倒れては立ち上がり立ち上がりどれ程の時間が過ぎたのか、七回目に目が覚めた所が、比治山だったという。もう立ち上がる力もなく、倒れていたら兵隊さんが、むすびを二つ手渡してくれ、それを食べやっとの思いで海田駅まで歩けた。海田駅から汽車に乗り7日夕方西条に帰ってきた。幸い怪我らしい傷も耳の上に少しだけ。外傷はほとんどなく、さぶちゃんは逃げるんは上手なんだと、15才の私はうれしくて、無事に帰れたことを喜び合った。朝日町の藤原医院で診察を受け、傷の手当ての後、お転婆の私が自転車で乗せて帰ってあげるからと云うのに、兄は男らしく自分で自転車で乗り、しんどそうにやっとの思いで家にたどりついた。

その日母と私は、村上化粧品店の前から、被服廠のトラックに便乗し、兄を捜しに広島へ二度目の出発の寸前だった。トラックの荷台から、白牡丹酒造の前を、疲れ果てた姿で帰って来る兄の姿を見つけ、思わずトラックから飛び降り兄の所へと走った。今も心に残る最後に見た兄の歩く姿だった。無事帰った安心感からか、命からがら、飲まず食わずの苦しみのせいか、兄は食欲もなく、一日たち二日たつうちに、だんだん胸の当りが煮えるように苦しくなり紫色の線を引いたように変色していった。放射

線の跡とは、知る由もなかった。手の施しようもなく、うろうろしている私たちに、「見ようるばかりじゃあつまらんじゃあない、どうにかしてくれ」と苦しみの余り度々哀願した。どうにも出来ない私は、朝日町の景山の氷屋さんに、よく氷を買いにいった。ずっとならんでやっと買えた氷を自転車に積み急いで家に帰る途中、自転車がパンクして、帰った時は氷は解け兄を悲しませた事もあった。その頃すでに胸から腹の当りまで紫色になり、苦しみの余りタオルで首を締めたり、井戸に飛び込みたいとか、水源地の導水路に飛び込ませてくれと、力の限り立ち上がり、私たちに悲しませた。そんな時、近所で国鉄の車掌さんをされている方から、岡山の桃を二個もらった。兄はとても喜び母はすぐ井戸に吊るし冷やして何回にも分けて兄の口に入れた。後にも先にも、兄が美味しい、美味しいと言って口にしたのは、この二個の桃だけだった。日々苦しさは増し、黄緑の水を吐くようになり、便も黄緑の便となり、精根尽きたのか「お母さん、わたしはもう駄目じゃ、肛門が締らんようになった。と辛そうに母に言った。そして「死にとわないのうー」と、何度となく呟く、心からの言葉、私達も辛く悲しかった。

そんな日々、14日の夜を迎えた。「アメリカは、悪い奴じゃ、わしらを、こがいな目に遭わせて、わたしは生れ代って、アメリカを、やっちゃる。」とはっきりと言った。そして苦しみの中から、「お父さんが迎えに来てってじゃけん、もう行かにゃあいけん、きちんときれいにしてくれ。」と言っている頃空襲警報により、ローソクの灯りの中で「あんたらは、わしが、迎えに来てやるから。」と言ひ残し、目尻から涙を流しながら私たちの必死の介護の甲斐もなく多くの思いを残しこの世を去って逝った。1945年（昭和20年）8月15日未明のことであった。

その日すぐ葬式となり、12時葬儀の最中大本営発表重大ニュースで、天皇陛下のお言葉、敗戦であった。あまりにも無念の死であり、敗戦の知らせであった。8月15日敗戦と共に兄、生武三郎は、原爆症によって17才の生涯を終えた。

あれから50年の歳月が流れ、世の中は一転した。私は兄に伝えたい。兄の死は決して無駄死にはなかった。兄たちの死によって、今平和な日々があるのだと…。

わが人生に、こんな時代があったこと、今は悪夢として、私の心に留めたい。

さぶちゃん有難う。

1995年（平成7年）夏

通学の思い出

中野 アキヨ

“月月火水木金金”みんな今日から仲間いり，“土曜日曜あるもんか” “撃ちてし止まん” “ほしがりません勝つまでは” の指導のもとに、今で言えば中学一・二年生の少女が出征兵士の留守宅に勤労奉仕に出向いて行った。勉強はそっちのけで、春は田植、秋は稲刈りと毎日お手伝いした。だが、勉強が苦手な百姓生まれの私は、水を得た魚で、非農家のお嬢さんをぬきん出て、仕事ははかどった。

その当時私は白市駅から西条駅まで汽車通学していた。戦争が長びくほど、車輛は兵隊さんや軍需物資を運ぶので、何か公的な証明書を持っている人は、優先的に切符が手に入ったようだが、一般の人には一列車で四・五枚しか売ってくれなかった。それでも客車が不足するのか、トロッコのような屋根のない貨車や、牛馬を運ぶ大きな箱型で糞がこびりついたようなものにも乗ったものだ。

三年生からは学徒動員で、教室は被服廠の工場となり、兵隊さんのシャツを縫ったり、軍服や雨コートのボタンホールに精出した。被服は講堂の天井まで積み上げたり、運動場にも山と積まれシートを掛けてあった。

一日中ミシンを踏んでむくんだ足を引きずって満員列車に乗るのだが、今の満員電車の比ではない。デッキには溢れんばかりの人がぶら下がり、窓から乗り降りする状態だった。

ある日郵便車のわずか一間の長さの扉の横棒につかまったまま帰ったのだが、何人ぶら下っているかそちらから番号をかけてみようか、誰かが言った。一・二・三・四と大きな声で順番をかけてみると、12人だった。足はわずか10センチかかっているだけだし、扉がはずれたら、みんな一巻の終わりだったのに、若さだろうか、他に楽しい事もない時代だったから、束の間のスリルを楽しんで苦にもしなかった。

1945年（昭和20年）8月6日の朝は、白市駅で列車を待っていた時、白い光が走り、間もなくカボチャのようなムクムクした雲が上がったのを見たが、何が起こったのか知るはずもないまま学校に行きミシンを踏んだ。

夕方西条駅に出ても上りの汽車はなかなか来ず、やっと来た車輛は窓ガラスも天井の照明も全くなく、ひどい有様だった。薄暗い中に頭や手足に白い包帯を巻いた人たちが無言で座っていた。私たちはデッキに立っていたが、何とも言えない異様な匂いが鼻をついたのを今でも忘れられない。

トンネルに入ると全く光のない列車の中で、恐くて友達と声も出さず手を握っていた。軽傷の人だけが汽車に乗り家に帰られたのだろう。しかし、その後顔見知りの人も次々と亡くなられたようだ。

物資不足，食糧不足の時代の青春だったが，何事も我慢する根性を叩き込まれた。お陰で戦後 50 年生きてきたが，何とか自分は中ぐらいの幸せだと思って過ごしてきた。これからも健康だけで，他に多くは望まず，平凡に暮らしていきたいと思っている。

いろいろなことがありましたね

中原 頼子

戦争の真最中、あこがれの女学校に入学。二本線入りの衿に白衿をかけたセーラー服、肩からかけた横長のカバン、お揃いのスタイルに少し大人になった気分で嬉しかった。

一年生の時は、授業と勤労奉仕。慣れない農作業は、毎日大変なことだったが、麦・芋・大豆粕・コーリャン・ザラメと、碌な食糧もなかった私にとっては、農家で十時・十二時・三時と食べさせて貰うことが、何よりも嬉しかった。

その内に、スカートもモンペに変わり、二年進級。オカッパ頭の髪も横分けになり、始めはピンを何本もとめて苦労したっけ。

授業を受けることも少なくなり、とうとう三学期から学徒動員。学校工場でのミシン作業・穴かがり・ボタンつけと、朝早くから夕方まで黙々と働いたものだ。幸いなことに穴かがりは洋裁学校に入った時に役立ち、得々として自慢気にやったことを覚えている。

三年に進級。横分けの髪も後で結ぶ形となり、短い髪をスズメのシッポのように結んでお姉様気取り、相変らず作業は続く。

忘れもしない8月6日の朝、ボタンつけの手元を走る閃光。

ピカドンと云う、今なお多くの人々が苦しんでいる原爆が広島に投下され、そうして8月15日終戦。

あの日の私は、お友達二・三人と、笑いながらしゃべりながら帰宅中、写真館のお家の玄関の土間に、膝まづき座っているおばさんに、「静かにしなさい」と叱られた。

理由も分からないままに帰宅、陛下のお言葉を母から聞き、空を見上げながら「もう空襲はないのね」と、母に言ったことを覚えている。

それから原爆救護活動のため広島へ。私達は女学校一・二・三年の間にいろいろなことを体験しました。

やがて、少しずつ落ち着きを取り戻し、授業が始まったのは秋の終わりであろうか？ 薄っぺらなざら紙に印刷して綴じた本。何とか学生らしい生活に戻りはしたが、疎開者・戦災者・引揚者の人達の転校で、教室はすし詰めの状態、教室内外を往来するのも大変だった。

エピソード。A先生から外地の言葉で、入ることを「イミソーレ」と習ったことがある。

昼時間を事務室で雑談していた五・六人は、午後、始めの授業の鐘が鳴って急ぎ教室に戻り、私たち小さい者は先生方の出入口の戸を開けて「イミソーレ」と… が万事

休す。数学の M 先生、私たちを待つかのように、出席を取っておられルート 8…お陰で一問ずつ問題を出されて、黒板に向って四苦八苦冷汗をかいたことがある。

さて、いじめ…と言っても、生徒同士のいじめではない。四年生になって講堂の裏の楽屋で、身体検査（健康調査）があり、N 校医の横で S 先生が記録を取っておられた。少し大人に成長した私たちは、S 先生がいるのはけしからんと、検査を拒否し、S 先生の追出しに成功した。私たちが先生に抵抗したのは、これが初めてであろうか。

だが、S 先生とは楽しい思い出もある。四年生最後の謝恩会の劇に、ミュージカル（題名は忘れた）をやることになり、練習、舞台装置作りを放課後講堂に集まって、夜おそくまでみんなで頑張ってやった日のこと、あの頃としては、忘れられない楽しい思い出の一つである。

戦後 50 年。まだまだいろんなことがありましたが、長いような短いような、あっという間に過ぎてしまった感じがする。

今、私たち同期生の、せっかく広がった友情の輪を絶やすことなく、これからも元気で、どんどん輪を広げて行きたいものと思っています。

激動の世代

中村 綾子

戦争 50 年に当り思い出の文集作りとの手紙を頂き、当時を思い浮べれば私は寄宿舎生として在学しておりました。河野先生、阿部先生、瀬川先生、小川先生、色々な先生、お姉様たちが頭の中を走馬燈のように思い浮かびます。

親の元を離れ、お姉さんに叱られ布団の中で泣いた事。食料不足で米の係をしていた私、小麦をつぶした麦一升に対し米一合の割合の麦飯、それも十分に食べる事も出来ず、それでも一人として不満を言わず、お国のためと我慢しましたね。一・二年生の時は農作業の手伝い、山の下刈りへ行ってカブレ、眼が見えなくなるほどハレ上がり、つける薬もなく…。

学校も工場になり、教室はみんなの踏むミシンの音がウナリ、ぼやぼやしていれば流れ作業だから私の足もとは山となり、負けじとミシンを踏めば爪を縫い、でも続けて頑張ったものです。今静かに目を閉じて五十年を振りかえれば、私たち世代は戦中戦後と激動の人生でした。

戦後は子供たちの事で生活に追われ、今は子供たちも離れ、一人我に返ってみれば苦労も多かったけど、戦時中の事を思えば今は感謝しなければいけないのですが。

三月末の同期会の時も、みなそれぞれ思い出話に夜遅くまで話はずきませんでしたね…。

同期会に集まって話せるのもあと何回位あるかしら…。一寸先の分からない私です。今からは、生かされて生きている喜びを感じる事の出来る人間でありたいと、聞法をしながら生き抜きたいと思います。皆様の健康を祈りながら筆を置かせて頂きます。

峠

桧垣 澄子

私の眼に昨日の出来事の如く消えては浮かぶ数々の思い出、その中の一つに峠がある。峠といっても家の前方にある低い山である。峠を越えれば木の間より、里の風景が現われ風に靡く稲穂がやさしく私の心を満たしてくれる。

家族と共に上海に住んでいた私は、1945年（昭和20年）5月、軍の命令により、「女、子供は早く日本に引揚げられるように」と荷物制限一人一個の手荷物とリュックを背負い貨物船に乗った。その時は、又上海に帰ってくるからと軽い気持ちでいた。

港を出て間もなく敵の潜水艦がいるとの事で海上をジクザク逃れた。船上では兵隊さんが「音を出すな、潜水艦に居場所がわかる」と赤い顔をして怒鳴っておられた。機関室も静止し二日か三日、乾パンを嚙りながら暗き船底で不安な日々を過ごした。船が何時沈んでも鮫にやられないようにと、手荷物の中から、白に近い布を探し腰に巻いたりした。三日で日本に帰れる所を十日位かかって第一便として帰国した。

帰国してからの生活は大変であった。

転校先の西条へ通うのに当時は木炭車で、燃料の節約のためかバスの回数が少なかった。歩くのにどうしても峠を越さなければならない。これが駅へ出る近道なのである。昼間でも山の中は薄暗く二つある池の魚が跳ねれば「ギクッ」として足が進まなかった。

自転車に乗れない私はみんなより早く起きて家を出る。星空を仰ぎ、犬の遠吠え、鶏のけたたましく騒ぐ声、それらを聞きながら峠へ向かう。峠の下の最後の家を過ぎ、誰か下から歩いてこないかと耳を澄まして待ってみる。誰も来ないのがわかると仕方なく峠へと歩く。

夜露で山は風が吹く度に草木が光り、雨が降れば暗き奥より欄々とみつむ目のようなもの、すると突然木々の折れる大きな音、風雨にすすり泣くような声、山の神の怒る声、呻き叫ぶ声、小さき私はこの恐ろしさに涙して峠へと走った。家に帰ろうかと幾度思ったことか。皆様にはこの恐ろしさはわからないと思う。

峠を越せばしばらくして、東の空が明るくなり自転車通学の明るい友の挨拶を背に私は小走りである。時には復員列車のため西条まで度々歩いた。

人生の別離、出征兵士との別れ、お骨となって帰還された兵士、親子の哀楽を知るこの峠もあまたの村人を見守ってきた事であろう。夜が空ければ小鳥の囀る声、池に映ゆる木の緑、里より聞こゆ子供の歓声、広島弁の大きな話し声、斧打つ餅、峠は何か不思議な力があつた。

今峠は四季の花も消え、木々も枯れ果て峠を挟んで二つの会社のゴルフ場となり、

工場も建ち自動車の行き交う道幅となっている。夜のライトの列に 50 年の歳月をつくづくと感じさせられる。

原爆で学校から広島へ看護に行き、原子爆弾に焼かれし人々の有様、校庭の隅で葬る煙、私が生まれてはじめて見る広島は地獄そのものであった。

終戦となり、雑炊を啜りながらも逞しく生き抜いて来られた生命、これらを感謝しつつ皆様の健康とご多幸をお祈りいたします。

又、特攻隊員として戦死なされた若き皆様の愛国の志を忘れることなくご冥福を祈り平和の続くことを願っています。

命

藤井 保子

ウヒューウヒューウヒュー警戒警報のサイレンが深い眠りを覚ます。呉の軍港や工廠を 米軍機が今夜も爆撃に来たなと思いつつ、寝入りばなだから飛び起きもせずうつらうつらしていると、ウーウーウーとけたたましい空襲警報に変わった。慌てて枕元の雑嚢と防空頭巾を肩にかけ一階の居間の床下に作った防空壕へ飛び込む。あれは1945年（昭和20年）7月1日終戦になる45日前の夜でした。

あの夜、母と弟は妹の学童疎開している西条へ行って呉にはいません。私が一人飛び込んだ床下の防空壕は安全な所ではなく、数日前の空襲の時には爆風で飛ばされてきた大きな石や爆弾の破片が、二階の屋根も畳も突き抜けて一階の畳の上まで落ちてきました。床下に避難していた母は、頭上の畳で石が止まったから命びろいしたそうです。

暗い闇の中で耳を澄ましていると B29 のゴーゴーという爆音、呉市の空襲は度々だから慣れっこになっているものの今夜はすごい編隊の音です。家の外が急に明るくなりヒューと鳴ってはパッと明るくなります。（いつもと違う、空襲は遠い工場ではない、焼夷弾だ。ここは危ない、家の外の防空壕へ避難しよう。）父に連れられて町の人々の避難している大きな防空壕へ移りました。父は会社の書類が焼失しないように土の中へ埋めるために家へひき返して行きました。「ヒュー、パッ。」は激しくなるばかり。防空壕の外が不気味に赤い。警防団の人々が走りまわって、「消火、消火」と叫ぶ声。「火に包まれるぞ、逃げよう。」壕の中から次々とみんな出て行く。私は一人残った。父は来ない。「お父さん、お父さん。」家の方に向かって足ふみしながら叫びました。前の家も、その隣の家も火がついてしまったのに…。

夏ぶとんを抱えて父がもどって来ました。「早く早く」せかす私に「大丈夫」と言って防火用水の中に夏ぶとんをザンブとつけて頭から被せてくれた。道の両側の家はみな燃えています。「さあ、火の中をくぐって逃げるんだ、よいか。」と言う声を背に道の上に次々と崩れ落ちてくる火をよけながら、火の粉の中を走り抜けて行きました。

時々顔を上げてみると、炎に包まれた家の柱がめらめらと燃えて、ぽろぽろと崩れていく。高台で燃えている家は暗い夜空に赤い炎のシルエットで浮かび上がって見え、とても無残な光景でした。

灰が峯には海軍の高射砲が据えてあるので、その山の麓に向かって逃げて行きました。民家がまばらな所まで来た時、ヒューと後から追いかけてくる音、とっさに木の根っこに頭を突っ込む。ドガンと大きな音と共に地響、死んだと思ったがお尻に手を当ててみるとなんともない。「あー命があってよかった。」と思いました。敵機はゴ-

ゴーと上空から波状攻撃を続けます。父を見失ったので声のする方へ畑の中を一人走っていると、またキュンと低空に迫って来る音。ヒューと何かが飛んでくる音、とっさに夏ふとんをすっぽりかぶって畑にうつぶせました。バラバラバラバラッ、何かたくさん降ってきました。濡れたふとんを通して感じる、何だろう。顔を出してみると一面に小さな焼夷弾がめらめらと燃えている。「動くな」誰かが大きな声で怒鳴った。私は火の中で逃げ道はない。またふとんをすっぽり被ってうつぶせた。まもなく何人もの人々が駆け降りてきて、まわりの火をバタバタと叩き消している。私のふとんの上の火もたたき消して、「もう消えたぞ、今だ。早く上がってこい」という声。荒神小学校配属の応召兵の方たちも近くに避難しておられたので、私を取り囲んだ火を大勢で消してくださったのでした。父と私は助けにくださった兵隊さんたちに何度も何度もお礼を言って、もっと上の山の方へ逃げていきました。眼下の呉市は一面火の海でした。

この夜、大きな横穴の防空壕の中へ避難していた人びとは出口に面した町が焼けて逃げ出せなくなり、蒸し焼きの状態で大勢亡くなられたのです。その中で私のクラスの友も一人亡くなりました。

私はまだ生きている。その数日前も危うく命びろいをしました。工場の仕事を終えて家に帰る途中のことです。防空壕までの距離がかなりある所で空襲警報になり、必死に走るのですがまだ十メートル位先。敵機に狙われていたのか私の後から機銃掃射のバリバリバリ…と弾が土をはじく音が迫ってきます。防空壕からは「早く早く」と叫ぶ声。足がもれて倒れるように壕の中へ飛び込んだ。いや、引っぱり込んでもらったのか。危機一髪、入口をバリバリバリと弾が走った。あの時は命が何ぼうあってもたまらんと思いました。戦争は、死と背中あわせで生きているようなものです。私の叔父が一人戦死。また一人戦死。同じ潜水艦に乗っておられたクラスメイトのお父さんも戦死、知人のお父さんもお兄さんも…。

戦争は殺しあいです。毎日工場で敵艦を攻撃する魚雷の雷管の検査をしている私、その私が一日の仕事を終えて帰る道で敵機に狙われる。敵兵も私も、国の為、身を守るため、と信じ込んでいるので真剣です。しかし、いま50年前に体験したこの事実を振り返るとき、殺し合いだったと言わずにはおれません。その最たるものが広島原爆です。一瞬にして繰り広げられたあの無残な生き地獄。あの時14才だった友人は、お母さんが爆風で壊れた家の下敷になり、梁に挟まれたまま目の前で火に包まれていったことを、声をつまらせながら話してくれました。広島原爆資料館に足を踏み入れると、その時の惨酷な有り様が伝わってきます。東広島市にも八本松の松翠苑の中にある原爆資料室に当時の被爆者の遺品が多く展示されています。

あれから半世紀私たちはひたすら復興と繁栄を念じて生き抜いてきました。『あや

まちは繰り返しません。』と石碑に刻んで 20 世紀を生きてきた広島の人たち。人間らしく互いの命を大切に、21 世紀を生きる子供たちのために有意義に生きていきたいと思ひます。人間同士の殺し合ひを止めても、他の生きとし生けるものの命を頂いて日々の命を永らえている私たちです。飽食と傲慢に安住することなく他を慈しみ仲良く手をとりあつて感謝の日々を送つてまいりたいものです。

原爆の思い出

水島 愛子

1945年（昭和20年）に賀茂女学校は被服廠となり、軍人のシャツを作ることになりました。毎日同じミシン作業の繰返しでしたが、お国のためと一生懸命の作業でした。

8月6日は、材料が不足し休んでいる時、ピカーと強い光が室の中まで射し、しばらくしてドカーンと胸を打つ大きな音がしました。誰かが「電気の故障かしら。」と叫んだ。窓を開けると西の空に黒煙がもくもく上がり、不気味でした。友達が「あの雲綺麗。」と叫びました。皆んなで外を見ると、ピンク色のキノコ雲がだんだんと大きくふくれ上がっていました。この光景は、今も脳裏に深く刻み込まれています。これが「ピカドン」だと後で聞かされました。

寄宿生だった私は、早速段原小学校に救急看護を命ぜられ、広島のを踏みました。家は崩れ、ほとんど灰と化していました。焼け残った段原小学校の講堂は、仮設病院となっていました。戸板にのせられた怪我人は、顔に紫色の斑点が出て死が近く、「水をくれ。」「お母さん。」と呼ぶ。人間が極限の境地で呼ぶ願いに、どう応えてよいやらうろたえるだけでした。

運動場のいたる所で、校舎の板を剥いでは数人の死人を重ねて焼いておられた。中には死体の一部が焼け残るなど、地獄絵巻そのものでした。講堂には引取り手のない女性の死体が腐乱し、蠅が黒だかりとなり、また、隣の人火傷にも蠅がたかり、それを手で払ってあげることしかしてあげられなかった。外来の患者は、赤チンキを塗ってもらうだけと言ったお粗末な治療でした。

食事は、患者にはおにぎり一つ、看護人には二つ、それにお茶のみでした。私たちはそのおにぎりを作り、皆さんに配るのが仕事でした。一日中働きながら、おにぎりが咽を通らない日が続き、それでも患者さんの姿を見ると友達と頑張りました。

夕方、火葬されていたのを山崎さんが「あの人、広島女学生よ、可愛そう。」と泣いた。数人の男の人が、板の上に女の子を乗せ火をつけられた。板が燃え、頭髪がズリズリと音をたててくるくる固まっていく。私も「可愛そう。」と手を合せるのみでした。お母さんが「ありがとう。」とお礼を言われた。

運動場には芋畑があり、毎日、小学校一年生の男の子が、歌を歌いながら芋を掘って食べていました。原爆で父母兄弟を失い、一人で生活をしていたのです。今どうしておられるやら。たくましい歌声を今も忘れることができません。

私達は、いやと言うほど戦争の悲惨さを体験してきました。原爆による地獄絵巻！二度とあいたくない。こうして筆を取っている時も、テレビからはフランスや中国の

核実験のニュースが流れてくる。65才になった私には、6人もの可愛い孫がいます。尊い命を奪う戦争が二度と起こらないよう、平和な社会であって欲しいと祈り、あえて原爆の悲惨な思い出を筆にしました。

窓からは、暴走族の音と若者のはしゃぐ声が聞こえてきます。今の若者は、何を考えているのやら。

子育てもすみ、社会的責任を終えた私ですが、時に畑いじりだけしていいのだろうか、物足りなさを感じることがあります。一粒の麦は大地に落ちて多くの実となって来世に生きる。私達は、戦前、戦時、戦後と物不足の中を生産の向上につとめてきました。これからも経験を生かし、少しでも平和で住みよい社会づくりに生きたいと願っています。インドの詩人タゴールは、「与えることのできる全てを与え、私のずた袋は空になった。もし望めるなら、この袋に友の愛と許しを入れてあの世へ旅立ちたい。」という詩を残しています。私も余生を、生きがいを求めて全力的に生きたいと思っています。

忘れないで

峯岡 豊子

あの苦しかった戦争から、今年の8月で半世紀になりました。この50年間に結婚、出産、子供の養育にと追われてあっという間に60才を過ぎましたが、物心がついてから私たちにもいろいろな事が走馬灯のように思い出されます。忘れようとしても忘れる事が出来ないことの一つに広島に原爆が落とされ、私たち賀茂高等女学校の生徒が広島市内に入って被爆者の看護をした時のことです。場所は今の南区段原中学校へ十数人が行きました。私は食事当番になり収容されている患者さんに食事を配る事になりました。その時の食事は「オニギリ」と「タクアン」だったと思います。患者さんは各教室と講堂に運ばれていましたが、虫の息の人もありました。怪我の軽い人たちに食事を配っていましたが、いつも講堂の片隅で毛布一枚の上に肩を寄せあって座って痛みを我慢しているお母さんと子供がおられました。この人は朝から何も食べていないとのこと、あとから内緒で「オニギリ」を二つ持って行きました。

その時手を合せて喜ばれた顔は瞼の裏に焼きついております。看護の仕事が終って西条に帰る時挨拶に行くと涙を流して感謝しておられました。この人のことが気になりながらお互に名前も名乗らずに別れたことが心残りです。その時のお母さんはすでに亡くなっておられるでしょうが、娘さんはきっと何処かで元気でおられ、8月6日が近づくといろいろ思い出されている事と思います。

戦時中は食べるものが満足にない時代で大豆粕を入れたご飯、「さつまいも」を食べながら鉢巻きをした挺身隊となって被服廠でミシンを踏んだり、食糧増産で農家の田んぼで泥まみれになって暗渠排水の作業をした事がありましたよネ。それでも何一つ不満をいう人も無く、お腹が空いているのに竹槍の訓練、空襲警報に備えて戦争に勝つまでは頑張るのだと経験した事のない防火訓練などをしていました。また家では食糧を確保するために「扇風機」や「ミシン」が米に変身していましたよネ。私も御蘭宇の農家まで自転車で交換に行ったことがありました。現在はお金さえあれば何でも買うことが出来る平和な時代になったのだから、このように過激な労働や苦しい経験をしたことを話しても分かって貰えないでしょう。

結婚して間もない1958年（昭和33年）頃、原爆の看護に行った段原中学校の正門近くに住んでいましたが、この正門から校舎を見る度に当時の「生き地獄」を昨日のよう思い出し因縁を感じておりました。

西条の町でも8月6日に被爆した方が多くおられます。私の姉も広島駅に勤務していて被爆しましたが、現在69才で元気に生活しております。

このように思い起こすことは沢山あります。ですから私たちと同年配の若者が戦時

中に生きる権利を祖国に捧げて死んで行った魂の叫びを忘れてはならないと思います。

三人の子供さん

森川 悦子

1945年（昭和20年）当時、私たちの通学していた賀茂高女は工場化されて、各々の教室には、家庭から供出された家庭用ミシンが何台か並べられて、被服廠の仕事をしていました。

私はミシンを使ったことがないので、出来上がったシャツの前立や袖口のボタン穴の穴かがりをしていました。

あの8月6日の朝、いつものように被（被服廠の被）を縫いつけた白いハチマキを頭にしっかりと締めて作業に取りかかった頃、「ピカッ」と光ったと同時に「ドーン」と地が揺れるような音にびっくりしました。窓を明けてみると広島方面の空に雲のようなものが「きのこ」の形をしてもくもくと上がっていました。

なんだろう？ どうしたのだろう？ と言うばかりで… もとの場所へと作業をつづけました。

お昼の食事に家へ帰ってこられた西条の町の人たちの話に、西条駅は広島方面から帰って来る人たちでごったがえし、着ている服はボロボロで、出ている肌は、黒くすすけて火傷をした人など、大勢の人が帰っておられるとのことを聞きました。

その日から、私の家の近所の人が広島に行かれたまま帰って来られないので、母たちは毎晩三・四人連れだって、西条駅へ迎えに行っていました。駅に行っても燈火管制のため、真暗なので汽車が着いたら来られた人の名前を駅員さんが大きな声で呼ばれるのです。近所の人の名前がないと、その夜は帰って来ます。また次の夜も次の夜も、出迎えに行っていましたけどとうとう帰って来られなかったのです。父は広島市内まで捜しに行きましたが、だめでした。

あの爆弾が投下されて10日目に、天皇陛下の「堪え難きを堪え忍び難きを忍び…」との終戦の布告がありました。

戦争に負けたらアメリカ人が上陸して来る…。女・子供は出て歩かれない…。などいろいろな噂されました。

そうこうしているうちに私たちの学校から広島へ救護に入市することが決まりました。

最初に西条町の人と寄宿舎生の中から「健康な人」ということだったと思います。私たちは、30名位が入市して、大河小学校と段原小学校に分かれました。私は大河小学校に決まりました。

私の受持ちの部屋には、全身火傷をした女の人を板の間に寝かせて、うすい布がかけてありました。もう意識は全くなく、目はつぶれたままで息も聞きとれないくらい

…。布をめくってみると、お腹の上に置かれた手の甲には「ウジ虫」がびっしりと、くい込んで本当にあわれな姿でした。

お話によると、私たちが行った前日にこの人は赤ちゃんを出産されたとのことでした。もちろん赤ちゃんは死産だったそうです。この人は私が行った日に息が絶えました。死体は校庭の隅を掘って亡くなられた人を並べて重油をかけて火葬されたそうです。

この人には、子供さんが三人いました。上は男の子で一・二年生くらいで名前を一二三君といったように思います。次の二人は、女のお子さんだったと思います。子供たちは擦り傷一つなく元気でした。

お母さんが亡くなって二・三日して、おじさんという人が三人の子供さんを連れて帰られました。母親のいないおじさんの家で、どうしているだろうと、時どき思い出していましたが、もう50年過ぎました。

あの当時の子供さんも、もう60才前ですね。元気だったら、子の親に… また、孫も…。仕合わせにお暮らしの程をお祈りしています。

今日は8月23日、処暑と言っても暦の上だけ、30度を超える真夏日が連続32日も続き、暑さも身に伝わる年令になりました。ふと50年前の女学生時代を思い出す。こんなに暑かったかな？

賀茂高等女学校は、私の家から歩いて30分。13才の純真可憐な少女でした。一年生に入学した時は、憧れのセーラー服が着られて嬉しくて楽しい毎日でした。三学期ごろからだんだん勉強する時間が少なくなり、草刈・田植・稲刈・暗渠排水などの勤労奉仕。手慣れない仕事で傷は絶えず、田植の時は足にヒルが吸い付いて、キャーキャー大騒ぎ。戦時中で食糧難の時代、昼の食事が楽しみ。白い御飯で大きいむすび、沢山のおかず、果物、私たち女学生の食べ盛りにとっては、御馳走を腹いっぱい食べて満足、嬉しかった。

戦争もだんだん激しくなって、女学校も被服廠工場に変わり、教室にミシンが並べられ、学校工場、学徒動員、頭に白い鉢巻きをして、流れ作業で一枚の製品（国防色の兵隊さんが着るシャツ）に仕上げる。私は裾の三ツ巻の担当でした。今でも三ツ巻は上手に出来ます。勝利の日までを誓い、みんな一生懸命頑張った。その時は国のために命を捧げる事など惜しくはなかった。今考えてみるとぞっとする。

8月6日、女学校東校舎の二階、8時15分ピカッと光って西の空に大きなきのこ雲が上がり、近くに大きい焼夷弾が落ちたと大騒ぎ、一日経って広島にピカドンが落ちて沢山の死傷者が出、広島の街は火の海で大混乱になっていることを知り心が痛む。

8月15日終戦、日本は戦争に負けたことを聞き、涙がとめどなく流れる。勉強する間もなく、8月17日原爆被爆者の救急看護の動員で広島に行く。広島の街は宇品まで焼け野原、真っ黒に焦げた電車、その悲惨なありさまに驚き言葉にならなかった。私たち女学生は大河の国民学校に行きました。

学校の窓ガラスは飛び散り、雨をしのぐだけの校舎、足の踏場もない程沢山の人が避難しておられ、全身火傷の人、ガラスの破片を浴びた人、皮膚がぼろぼろにたれさがっている人、体の全体が火傷で男女の区別をつかない子供たち、重傷者のうめき声、水をくださいと哀願しながら息の絶える人、異様な匂い。

被爆者の悲惨な姿を目の前にした時、何もしてあげることの出来ない心苦しき、悔しさ、生き地獄を見ているようで、両手で顔をふさいでしまいました。今思い出しても胸が締めつけられる思いがします。

女学生の泊る宿は学校の近くの民家、玄関の戸はなく窓ガラスは壊れ、薄暗い部屋の隅でなかなか眠られなくて、雨が降ると焼け跡に青い火の玉のような燐火が、あち

こちらでポーと燃えている。恐ろしくて震えが止らなかった。

辛かった。苦しかった。頑張っけて堪え抜いてきました。その中でもちょっぴり楽しい事もありました。

戦後 50 年半世紀、精一杯生きてきました。しかし今でも世界のどこかで悲惨な戦争が起きています。この半世紀の間に核兵器廃絶が実現出来なかったことが残念でなりません。中国核実験。フランス核実験強行。世界各地で反対抗議行動が高まっていますが、強硬な態度は変わらず残念でなりません。

戦争を知らない世代が増えて、過去のものになろうとしている今、次の世代が主役になって戦争犠牲者への思いを心に深く刻み、平和な世界の実現に向かって今後も努力を続けてほしい。

戦後 50 年の歳月が流れて、今は高齢者の仲間入りをする年齢になりました。誰にも話すことが出来なかった戦争末期を歩んだ女学生時代を、文集として残す機会に参加できたことを感謝致します。最後に同期会の皆様のご健勝とご多幸を祈りつつ、元氣でお会い出来る日を楽しみにしております。

弟よ

矢島 民子

戦後 50 年に当り、感想文をというお手紙をいただいて、そうだ私も何か書かなくてとはとペンをとる矢先。義母の救急入院さわぎ、下の娘の出産のための我が家逗留二ヶ月、孫の世話と、大変な夏でした。おまけに連日の猛暑で…。でも 17 日に、待望の男子誕生、お宮参りも済んで、潮の引くように静かになりました。ふと我にかえると、もう残り少ない締切日、もう間に合わないだろうけど… と思いながら書かずにはおられずペンをとりました。

当時、私は、東京からの縁故疎開者でした。父は、会社の都合で外地から帰られず、母は、そのような状態の中で、下の姉と私を連れて御園宇の叔母の家に来たのでした。私たち二人を預けると、折り返し再び上京した母は、学童疎開で信州に行っていた弟妹を迎えに行き、連れかえりました。戦時のこと、ただでさえ交通混乱する中を、往ったり来たり、母の苦労は並大抵のことではなかったと思います。最後に、静岡で教職についていた上の姉もかえり、家族が揃ったのは一か月ぐらい後のことでした。

あらかじめ探しておいた御園宇の上森様のお離れで、私共の疎開生活が始まったのです。そこは、まだ新しい感じのところで、八畳と六畳に廻り三方に巾広の縁側のぐるりをついたたたずまいで…。しかし、総勢 6 人が住むには少し狭すぎました。当然、私と弟はお縁にみかん箱を二つ置いて、勉強の場所としました。二才違いの私と弟は、いつも一緒でした。誕生日も 1 月 5 日で同じでした。仲のよい姉弟だったので

そんな中で私が気に入っていたのはトイレでした。離れの裏庭に小さな池があって、その上に屋根付きの渡り廊下があり、その先にトイレが二つありました。まるで、でんでん虫の目のように突き出ていたのです。窓を広く開けると、外には緑や黄の田園風景が広々と広がり、気分のよい場所でした。なんでこんなことを書くのかと申しますと、後に私には、ここが忘れられない場所になったからなのです。

さてそうこうするうちに、私は賀茂高女に決まり、妹も御園宇小に決まってそれぞれに通学しだしました。しかし弟の場合、西条には農学校だけでしたから、先のことを考えるとどうしても、広島市を探すことになりました。方々探してやっと山陽中学に決まったのは大分あとのことでした。

先月弟の 50 年の法要のため、姉妹で集まった時の話ですが、いつまでも学校が決まらず一人家にいた弟は、ある日夕暮れになるまで帰らず、心配した母と姉が探していると、御条橋のところでポツンと立っているのを発見しました。「僕は早く勉強したいんだ。」といったそうです。姉はその時心配と安堵から、なんて弱虫なんだろうと

叱りつけてつれて帰ったという。姉は当時を思い出して涙ぐんでいました。弟は私や妹をうらやんでいたのかもしれない、そんなこととは気づかず呑気者だった私、どんなに心細かったろうと思います。

私は、片道一里の通学路一部山ごえをするちょっと大変な道でしたけど、後にはその変化も楽しみになりました。何よりも良い友人に恵まれ、生武さん、内藤さん、加藤さんたちとの楽しい往復でした。学校は、確か午前中が授業、午後はそのまま学徒動員で、被服廠に早変わり、机の上に重く固いマントをのせ、馴れぬ手つきで、しかも数の多さにうんざりしながら、ゲジゲジ虫のようなボタンホールをしたのを思い出します。指に穴のあきそうなつらい時間でしたね。

そんな中にも楽しいこともありました。警報が鳴ると理科室の暗幕を持って校門前の水田に飛び込み、皆で幕の中にすっぽり入ってスリルを味わったり、姪にすいつかれて震え上がったり…、そんな中にも、奈良女子大からいらっしゃった国文の老先生の、芭蕉の奥の細道の時間は、何よりも私を楽しませてくれました。そんな中、1945年（昭和20年）8月6日を迎えたのです。

私は6日とその前の日のことが、今でもはっきりまぶたの奥に浮かびます。その前日夕方近く私は、母を手伝って裏庭辺りにいたのです。すると中一の弟が国防服にゲートル姿で帰ってきたのです。いつも通りなのですが、この日は少し違っていました。やっと入学出来た中学もほとんどが勤労奉仕で、建物疎開の後片づけをさせられていたのですが、その日、古くぎをかかるとに踏み込んで出血をし、応急手当ををして足を引きづって帰ってきたのです。母は、びっくりして「明日は休みなさい。」と言った。家の者は皆そうするだろうと思っていたのに…。

翌朝彼は、「どうしても行くんだ。」と、とめる家族を振り切って出て行った。私は虫の知らせか、とっさにお手洗に飛込んだ。窓を開け、家の横にそって細くはしる農道を急ぎ足でゆく弟を見つめていた。武則扇記念碑の所で大通りに出ると、西条に向かって右の方角へ歩いてゆく、農家の蔭に出たり入ったり見える弟を、ずーっと目で追っていた。まさか…これが最後になるなんて…。汽車通学だった弟は、西条駅でいつも会う他校の一年生と友人になり一緒でした。

その日も、彼と広島駅に着くと、今日は急ぐから「じゃあな。」と行って、先に歩いて行ったそうです。丁度その時、ピカドンに…、彼は弟の後姿を目前にしていたそうです。これはその後彼が帰宅したので、母が伺ってわかったことなのです。

母は、その後二日間市内を探し回りました。水筒をさげた母に、足元から「水をください、水をください。」と手を伸ばす重傷者の姿…。しかし、憔悴しきって帰って参りました母の姿をみてすべてを察し、母をなぐさめ、私たちは涙をこらえて家事の手伝いをしてまぎらしていました。友人の彼も、その後二・三ヶ月目に髪の毛が抜け

て亡くられました。その後、私の学校でも、学徒救急隊が組織され希望者を募られました。私は当然応募して出かけました。若しかして会えるかも…。広島駅に着いて出口の所で生徒はしばらく待たされていた。駅前広場に焼けかすを集めたような黒い円錐形の山が出来ていて、そこに中年の和服姿の女性が何か叫びながら、かけ登ったり降ったりしていた。その異常さに「あゝ、気がふれているんだナ…。」と子供心にも思いました。

どう交通手段をとったか…、思い浮かばないのですが、私たちは段原小学校に着きました。そこは、教室も廊下も解放され、むしろか布団が敷かれ、大勢の被災者が横たわって、うつろな目で私たちを見つめていました。枕元にはそれぞれに古茶碗と缶詰の空缶がおかれていた。私たち生徒は、二人一組で四角い木箱のおむすびを二つと、お湯を空かんに配りました。

そんな中、私はあちこちの教室を廻って「若しやジロちゃんに逢えるのでは。」…。弟は次郎といいますので、家では愛称「ジロちゃん」と呼んでいたのです。しかし、見つからずがっかりとしていました。

食事配りのほかは、外来患者の治療をする先生と看護婦さんの手伝いをした。体中ぐるぐる巻になったひどい火傷の人々。血、うみのしみた巾広の包帯をはがす時、先生やナースは乱暴にするらしく、皆、女学生さんをお願いしますというのです。私はとても臆病なのですが、その時は心を鬼にして一生懸命手伝いました。

そんな中、何か一息つく時間があって、校庭に出てみた。片すみでうず高く積まれた廃材から火柱がぼうぼうと立っていて、廻りに数人の人が立っていた。すると一人の男が殺気だった声で「突け突けダメだ早く!」と。何事かと思って近寄ってみると、何と死体を焼いているのでした。見ると材木の間になん体もサンドイッチのようにはさんで死体が積まれていた。その中の一体の頭が外に出過ぎていて残るから、はやく!と云っているのです。皆普通の人ですから、おじけづいて、うろうろしているのです。

先程の男は丸太棒を頭蓋骨に当てた。ガツンと音がしたのか、感覚だけだったのか…。私はそこに立ちつくしていた。ねずみ色の廃材の上に、黄色いおからのようなものがぱさぱさとかぼれ落ちた。脳みそらしい…。と思った。

その時不思議に私は恐さも忘れて…。何ときれいと思ったのです。こんな残酷な事って…。どうかしていたのでしょうか。その日一日、さまざまな体験をし、幼い私の神経も疲れて麻痺していたのかも知れません。

二日間の奉仕も終わり、私たちは平らな草むらのような停留所で待っていました。後に何十年も植物は生えないと言われていたが、その時その周辺の草むらの中に一りんの花が咲いていて、みんな話題にしたのを思い出します。

西条の駅に着いたのは、もう夜もとっぷりと暮れた時間でした。私はどうしようのためらったけど、帰ろうと思った。道は広く真っ直ぐだった。月の光か何か道だけは白かった。当時のことを思い出さずによくも無事で帰宅できたものだと、今更のようにぞっと致します。まだまだ純真で子供っぽかった私は、世の中にはいろいろ怖いこともあるんだということも知らなかったのです。それでも本能的には姿をかくそうとしたのか、道端の低い草むらに沿って歩いたのを昨日のここのように覚えています。心臓をドキドキさせながら、武則扇記念碑のところを左に折れた時、たえていた気持ちが一時にゆるみ、私は泣きながら家まで走った。家では皆寝ていて、トントンと戸をたたく音に、母が起きてきてびっくりしました。

翌朝母屋のおごうさんと母は、昨夜のことを話していました。心配して知り合いの西条に電話をしてくださり、この次の時は大丈夫だからね、とおっしゃった。それがクラスの蓮池さんのお宅だったのです。

二度目の時、やはり遅くなったのですが、蓮池さんに泊めていただき、翌朝は暖かな朝御飯まで頂いて、明るい西条の往還をウキウキしながら帰ったのでした。本当に有難うございました。私は助けられたのです。

そうこうするうちに、東京の家も少しずつ明け渡され、先ず父が、次に上の姉が帰ってゆき… というように我が家でありながら、借家人の様な生活だったのです。東京を後にする時、一家族に留守を頼んだのに、三家族も入っていたのです。そのかたがたも出てゆく先がなかったのですね。後に家に帰った時、すごく荒れていて、障子の棧が方々なくなっていたのには驚きました。燃料にしたらしいのです。どうせ戦災で焼けると思っていたのでしょう。

その後二年ぐらいその状態が続き、下の姉が通っていたドレスメーカー女学院に入りました。後に姉は師範科まで卒業しましたが、私は帰京するため中断しました。

その間、高橋繁子さんと毎日楽しく通学し、彼女はいつも上等な生地を持っていてうらやましい限りでした。私はといえば、軍隊配給の毛布を染めて赤くし、冬のオーバーコートに仕立てました。布が厚いので衿を作るのには一苦労させられました。それを着ると、重くて肩がこって困りました。それにシューズが又ふるっていたのです。そのころ、足先の割れていない地下足袋が配給になり、そのままではいやなので、上の方を切って浅くし、足の甲の上に赤やピンクの刺しゅう糸で、クロスステッチで模様をびっしりつけて、おしゃれをしたつもりでした。いま振り返って考えると、涙の出る程笑ってしまいます。

あんな時代にも、少しでも着飾ろうとした自分をいじらしく思い出されます。又、ある時は、母が広島のヤミ市で買って来た、ペラペラのピンクの生地には紫色の水玉模様の、ど派手な布でローウエストのワンピースを作り、その頃流行した和紙に花模様

のついた日傘をさして、繁子さんとたのしく通いました。年頃の私には、物は不足していても、心楽しい日々でした。あの頃の二年間、ただ遊んでいなくて良かったと、その後思います。娘や孫たちには、今でも結構頼まれ、おばあちゃんの威力を発揮しています。

一昨年、はじめて賀茂の同期会に出席でき、津和野など廻りながら楽しい時間を過ごさせていただきました。半世紀も前のことで、分からない方のほうが多かったのですが、峯岡（蓮池）さんには、長い間心にかかっていたお礼を申し上げることが出来て、ほっと肩の荷を降ろすことが出来ました。内藤さんも… 私の家が狭かったので、ノートをかかえてよく伺っては、大きな、やさしいおばあ様手作りのすいとんをおやつにいただき、とても美味しかったこと、ありがとうございました。高橋さんとはその後、東京にこられたり、この前はお宅に伺ったり、いつも大変お世話になっております。

さて、弟も20年まえに遺骨が見つかり、広島の区役所から連絡を受けて、母の代わりに姉と二人で迎えにゆき、胸に抱きしめて帰り、父母、姉のかたわらに今は安らかな眠りについていきます。

それにしても、弟の人生は何だったんでしょうか？ 戦争とは何とむごいことでしょうか。8時15分、原爆投下、早朝に家を出た弟を見送った後、登校前に入ったトイレの窓外を見ていた時、B29のグオングオンという、重低音で飛んで行くのを見ていた。ふとおかしいな、あれは何だろう… と、それまで見なかった棒状のものを尾翼に引いていた。あれが原爆だったに違いない。と私は長い間勝手に信じ込んでいた。ところが先日、アメリカのエノラゲイ展示の映像を見ていた時、この胴体の中に積んで飛んだと説明され、あゝそうだったのかと思いました。

五年前、私は長女一家の転勤先のロスアンゼルスに行ったとき、ニューメキシコ州を旅して、ロスアラモスの原子力研究所を見学しました。砂漠の中にあるその建物の中で、広島型リトルボーイ。長崎型ファットマンと実物大で展示してあるのを見た。何か複雑な感情にくたびれ切って研究所を後にしました。

人類はとりかえしの出来ない大変なものを手にしてしまったんですね。しかも、どんどん拡散してゆく。今のニュースでも、フランスは二度目の実験をしたらしい。生まれて一ヶ月目の可愛い健太郎を抱いて、彼の未来を想う時、暗澹たる気持ちになってしまいます。

救世主を待つ、そんなやるせない気持ちになってしまいました。

戦後五十年に当って

山田 益巳

皆さん、いかがお過ごしでしょうか。

50年前、そうです恰度14~15才の少女が、はや人生半世紀、終焉の燈火が見えてくる年齢になってしまったのです。

自己の健康管理と過し方が重点課題となっているこの頃です。はずかしながら記憶も定かでなくなった今、気のおもむくままに取留めのない思い出を辿りつつ書き綴ってみたいと思います。

たった一つの思い出、青春とは！

それは、物心つく頃から一口に言って青春とは、戦争と窮乏生活を余儀なく強いられた時代であった。国家の方向を知らされず、知ることにも気づかず。ごく当たり前の事として指示命令に忠実に行動した時代であったように思う。勤労奉仕・配給生活・戦争に勝つために、天皇陛下のために忠君愛国・滅死奉公・その他〇〇〇〇。強力な軍国主義指導下の中で（今でも一部の外国に見られるような体制）。精神力優先の全体主義生活を送ったものだった。

とりわけ女学校時代は東條内閣の頃で、陸軍支配下にあった。学問返上・勤労学徒とし皆様熟知の通り被服廠で陸軍服の上衣縫製に従事したものだ。厳寒といえども暖房はなく、凍る手足でミシンを踏む。たしか記憶では一日一工場一梱包（40~50着）のノルマがあり、流れ作業で休むひまはなかった。

ミシン針で指を縫う人、ボタン付けが固くて白ロウを塗るが滑って指先に穴のあく人…。それでも昼ともなれば、礼法室に集り牛馬用の麦ばかりの弁当の中に梅干し一ヶがおいしかった。奥田教頭先生は食べるものがなくて栄養失調になっておられた。昼休みは、廊下を一直線に滑り遊ぶ。ロウが落ちてよく滑るからだ。少女の楽しみの一つでもあった。

しかし、東京から陸軍少将の視察がある時は、各工場毎に廊下に二列横隊軍事訓練通りの号令で報告、45度に首を向けたまま腰の長い剣の音と敬礼が気になる。B29の爆撃機が来れば避難する。

救急処置は自分は自分で出来るように常に箱を体の側に置いていた。そして空爆が激しくなる頃、原爆投下。西条の駅裏の家のラジオから流れる天皇陛下の敗戦の勅語を聞き、白ハチマキもんぺ姿で救急箱を脇腹にかかえたまま涙を流した。負けたのだ。その当時は 純粋な少女の涙であった。

まもなく「ピカドン」というものだということが知らされた。すぐに女学生の救援隊が 編成され広島市内入りした。一週間の野宿と救護活動に入った。アメリカ空軍より投下された赤チン脱脂綿で、茶褐色に焼けただれた皮膚への治療を施す。友だち

に誰がいたのか全く覚えていない。朝から日の落ちるまで休む間はなかった。「水 水」との呻き声の人には脱脂綿に水を含ませ唇にそっとあててあげた。でも体を動かせば皮膚がとれ中から「ウジ」がたくさん出てくる。夏なるがために「蚊」「はえ」の発生が多く、腐敗臭と、命の絶えていく人とそれは地獄であった。ある時、炊き出しのため軍人の方と大八車を引いて出かけた。

軍人曰く「あんた、わしよりええ靴履いとるの一」といわれて見ればその軍人、服も破れ、ボロボロの地下足袋で中から指が出ている。私は何だか悪いことでもしたかのように、はずかしくなった。それは私たちが被服廠動員ということで、先の丸い新しい地下足袋が配給されたのを履いていたからだ。でも私もこの一足より他に履くものはなかったのに。

忘れることの出来ない事の一つに、すべてを失った十人ぐらいの幼児が、裸のまま真っ黒になって、ゾロゾロとついて来る。見ればみんなお腹が膨れている。「姉ちゃん、姉ちゃん」と。私はこの子たちをどうしてあげてよいやら…。せめてこの汚れをとってあげようと、破れ曲がった水道から流れ出る水で洗ってあげた。この事は今になっても心から消すことはできない。それから後日。ある機会があり、似島学園を一人で訪れてみた事がある。当時の子供たちもここに集められ、優しい愛の手で育てられ、第二の父母の家として 巣立っていったことを聞かされ、全部ではないにしろ、ホッとしたことである。ある小さな男の子、よほど兵隊さんに可愛がられていたのだろうか。死の直前まで、「兵隊ちゃん一。」と細く長く呼び続けるうちに目をつむり、聞き取れなくなってしまった。こと切れていたのである。もう感情も涙も枯れてしまった。考えることも、行動にも限界がある。私も子供、無能な自分が悔まれたことを覚えている。

戦後の社会は無秩序そのもの、とはいっても現代社会とは違った気骨さがあった。人情もモラルもあったと思っている。貧しさをお互いに分かち合ったものである。私は当時汽車通学をしていた。めったにこない汽車は復員軍人ですし詰め状態。そこで車両の連結部や機関車の石炭箱やひどい時には窓にぶら下がって行ったことがある。皆同じ事をしていた。恰度テレビの中で発展途上国の車のすさまじさを見る事があるが、それ以上のひどさであった。

学校復興の為の寄付を毎日毎日お願いして歩いたことがある。女学校の国語の女先生（景山先生だったと思う）が、広島の的場の映画館経営者の方へ嫁いでおられたので、寄付の依頼に行ったことがある。その時は最高額をいただいて、学校から感謝されたことがある。なんでも一生懸命やることは気持ちがよい。

間接的であったにせよ、原爆症には困った。長い間の口内出血と平常値以下の白血球（3200）それに左足静脈瘤が一つ二つと増していく。しかし強い精神力で生き抜い

たつもりである。自然の恵を大切に、自然には逆らわず、素直に受けることにした。そしてすべてをプラス思考で当り思いを変えた。お陰で今では健康に過ごさせてもらっている。

さて、あれから 50 年。ただの回顧にひたるだけではすまされない時代を迎えたと思っている。大変な時代が来ると思っている。日本の場合直接的な戦争は今のところないが、世界の動向を見る限り面積の小さな日本は平和と生活を守るためにも、一人ひとりの自覚がいる時期を迎えたと思っている。自由な情報化時代に入り、もろもろさまざまな事を知ることが出来る。世界の隅々まで特別なこと以外は知ることが出来る。日本では当たり前のことでも他国では当たり前でないことだってある。そこで私たち少女時代のような歴史を繰り返してはならぬためにも次の世代に語り伝え、できれば、観念だけで終わることなく、小さなことでよい行動で伝えておかねば、と思うこの頃である。

経済発展を続けた日本も今、世界中が不安の付きまとう変貌の中で政界権力の変身ぶりから、経済景気の長期低落傾向から、又金融機関の乱脈ぶりそして地獄災害からの安全の見直し、更には世界で最も治安能力の進んだ国といわれながら、世界初の毒物散布の事件そしてやがて到来する若年層の減少と高齢者の増加、環境と健康といった諸々の事が現実として起こっていることである。有名な「堺屋太一」氏によれば、「日本全体に広がる組織的な利益盲従型の危機が、政府は勿論のこと、無能官僚の見にくい一面として浮かび、多くの国民に衝撃を与えている。」… と。

50 年前の警告を忘れないで現今の難しい世相をよくみつめ直し生活したいものである。1995 年（平成 7 年）は国内外を問わず、政治経済をはじめ、すべての分野において、終戦直後の無秩序・無責任・利己主義に何となく類似点を見るような気がするが誤りだろうか。未来の人類の幸福のためにどうか正常であって欲しいと願わずにはいられない。

やがてやって来る高齢化社会の到来は、年齢と医療費負担の重い時代となろうし、さまざまな予期せぬ事に直面するかもしれぬ。従って、今からでもよい、声をかけ合い、助け合い、健康で生活できるように情報交換したいものである。心を開いて話せる友だち、こんなにうれしいことはない。

力の続く限り、人のためにも、自分のためにもプラス思考で処していき、美しく枯れていく人生を選択したいものとする次第である。

理屈ばかり書き並べてしまいました。私も高齢者特有の頑固者になってきたのでしょうか、お許してください。

皆様方の上に少しでも幸せが多く巡ってまいりますようお祈りいたします。

なに故に、戦争したかと告げたげに原爆ドームはいま「世界遺産」に

あとがき

戦争という時代背景のため変則的だった私たちの女学生時代を、書き残したい一念から同期生に呼びかけた文集づくり。心に残っているありのままを書き綴っておけば、いつかそれを紐解いて、私たちの青春が何であったか問い直すときもあろうと、気楽なつもりでスタートしました。

ところが、話すことはできても文章にはならないもの、書きたいことがありすぎてその一部しか書けなかったものなど、文章にならなかったことの方が多く、よせられたものは、同期生二百十余名の少女時代の一端を書きとめたにすぎません。

あまりにも小さな綴なので、ホッチキスでとめて仲間に配り、一冊だけ賀茂高校の図書棚へ置くことができれば充分と思っていました。ところが、校正の段階で、戦争を知らない世代の人の目にふれた時、「こんな貴重な体験をしている人が身近かにおられるとは、今日まで知らなかった。是非立派な冊子にして家の蔵書に加え、家族にも読んでもらって欲しい。」と励まされ、同期生の方に多額のご寄附をお願いして、このような立派な小冊子に出来上がりました。

文集の中に、女学生時代の数少ない写真や原爆資料室からご提供いただいた写真を載せ、また写真のないものにはカットを入れるなど、半世紀の情景が思い出しやすいように工夫してみました。

文章は、幼い孫たちにも読みやすいようにと、編集者の一存で現代仮名づかいに改めさせていただきましたことを、深くお詫びいたします。また、旧仮名づかいや、旧漢字に慣れ親しんで育った私たちの文章です。寛大なお気持ちで、辞書を引いていただければ幸いです。

100余名で入学した私たち、戦争のため疎開者や引き揚げ者で、たちまち定員オーバー。四年生の時は、三クラスで210数名のすし詰め学級となりました。教室で学習することより農作業や勤労奉仕、学校工場、冬のストーブに焚く薪取りなど労働の方が多かったように思える学校生活。近頃の子供たちのような楽しい思い出となるキャンプ生活や修学旅行もしていない私たちですが、女学生時代の思い出を今ここに綴ってみて、お互の心を交換し、より深い友情の絆で結ばれて、21世紀を平和な社会へと、力強く歩んでいきたいと願っています。

最後になりましたが、編集に当って主旨に快くご賛同いただき、投稿して下さった皆様、校正に携わって下さった多くの方がた、とりわけ制作にご面倒をおかけしました高橋陵治様、中前清子様、厚くお礼申し上げます。

編集委員一同